

下六嘉遺跡群

1901 地点

Shimo-Rokka Sites Loc.1901

- 調査
橋口 刑士 塩尾 勝平
- 編集
橋口 刑士

嘉島町教育委員会

2021

序

平成28年熊本地震から5年が過ぎようとして、町の至る所にあった地震の痕跡が日に少なくなっていく様子を見て、災害を経てなお復興していく町の力を見ているような気がします。

本報告書は、下六嘉の台地の上に新しく個人住宅が建てられるということを調査したものになります。これまで下六嘉遺跡群では壺棺や石棺墓などが確認されたと記載されたりしておりますが、本格的な発掘調査としてはこれが初めてとなりました。

調査の結果、わずか140m²の調査区から弥生時代中期から古墳時代前期にかけての遺構が確認され、遺物も大変多く出土しました。その量は他の町内遺跡で10倍以上の面積を一年間調査して出土する量と匹敵します。

出土遺物の量と内容は、いかに下六嘉の丘陵が古くから集落を形成する絶好の場として重要視されてきていたことの表れと考えています。また、これらの成果は矢形川を挟んで展開する上官塚遺跡をはじめとした北甘木台地の遺跡群との関連性も併せて今後の地域研究の進展に大きく寄与するものとして期待しています。

出土した資料は、昨年末に完成した嘉島町文化財センターに保管されており、今後広く活用されることを待ち望んでおります。本報告書を通じて学術的な側面への貢献だけではなく、文化財保護に対する关心と理解に貢献できれば幸甚です。

最後に、文化財保護の趣旨を理解し、調査に際して便宜を図っていただいた関係者各位に厚くお礼を申し上げます。

2021年3月

嘉島町教育委員会 教育長 高野 隆

例　　言

- 1 本書は、個人住宅建設に伴って実施した、熊本県上益城郡嘉島町下六嘉所在の下六嘉遺跡群 1901 地点の発掘調査報告書である。
- 2 本遺跡の調査は、嘉島町教育委員会が主体となり、社会教育課が調査を担当した。
- 3 資料の整理は、旧嘉島町公民館及び嘉島町文化財センターで実施した。出土資料及び記録は、嘉島町文化財センター及び上島倉庫に保管されている。
- 4 発掘調査時の写真は、橋口剛士・塩見恭平（佐賀県文化スポーツ交流局文化課から派遣、令和元年度）が撮影し、遺物写真については牛嶋茂が撮影した。
- 5 本書の執筆・編集は橋口が行った。
- 6 土層及び土器胎土の色調を示す際には、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』を使用した。

作業において下記の方々に尽力いただいた。

○発掘調査（五十音順、敬称略）

後藤章一 清水眞須江 西岡栄子 村上千佳 村上惇子 森下富子 森嶋まち子

○整理作業

石田敦子 岩下恵美子 岩野一子 緒方聰美 木村奈緒美 高田由美 奥村朝子
椎葉一代 田中裕子 溜渕俊子 土田みどり 永田清美 平井和子
平川恵里子 前田和子 森島ユリ子 森田ミドリ 山田由美 結城あけみ
吉田和子

発掘調査・整理作業の際に、次の方々からご指導をいただいた。（五十音順、敬称略、所属は当時）

中村誠希 宮崎敬士 木村龍生 木庭真由子（熊本県教育庁文化課） 阿比留史朗（鹿児島県教育委員会文化財課※1） 井鍋誉之（静岡県文化・観光部文化局文化財課※1） 池田毅（神戸市文化スポーツ局文化財課※2） 今村結記（鹿児島県教育委員会文化財課※2） 金田一精（熊本城調査研究センター） 白石溪牙（長崎県教育庁新幹線文化財調査事務所※2）

※1 熊本県教育庁文化課に派遣

※2 益城町教育委員会生涯学習課に派遣

※3 熊本市文化振興課に派遣

目 次

第1章 調査の経緯と体制	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査体制	1
第3節 調査の経過	1
第2章 遺跡の位置と環境	5
第1節 遺跡の地理的環境	5
第2節 遺跡周辺の歴史的環境	7
第3章 調査の成果	11
第1節 調査の方法	11
第2節 土層	12
第3節 縄文時代	15
第4節 弥生時代	19
第5節 古墳時代	62
第6節 包含層出土石器	80
附篇 下六嘉遺跡群出土の人形土製品 をはじめとした祭祀関連遺物について	106
第4章 総括	111
第1節 下六嘉遺跡群 1901 地点での調査結果について	111
第2節 遺構・遺物について	111
第3節 下六嘉遺跡群について	113
第4節 下六嘉遺跡群 1901 地点について	113
図版	114

調査の経緯と体制

第1節 調査に至る経緯

震災で被害を受けた住宅に代えて新たに住宅を建設することを目的として平成31年2月に事業地に対する遺跡地図照会があり、当該地が周知の埋蔵文化財包蔵地「下六嘉遺跡群」の範囲内であることから93条の届出と予備調査が必要な旨回答した。

その後地権者の同意が得られたことから平成31年3月に予備調査を実施した。結果、遺物出土深度地表から約30cm程度と非常に浅かつたことから、工法はベタ基礎であるものの破壊は免れないとの判断から次年度早々に調査に着手することとした。

以下は法的手続きを取った文書番号等を記すものである。

文化財保護法第93条 平成31年4月8日付け嘉教社第3号

* 第99条 平成31年4月8日付け嘉教社第4号

遺失物法第13条 令和元年8月7日付け嘉教社第586号

また、本調査を実施している中で相当量の遺物が出土している状況から次年度の整理作業開始では收拾がつかないとの判断で、進行中であった他の事業関連の報告書作成作業を調整して当該遺跡の整理作業を前倒しすることとし、発掘調査中である令和元年7月から遺物洗浄を開始した。

調査終了後も整理作業を進め、平成31年度中に接合作業などある程度の作業を完了することができた。翌令和2年度には、遺物実測や写真撮影などの記録作成作業を実施し、執筆を経て刊行に至った。

なお、各作業の進行については第1表のとおりである。

第2節 調査体制

今回の調査を実施した際の体制は、以下のとおりとなる。

【発掘調査・報告書作成】

平成31（令和元）年度

調査主体 嘉島町教育委員会

調査責任者 高野隆（教育長）

調査事務局 増永貴士（社会教育課長）

園田ひろみ（社会教育係長）

調査担当 橋口剛士（社会教育課 技師）

塩見恭平（同 技師 ※佐賀県文化スポーツ交流局文化課から災害支援派遣）

令和2年度

調査主体 嘉島町教育委員会

調査責任者 高野 隆（教育長）

調査事務局 増永貴士（社会教育課長）

園田ひろみ（社会教育係長）

整理担当 橋口剛士

第3節 調査の経過

1 発掘調査の経過

本調査は4月15日に着手し、8月1日までの約105日間実施された。

以下はその調査の抄録である。

平成31年4月15日

調査区を設定し、重機で掘削を開始する。

予備調査の結果どおり地表下30cmで遺物が多量に出土するもの小片が多い。

4月17日

人力での掘削開始。調査区を整備し、重機掘削によりでこぼこした面をならしつつ遺構を確認していく作業に入る。遺物は多く出土するものの遺構らしきものが見当らない。

調査区の壁面に沿ってトレンチを設定し、先

行して掘り下げる。

4月 18日

トレンチ内から夥しい量の遺物が集中する地点を複数確認。どうも遺跡中心はもう少し掘り下げたところにありそうだ。遺物も多く出土するがどういうわけか非常に土が硬い。さらに悪いことに遺物が集中する周辺の土とそうでない部分の土に大きな差が認められない。遺構の可能性はあっても黒色土の地山に黒色土の埋土であると考えられ、肉眼での認識が非常に厳しい状態である。

4月 23日

掘削を進めトレンチ内で確認した土器集中と同じレベルに到達する。ここに至っても本來あるべきニガシロ層が確認できない。深掘りトレンチにおいて土層を確認したところ周辺の台地で確認されるようなクロボク下のアカホヤ2次堆積土も欠いていることが確認された。包含層の土性としては硬くしまっていいるためクロニガに近いものと思われるが上記の鍵層を欠く上に包含層中から出土する遺物が弥生～古墳時代におよそ限定されている点からしても元来存在していた自然堆積層ではなく、集落等が經營されていく中で形成された土壤のようにも思える。調査区の断面には夥しい土器が突き刺さっている層が分厚く形成されていることもそれを物語っている。

平成31年4月25日

調査区北側壁沿いにトレンチを入れてみたところ西側と同様に土器の集中が認められる。

令和元年5月14日

調査区北側のトレンチで確認された土器集中の分布範囲がおよそつかめた。その他にも土器が集中して出土する部分が數か所認められる。遺構の存在を疑うも、掘り込み境界がはっきりとしない。遺構検出に難儀しそうだ。

5月 27日

出土する遺物は容器類が目立ち、祭祀具はあまりないようと思える。一方で高壙の脚も散見されるため一様ではない模様。

5月 30日

調査着手後はしばらく好天が続いていたが、こここのところ雨が多くなった。おかげで乾燥



5月の作業風景

しきって見えなくなっていた遺構のラインが姿を現した。ただし、相変わらず埋土と地山の炭を含むことと若干黒く感じる程度で区別が付きにくい。複数の土坑と住居を数基確認。遺物から古墳時代のものと推定する。

6月 6日

北側の土器溜まりには浅くくぼんだように見えるものがある。掘り込んだものかどうかは不明であるが、窪地に放り込まれたものであろうか。

6月 13日

古墳時代の住居等の掘削が進む。周辺を含めて相当量の土器が出続けている。また石器に砥石が目立っているが、焼けていたり被熱で破碎した痕跡を持つものも多い。また、敲石についても縁辺部が著しく変形するほどに叩かれたものを多く認める。これまで実施された町内の遺跡ではあまり見られない特徴であり、鍛冶場遺構等の存在に注意を要する。



調査区北壁付近土器集中

6月20日

晴れの日が続くと土質のためか表面の乾きがひどい。

7月4日

梅雨も終盤に近づいて、雨量が増している。ローム層に近いためか排水能力が弱い。そのため雨が降り続くと現場が冠水する。晴れたらポンプで排水し、乾燥させるため復旧に半日を要するようになる。また、隣接する堆土山から泥水が流れ込むため、現場の表面に泥が薄く堆積する。この除去にも時間を要する。

7月18日

住居は複数切り合っており、終盤ながら時間を使っている。事業者に事情を説明し、7月末まで調査を延長する旨伝える。

また、住居の完撮写真を撮影するための清掃作業中に住居周辺と内部に円形を呈する溝を認める。墳墓に伴う周溝かと思い色めき立つ。

7月30日

円形の周溝内部に埋葬主体となる土坑等が確認されないか精査を行う。結果いくつかの小土坑は認められるも埋葬主体とは考えにくい。また、溝も陸橋を持たず一周巡ること、遺物は少量含まれるもの流れ込んできたようなものばかりであり供獻等ではないこと、古墳時代の住居によって切られることから墳墓ではなく弥生時代後期あたりに見られる円形周溝状遺構の可能性が高いと判断する。

8月1日

撤収を完了し、すべての工程を終了する。コンテナ数54箱とわずか140m³からの出土量



円形周溝状遺構

としては圧倒的であった。

2 整理作業の経過

他の事業関係で整理作業中ではあったが現場での発掘作業と並行して整理作業を実施し、各段階において選考する作業を中断して事に当たった。

(1) 遺物洗浄作業

前掲の第表にあるとおり、出土遺物の量が膨大であるため現場中の令和元年7月から遺物の洗浄を始め、現場終了後の9月に完了した。

(2) 計記作業

その後間を開けずに計記作業を行い、ある程度の単位で終わり次第接合へ引き渡すこととした。

(3) 接合

接合の作業場が狭く、別遺跡の整理で壇棺の接合も同じ建物内で進められていることから膨大な遺物量を広げて接合を試みるには手狭であった。整理作業と並行して進められている町文化財センターの建設によりこれら問題は解決するものと思われるが、早くとも2年1月あたりの工期とみられることから難渋する。

現場ではあまり感じていなかったが、高壇類も容器類とともに非常に多い。また、土器は底部が目立つ。一部に壇棺のものと思われる底部が散見される。遺物の時期は遺構の中心時期である弥生末から古墳前期を核に弥生時代中期の遺物も



調査区冠水（6月）

それに混ざる。石器についても同様のことが言えそうである。

年末に工期より 1 月早く文化財センターが竣工し、年明けにセンターへ移転して作業場をフルに割り当てて接合の確認作業を行った。ある程度見込みが付いたところで 2 月 21 日に埋蔵文化財派遣職員定例会議を嘉島町で実施し、会議内で遺物検討会を実施した。

(4) 図化作業

膨大な遺物量であるため、接合・復元作業の完了を待っては間に合わないので、実測可能になった時点で実測を行い、終了したものを復元に回す段取りとした。当初捌ききれない分については図化の業務委託も考えたが、実測班の頑張りにより工期内に図化が完了した。淨書については実測作業が終わったものがある程度貯まってきたら処理するようにし、これについても順調に進捗した。

(5) 撮影

現場において記録写真については原則として調査員が撮影を行っているが、一部については牛嶋茂氏に依頼し、撮影を行っている。

整理作業の遺物写真については、牛嶋茂氏により令和 2 年 6 月と 7 月の 2 回に

分けて撮影を行った。

(6) 編集・執筆

令和 2 年度に入り、下六嘉遺跡群の原稿を進めつつ既存事業の本調査を併行して行ってきた。また、5 月には新型コロナウイルス関連で緊急事態宣言が発せられた事に伴い感染防止対策として自宅勤務が命じられた際には原稿を持ち帰って作業した。また、梅雨時期の現場休止期間中に一気に作業を進め、8 月には仕上がっていった図面等を DTP ソフトで配置、調整しつつ原稿作成を進めた。



遺物写真撮影の様子

第 1 表 下六嘉遺跡群 1901 地点作業工程表

	平成 30 年度			平成 31 年度									令和 2 年度									
	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8
調整・準備			---	—																		
発掘調査						—	—	—	—	—	—											
遺物洗浄								—	—	—	—											
註記									—	—	—											
接合・復元									—	—	—											
実測											—	—										
淨書																						
写真撮影																				●	●	

れ、人々は水田よりもわずかに高い部分（微高地）に住居を構え集落を形成している。

旧来から洪水常襲地帯と呼ばれてきたこの土地は、隣接する熊本市域を洪水から守るために遊水池の扱いを受けてきた。

幾たびかの河川付け替えにより御船川は矢形川から緑川へと流れようになり、大きな川沿いには堤や剝が設けられ現在でもその痕跡が点々とみられる。

刎については、外港として重要視されてきた川尻へ泥が流れていかないように設けられたとも考えられ、これにより流速を遅められた川は溢れやすく引きにくいという状況をもたらしている。

川尻港重視の考えは治政が加藤家から細川家へと移ったあとも引き継がれ、刎を取り除き流速を速めるよう出された地元の嘆願を却下するなどされている（齊藤家文書）。

これらが解消するのは明治に至って外港が川尻から三角へと移り、川尻の重要性が低くなつてからであり、大正～昭和にかけての大規模治

水工事により緑川・加勢川の蛇行部分を直線化したり、堰の整備や堤防の嵩上げなどを通して最近になってようやく達成されている。

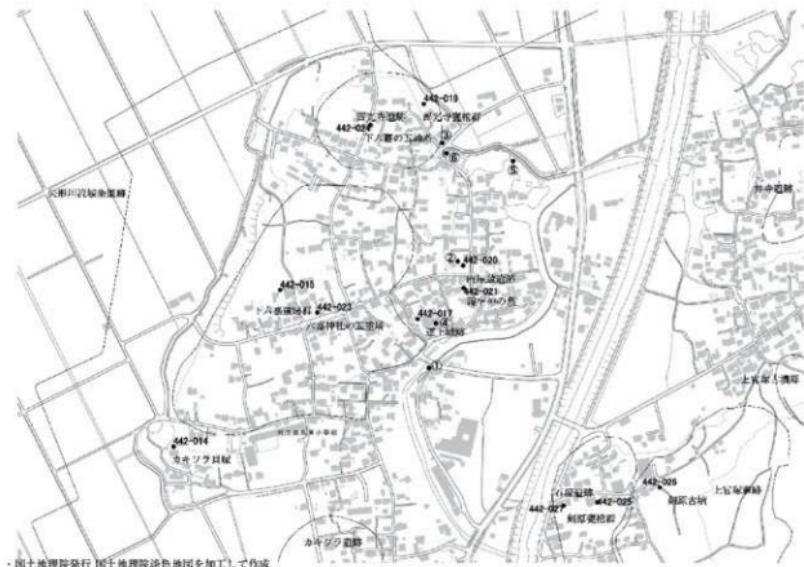
それでも堤防の破堤による浸水時は町の多くが水に浸かる事が予想されており（第3図）、平時は水の恩恵を受ける一方、非常時には危険にさらされているという状況にある。そうした中で下六嘉丘陵・北甘木台地・井寺丘陵については浸水の危険が少ないとから、遺跡もこれら標高が高い部分に集中する事が見て取れる。

第2節 遺跡周辺の歴史的環境

1 下六嘉遺跡群周辺について

下六嘉遺跡群周辺には多くの歴史的事物が存在する。下六嘉は六嘉村、それ以前の江戸期の手水制下においては鯨手水下六嘉村、それ以前は六嘉荘、さらにさかのばれば味木（甘木）庄に属する。

下六嘉丘陵付近は、湧水を背景とした人間の



第4図 下六嘉遺跡群周辺の文化財

嘗みが古くからあったと考えられ、多くの遺物が残されている。一方で頻繁に土地利用が更新されることから古い遺構は破壊され、新しいものが作られていくことから遺物は多く出るものの中構が残っていないことが多いようにも思われる。近世以降については石造物を中心に比較的多く残されている。特に水に関係するものが目立つものこの土地の性格を如実に表すものとして興味深い。

以下において下六嘉遺跡群周辺の文化財について説明する。なお、名称の後に括弧書きで記した番号については、熊本県文化課発行の遺跡地図（熊本県文化課 1998）における番号と一致する。また、今回遺跡地図に登載されていないものについても収録している。それについてはいざれ遺跡地図への登載を予定しているが、今回は仮に○○というように仮番号を付与している。

2 石造物

■団の地蔵尊（①）

矢形川左岸、六嘉橋のたもとに存在する。地蔵尊は文政 13（1830 年）7 月の紀年がある。六地蔵は地蔵尊の隣に置かれており、台はあるもののコンクリートブロック上に置かれている。時期は地蔵尊と同じく江戸期のものと推察されるが詳細は不明である。やや風化の具合が地蔵尊に比べて軽いため若干新しい移設された可能性がある。双方ともに地元の人により管理されており、花が手向けられている。

■六嘉神社の五重塔（442-023）

六嘉神社境内に存在する。元禄十三（1700）年の紀年銘がある。

■泉の南無阿弥陀碑（②）



団の地蔵尊と六地蔵

下六嘉泉にある。「元禄七年 南無阿弥陀仏三月八日」と刻まれており、元禄 7（1694）年のものである。

■逆修碑（護宿神の墓、442-021）

下六嘉泉にある民家の敷地内にある。上部上段にキリーク、下段左にサク、右にサと梵字が刻まれ、阿弥陀三尊である。下部に「永禄八年（1565）年 道環善男 活功德傳送識所 妙空信女 二月十三日 敬白」とあり、在家の信者夫婦が逆修を目的とした塔を建造したものと思われる。この碑の付近が内屋敷跡と呼ばれていることはこれに関連するものなのかも知れない。

一方、護宿神の墓と呼ばれていることについては、近隣にある護宿神社のいわれに勅勅を受け流罪となった四松式部卿を元応二（1320）年に祀ったものとされ、この碑は四松式部卿夫妻の墓となっているためである。

ただし、先述したように年号からすると



六嘉神社の五重塔



泉の南無阿弥陀仏碑



逆修碑（護宿神の墓）

200年以上を経過しており、彼らの墓標とするには無理があるものと思われる。

■西光寺の猿田彦（③）

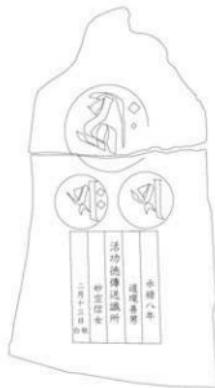


西光寺の猿田彦

西光寺と中通の境、湧水プールの脇に存在する。裏面に紀年銘が「天保十四年癸卯 初夏吉日建之 勇善」とある。

■仏誓寺阿弥陀如来碑（④）

仏誓寺境内、金堂の脇にある。当寺は金堂の墨絵と石臼敷きの境内が著名な寺である。願主である祐椋？聖人の周りに複数の戒名が記されている。心ない者が碑に直接墨を塗って拓本を取ったため、一字一字に四角形の墨跡がくつきり残っており痛々しい。



仏誓寺阿弥陀如来碑

泉の逆修碑は檀家個人で建立したものと言えよう。

3 遺跡・史跡

■道上城（442-017）

仏誓寺の周辺は道上と呼ばれ、かつて中世において城であったとされる。『肥後国誌』に「永禄・天正の比、阿蘇家家臣西越前守・西加賀守

相続テ城主タリ」

■宮ノ本壙棺群 (442-015)

下六嘉遺跡群の中に含まれる。下六嘉丘陵の西を北走する車川を望む丘陵緩斜面であり、今回調査した1901地点とほぼ標高を同じくする。空き地を踏査してみると表面に夥しい土器片、特に黒髪式と思われる壙片を認める。

■カキワラ貝塚 (442-014)

乙益重隆らによって 年に調査された。下六嘉丘陵の西側を北走する車川沿いの小高い部分に形成されたと考えられる縄文時代後期の貝塚であり、出土したシジミは汽水棲のものであることが田村実によって明らかにされた(田村1980)。土器は上層が出土式、下層は鐘崎式が主を占めるとする。

出土した人骨は現在熊本大学医学部で保管されている。出土遺物については所在不明である。

■西光寺壙棺群 (442-019)

下六嘉丘陵の北端付近の字名は西光寺という。西光寺一体に遺跡が存在し、壙棺群はその中に含まれる。詳細な場所については不明である。西光寺遺跡内で確認調査を行った際に壙棺片が認められるので、一带に壙棺墓群が存在したことは想像に難くない。

■下六嘉の五輪塔 (442-024)

『嘉島町史』に中通の泉福寺跡と呼ばれる場所がそれに当たるかと思われる。現地を確認できず、地元の人聞いてみてもはっきりとした場所を特定できない。町史掲載の際には小屋の中に石塔が無造作に寄せ集められており、これが存在する付近に寺があったことは明白であるがその小屋自体を現時点において確認できないため不明である。

4 農業関連遺構

■川添井樋跡 (⑤)

川添の湧水天然プールから矢形川へ流れいくところにある。現在では樋門としての用をなしてはいないが、部材が残されており一部は向こう岸に渡るための橋として使われている。馬門石とおぼしき赤い凝灰岩が用いられており、両岸に一本ずつ溝の穿たれた柱が現存する。樋は複数あったものだろうか橋として用いられて

いる部材はその名残かも知れない。

左岸側には「文化十一甲戌二月日」と刻まれており、文化11(1814)年のものである。

■復旧工事記念塔 (⑥)

湧水天然プールに隣接して建てられている。大正二(1913)年に洪水が起き甚大な被害を受けたことを受け工事を実施したものを記念して建てられたものである。これ以前にはしばらくの間改修が行われてこなかったことなどが碑に記されているため、前述の井樋完成以後100年近くにわたって特段用水路等の改修を行っていないかったことを示すものか。また、「國家兵備ヲ怠レバ亡國之民~」などの文言は当時の世相を反映している。



川添井樋跡



改修記念塔

調査の成果

第1節 調査の方法

1 調査の方法

(1) 発掘区とグリッドの設定

土地に対して建設予定により影響を受ける埋蔵文化財の範囲に調査区を設定し、その調査区に対して X:27510.000、Y:21780.000 を原点とした 5m メッシュを設定した。それぞれ原点から北方向に A ~ E、東西方向に 1 ~ 4 の記号・番号を付与し、それぞれの交点に A1、A2 というようにグリッド名を呼称することとした。

(2) 表土の掘削と遺構の検出

表土の掘削は重機で行った。多量の土器が出士したためその面で一旦そろえたが、その後人力で調査区を整備した際にすでに擾乱されているものの残りであることが判明したためさらに

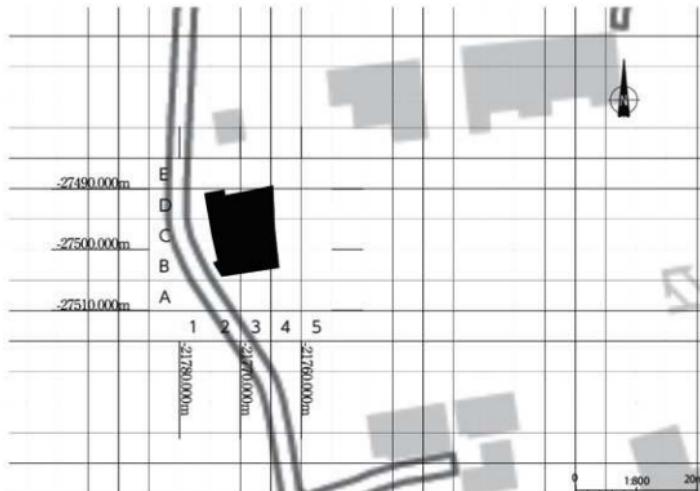
重機でその部分を掘削した。その際にも夥しい土器片が出土した。黒色土の地山に黒褐色の埋土で、遺構検出に難儀した。

2 記録の方法

(1) 遺構図面等記録作成

遺構や遺物の記録の方法として、平面図については Sfm/MVS による 3 次元計測を実施した。また、断面図については処理時間を考慮して従来通り実測図によった。

Sfm/MVS に使用した機種は、撮影を Ricoh 社 製 GR II (APS-C、1,690 万画素) 及び Olympus 社 製 OM-D E-M1 (マイクロフォーサーズ、1,628 万画素) を使用し、ポール (Lumica Bi Rod 6G-7500) によるリモート撮影した。処理については HP 社



第5図 下六嘉遺跡群 1901 地点グリッド設定状況

製 Z8 G4 及び同 Z440、ソフトは Agisoft 社製 Metashape Professional (Z8) 並びに同 Standard (Z440) を使用した。

処理により作成された三次元モデルからオルソモザイク処理により GeoTIFF を作成した。

QGIS に読み込んだ後、平面直角座標 (II 系) を入れ込んだ図面を印刷し、現場で確認後遺物の取り上げ等を行っている。

また、作成されたオルソ画像から Adobe 社 Illustrator2020 でトレース図を作成した。

(2) 写真

調査員が撮影する記録写真として、デジタルを Nikon 社製 D810 (35mm フルサイズ、3,635 万画素) 及び 6 × 7 判を Hasselblad 社製 503CX を使用して撮影した。また、適宜牛嶋茂氏に依頼し撮影を行った。

第2節 土層

1 土層堆積状況

地表下 30cm までは耕作土であり、さらに深さ 50cm 程度までは最近の耕作によると思われる数条の歓跡が認められる。その下部も耕作等により攪拌された土であり、通常丘陵上で見られる火山成土壤の堆積によるアカホヤなどの鍵層は確認されなかった (第 6 図)。

地山は Aso-4 風化堆積物による黄褐色土層である。一部の遺構についてはこれを掘り込み、床面として使用している。

2 堆積状況による地形

下六嘉遺跡群においてはこの地点の他に予備調査により土層堆積状況と遺物包含状況が明らかにされている。それらの結果を照らし合わせつつ旧地形がどのようなものであったかを推測していく。

本調査も含めて過去に下六嘉遺跡群の範囲内

において調査が行われた箇所は 15ヶ所に及ぶ (第 7 図)。多くは今回と同様に地震被害による民家の建て替えに伴うものである。

下六嘉遺跡群の範囲は比較的広いため、丘陵上の尾根部分から緩斜面に至るまでバリエーションに富む。

ここ最近の予備調査により、下六嘉丘陵及びその周辺における地形の状況把握が進んできた。以下でこれについて概観することとする。

なお、図中各地点の標高については、国土地理院の「標高がわかる Web 地図 (<http://saigai.gsi.go.jp/2012demwork/checkheight/index.html>)」から得られた標高高地に基づいて再配置を行っている (第 8 図)。

(1) 丘陵頂部～尾根緩斜面

頂部～尾根部に関しては概況として、土質が火山灰土壤である点では共通する。ただし鍵層となる特徴的な火山灰層位は遺跡の基盤層となる Aso-4 風化堆積物の黄褐色粘土層以外は明瞭でない。また、自然堆積土の相当部分まで削平が及んでいる。特に頂部付近は標高 15m 前後で黄褐色粘土が確認されるがその上部に堆積する土層のほとんどが失われている。

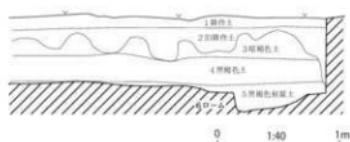
頂部から尾根斜面にかかるとやや削平の度合いが弱まる傾向にあると見られ、若干ではあるが削られずに残される堆積土が認められる。とは言え遺物を包含する深度に一番近いのはこの辺りであることから、今回の件の様に本調査を要する可能性が高い部分である。

以上の点から頂部付近にある六嘉神社周辺は地形の平坦化を目的とした削平が広範囲で行われた結果、元来あるべき自然層位の多くを失っている。また、尾根部から続く緩斜面においても畑・宅地等の造営によりそれぞれの標高において平坦化がなされ、特に裾部においては削平が激しく黄褐色粘土層以上の土を喪失しているものも認められる。

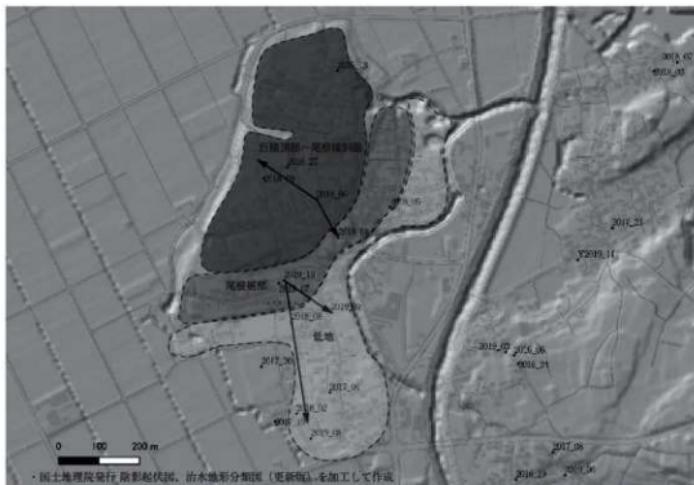
(2) 丘陵裾部～低地

丘陵裾部にある断層崖を境に土層の堆積状況が変化する。断層崖より頂部側へは、頂部から続く土層堆積となつておらず、前述したように大きく削平されている。

一方断層崖から低地方向にかけては 2m 程度



第6図 下六嘉遺跡群 1901 地点土層概念図



第7図 下六嘉丘陵及び付近の土層堆積状況

の落差を有し、遺物包含層は高いところで標高9m付近に位置する。そこから凹地状地形に向かって2m程度傾斜し、端部で再び隆起する。

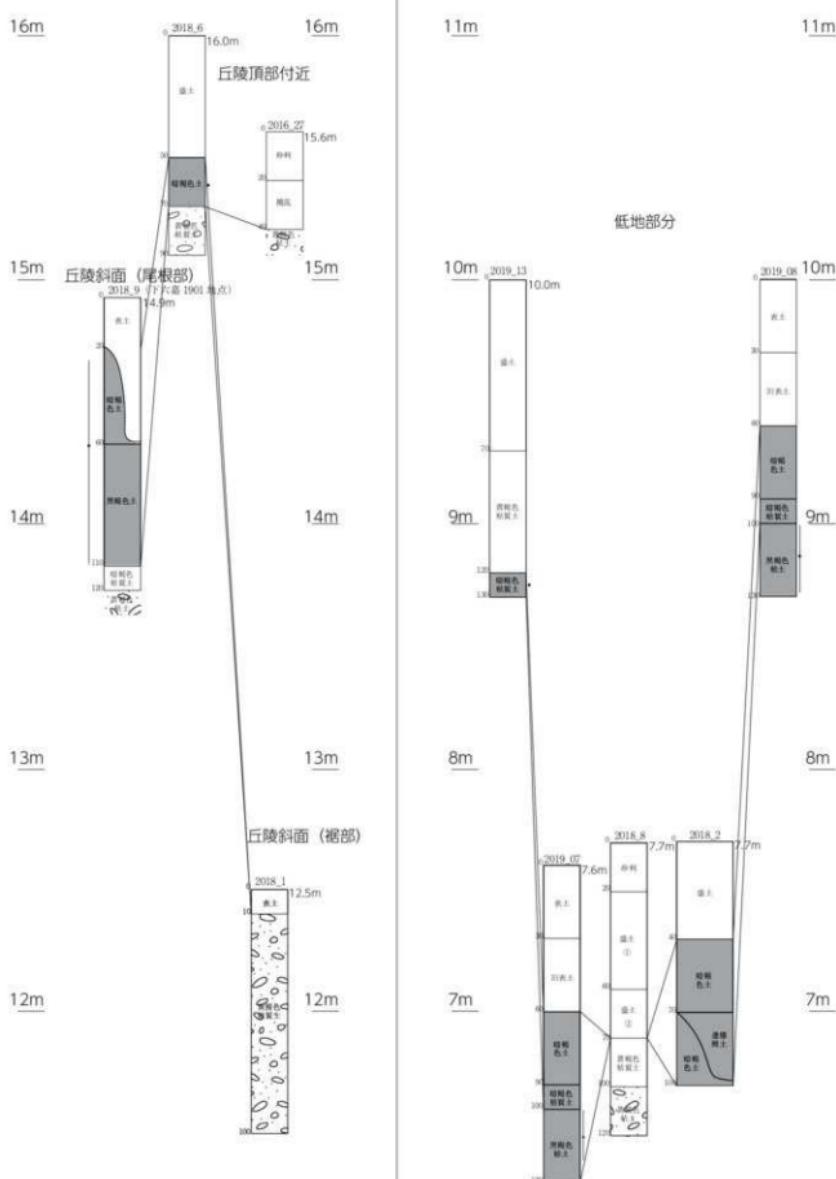
(3) 小結

下六嘉丘陵の頂部から低地にかけて共通して言えることは、一定程度標高の高い部分については低地部分においても火山灰性土壤であるという点である。それよりも低い位置（2017_10 及び 2017_20）では河川堆積物のような土壤である。

また、どの地点においても一定程度削平されており、地山である黄褐色粘土層より上の土の多くは失われている。その後盛り土をして下げた土を嵩上げするような動きも見られ、洪水対策等によるものなのかも知れない。いずれにせよ自然層位の多くはこれら営為により失われている。遺物も出土する場合もあるが二次的なものであったりするなどの点も、上記のことを裏付けるものであると考える。

なお、遺物は暗褐色土・黒褐色土に多く含まれている。時期も弥生～古代に中心を置いており、対岸の北甘木台地でのそれに近い。深度は

違えど丘陵上のどの地点でも同じように出土することから、中心域となる地点を有しながらも丘陵上に広く展開する可能性があると考えられる。地点による性質の違いについてはまだ明らかではないが、今後この丘陵上で調査が増えることで少しづつ判明していくものと思われる。



第8図 下六嘉丘陵及び付近の土層堆積状況

第3節 縄文時代

1 縄文時代

(1) 遺構

縄文時代に確実に位置づけられる遺構は認められなかった。遺物は少數ながら出土している。

(2) 遺物（第9、10図、第2表）

割合としては非常に低いが、数点の縄文時代遺物が認められる。

ア 打製石鎌

3点出土している。それぞれ基部中央に抉りを持つもの（1）と基部が水平なもの（2）、脚を有するもの（3）である。1,2は安山岩製、3は腰岳産黒曜石製である。

イ 削器・搔器

4は削器である。不定形剥片の縁辺部を打ち欠いて刃部を形成する。5は搔器である。継長に近い剥片を素材に打点側の分厚い部分に押圧剥離による調整を加え刃部とする。腰岳山黒曜石製。

ウ 打製石斧

6は複数に分割された大きな剥片を素材とする。大きな剥離によっておよその形に整形し、細かい剥離を加えて製品とする。刃部には使用の結果生じたと思われる破損の痕跡とその後の使用に伴う小剥離を認める。こうしたことから上下方向の運動方向による使用が推定される。安山岩製。

7は打製石斧である。扁平で大きな岩を素材に大まかに両面加工しおよその形に整える。一見して未製品のようであるが、上下両端の破損後打撃による整形を受けており、製品であったものが破損した後転用を試みたものと思われる。

エ 磨製石斧

8は蛇紋岩製の磨製石斧である。粗削整形後彫琢によって表面を処理し、研磨によって仕上げた結果、長楕円形の断面を有する。上下両方も欠いている。

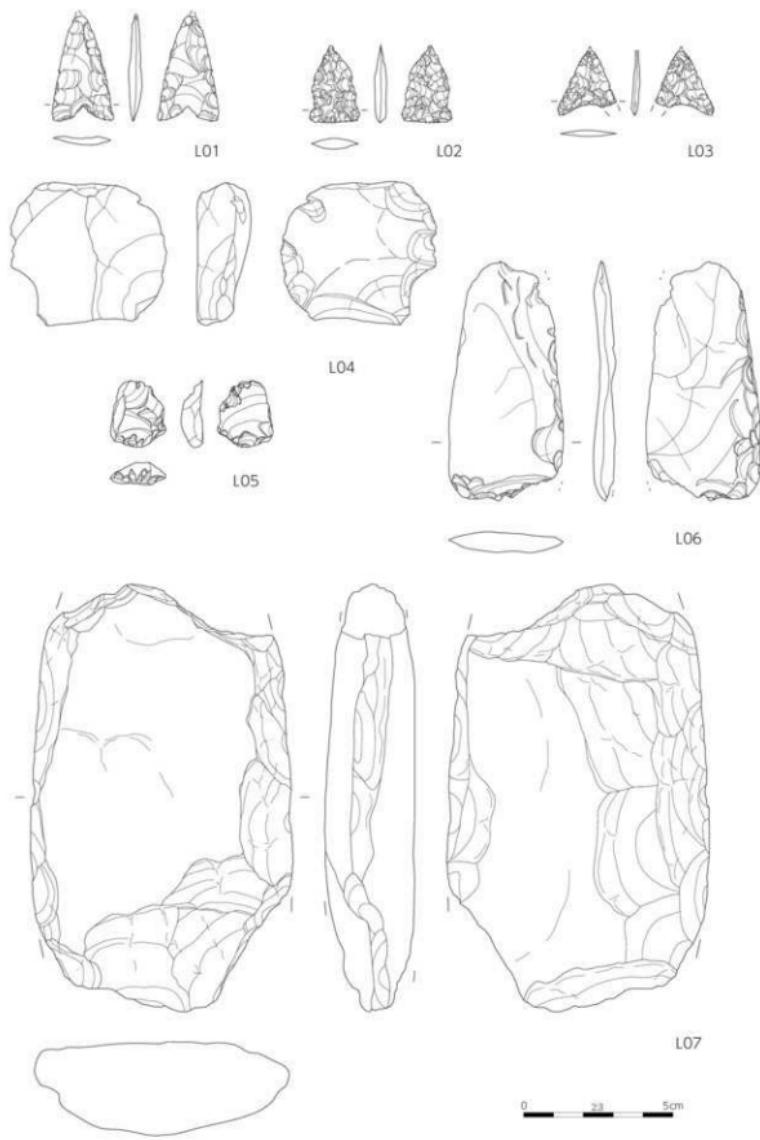
9は磨製石斧である。上部のみで他を欠く。上端部は厚みを減じる目的のためか複数の剥離痕が認められる。その部分に対しての研磨はあ

まり行われず、剥離痕の後は明確である。一方で裏面及び側面は丁寧に研磨されており、表面は滑らかである。

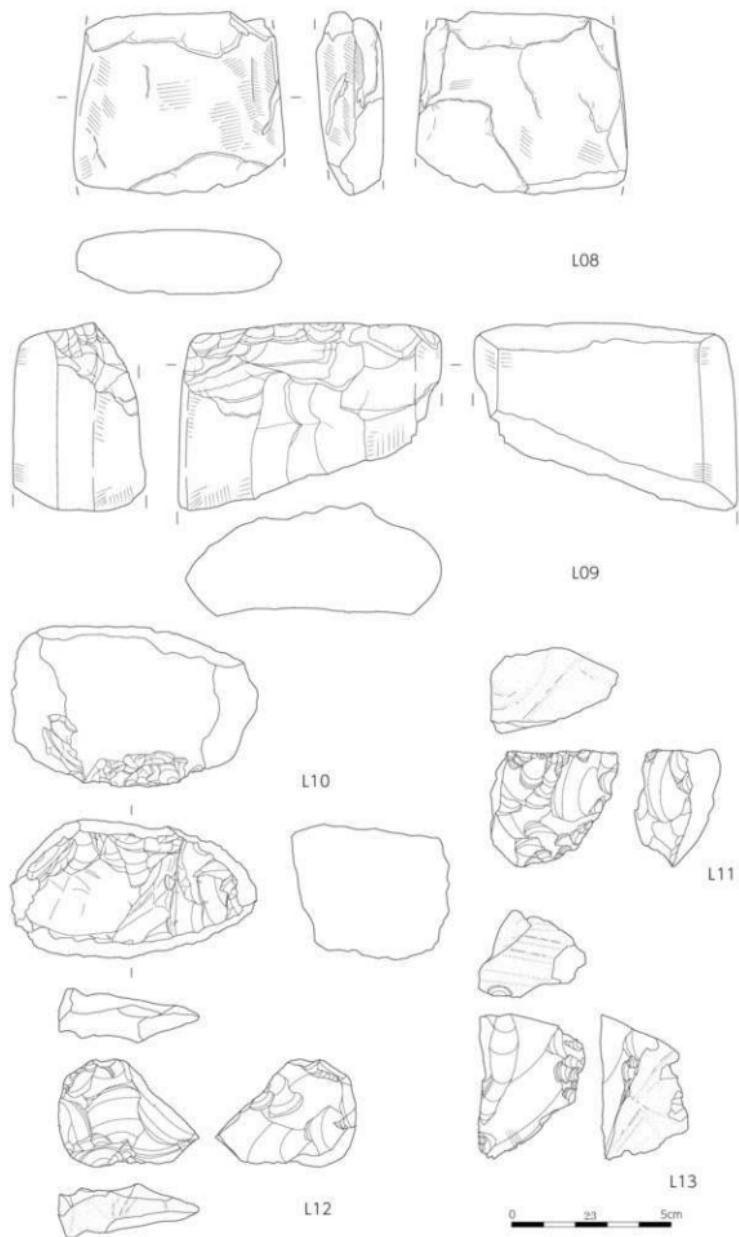
オ 石核

10は河原で採取されたチャートの原歴を石核として利用するために打綿調整を加えつつ数回打撃による剥離を試みたものと思われる。結果枚数程度はある程度の剥片が剥離できたようであるが最終的には効率が悪いと判断されたためか破棄されている。

11～13は腰岳山黒曜石の石核である。共通して原歴面を多く残しており、元々の原石自体がそれほど大きくなかったことを示す。数回打綿転移を行いつつ剥片を剥離している。13は継長剥片を意図しようとしているように見受けられるため、縄文時代後期のものと推定される。



第9図 繩文時代石器実測図



第10図 縄文時代石器実測図

第2表 繩文時代石器観察表

挿図	調査区	遺構	層位	時代	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
L001				縄文	打製石鏃	3.50	2.05	4.50	2.40	
L002				縄文	打製石鏃	2.59	1.69	0.40	1.45	
L003			3	縄文	打製石鏃	2.15	1.96	0.29	0.78	腰岳0b
L004	B2		3		磨石	7.70	4.10	3.19	70.30	
L004	B3		3	縄文	削器	5.20	4.80	1.82	47.76	
L005				縄文	搔器	2.25	1.85	0.75	2.78	
L006				縄文	打製石斧	8.04	3.81	0.75	23.91	鞍山岩
L007				縄文	打製石斧	14.36	8.92	3.15	559.80	片岩
L008	C3		3	縄文	磨製石斧	5.78	6.65	2.10	126.62	蛇紋岩
L009			4	縄文	磨製石斧	5.90	8.32	4.10	293.14	鞍山岩
L011	D2		3	縄文	石核	3.67	4.02	2.70	38.56	腰岳0b
L010	B3			縄文	石核	4.43	7.77	5.02	219.81	鞍山岩
L012			1	縄文	石核	3.40	4.41	1.70	17.85	腰岳0b
L013				縄文	石核	4.59	2.77	3.20	27.92	腰岳0b

第4節 弥生時代

多くの土坑は遺物を含まず、明確に弥生時代に位置づけられる遺構は少ない（第11図）。

1 遺構・遺構内出土遺物

(1) 円形周溝状遺構

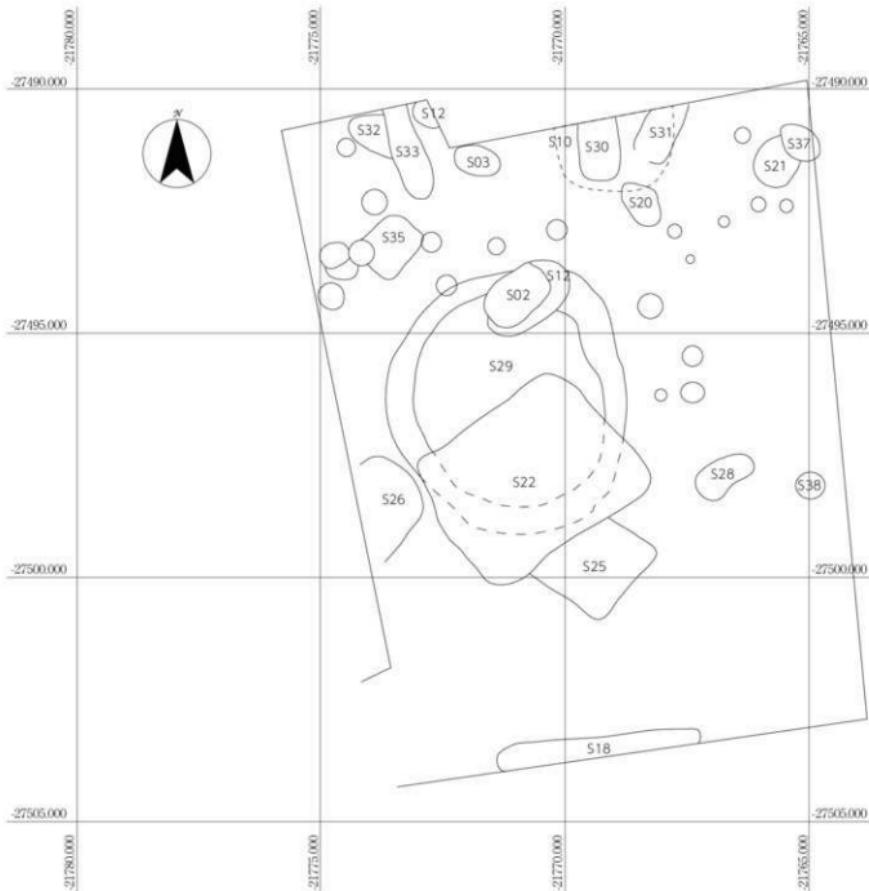
【S29（第12図）】

S29は溝の幅は60cm～1m、直径は5mのほぼ正円に近い形状である。陸橋ではなく、内部

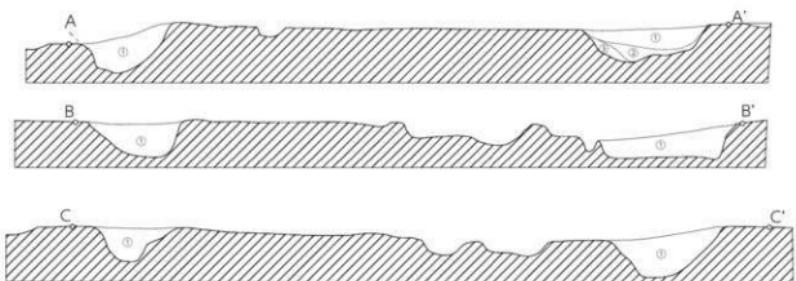
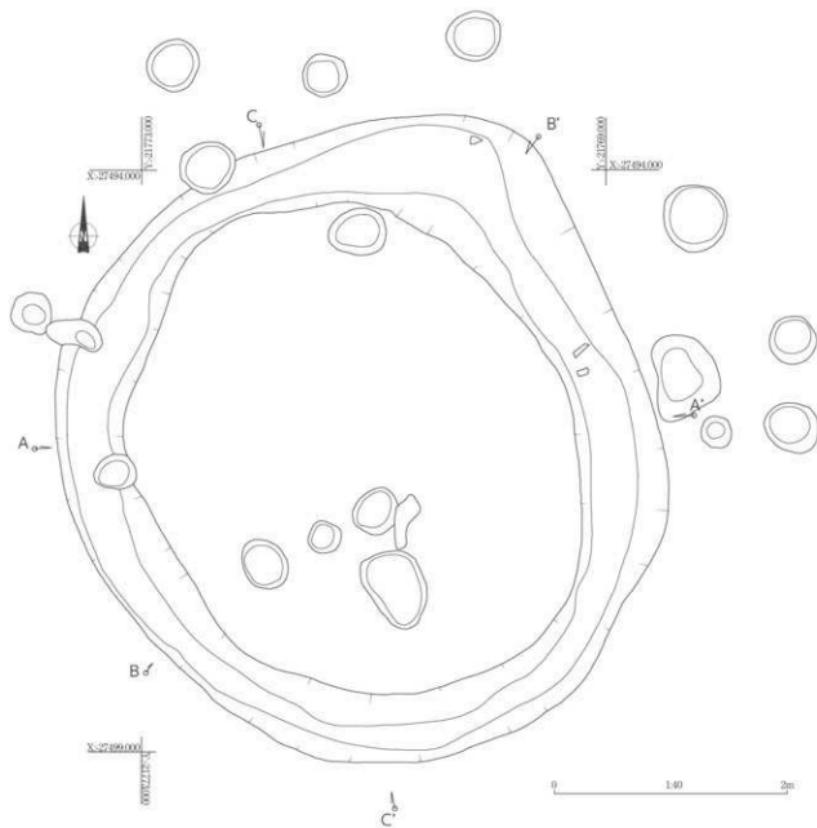
区画にこれに伴う埋葬主体と思われる土坑などは確認されなかった。また、古墳時代の住居（S22）によって切られる。

遺構の大部分を古墳時代の住居によって切られており、特に周溝内部については住居の床になっていたため本来はもう少し高いマウンド状を呈していたのかと思われる。

遺構の形成について、遺構の中に掘り込まれた土坑等で見える土の観察から、地山を切り込み溝を形成することで内部と外部を分ける区画



第11図 下六嘉遺跡群 1901 地点遺構配置状況

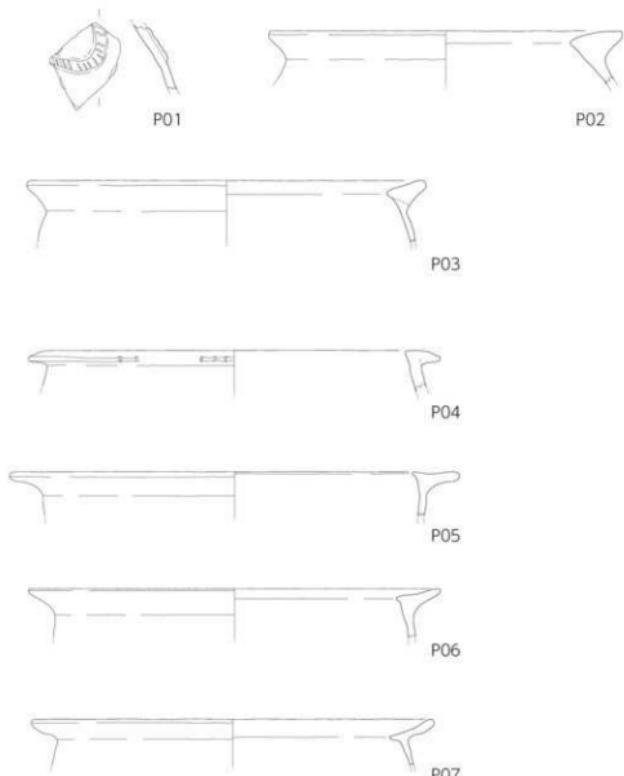


①層 : Hue10YR2/3 黒褐色土

②層 : Hue10YR2/3+Hue10YR3/4 黒褐色土 + 褐色土

③層 : Hue10YR3/4 褐色土

第 12 図 円形周溝状遺構 (S29) 実測図



第13図 円形周溝状遺構 (S29) 実測図

第3表 S29 出土遺物計測表

地 図 番 号	グ リ ッ ト F	出 土 場 所	区分	器種	部位	口径 (cm)	縦高 (cm)	基準 (cm)	蓄和材	色調(外)	色調(内)	調整(外)	調整(内)	施成	備考
P01 S29	-	① 仰生上層	直	斜面	-	(3.3)	-	-	角閃石、雲母 赤色焼化灰	淡黄褐 Ran1098.3	灰白 Ran2.077.1	ナダ	ナダ	良好	丸み付鉢形又 圓盤式
P02 S29	-	① 仰生上層	側	口縁 ～側面	(21.8)	(3.3)	-	長石、石英、角閃石 赤色焼化灰	青白 Ran7.3100.8	緑 Ran0197.6	ナダ	ナダ	良好		
P03 S29	② 仰生上層	側	口縁 ～側面	(24.6)	(3.8)	-	長石、石英、角閃石 赤色焼化灰	青白 Ran7.0197.4	青白 Ran1098.6	ナダ	ナダ	良好			
P04 S29	-	① 仰生上層	直	口縁 ～側面	(24.0)	(2.8)	-	長石、角閃石、雲母 赤色焼化灰	青白 Ran1096.1	青白 Ran7.3107.2	ナダ	ナダ	良好		
P05 S29	-	① 仰生上層	直	口縁 ～側面	(25.0)	(2.6)	-	長石、石英、角閃石 赤色焼化灰	灰白 Ran1098.2	灰白 Ran1098.1	ナダ	ナダ	良好	10mm幅に丸み更進	
P06 S29	② 仰生上層	側	口縁 ～側面	(25.0)	(3.6)	-	長石、石英、角閃石 赤色焼化灰	青白 Ran7.5197.3	青白 Ran7.3107.4	ナダ	ナダ	良好			
P07 S29	-	② 仰生上層	側	口縁 ～側面	(27.7)	(3.7)	-	角閃石、雲母	淡黄褐 Ran7.0198.4	淡黄褐 Ran7.0198.4	ナダ	ナダ	良好		

を作り出していることがわかった。

時期については明らかにこの時期と言えるような遺物が遺構中から出土しなかつたため判然としないが、古墳時代前期の住居に切られるという状態であったので、少なくともそれに先行するものであるということになった。

この遺構の周辺地域における類似事例を鑑みると、弥生時代であると推定される。遺構内の出土遺物は弥生中期あたりのものを中心としているが小片であり遺構が作られた際に巻き込んで

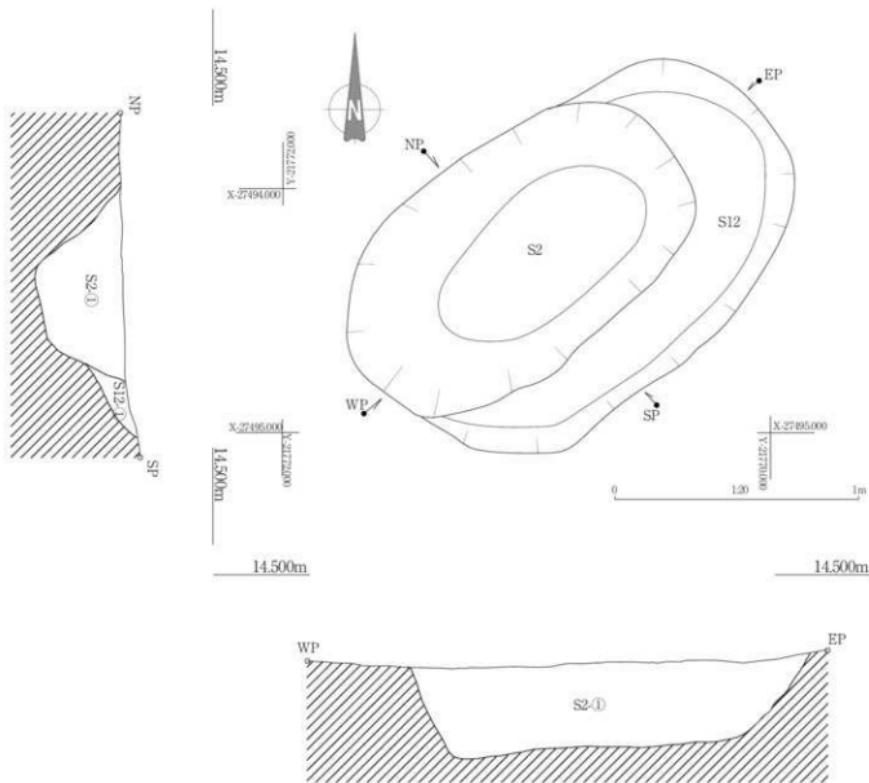
だものか埋没過程で流れ込んだものである（第13図）。

これらを総合すると当遺構の推定時期は弥生時代中期後葉～後期前葉あたりが時期として妥当ではないかと思われる。

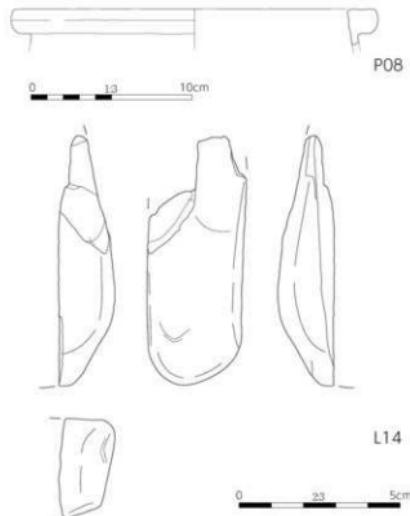
また、これが存在するのは集落域の端部付近に多く存在する傾向についても当遺跡の集落域を推定する上で重要なものである。

(2) 土壙墓（第14～18図）

いくつかの土坑についてはプランや大きさに



第14図 土壙墓（S02, S12）実測図



第15図 S02出土遺物実測図

より土壙墓の可能性があるものと推定される。いずれの土壙墓においても人骨は確認できなかつた。また、木棺を納めるための痕跡を探つたが、確認できなかつた。遺物についてもはつきりとした年代観を与えるものはほとんどない。

S02(第14図)

長楕円形の土坑である。S12を切るように掘り込む。埋土中から小片ではあるが中期の甕口縁部(P08)及び太形蛤刃石斧片(L14)が出士した。ただし甕及び石斧ともに小片であり、副葬品とは思えないため埋土中に混入したもの

と推定される。

○ S02出土遺物

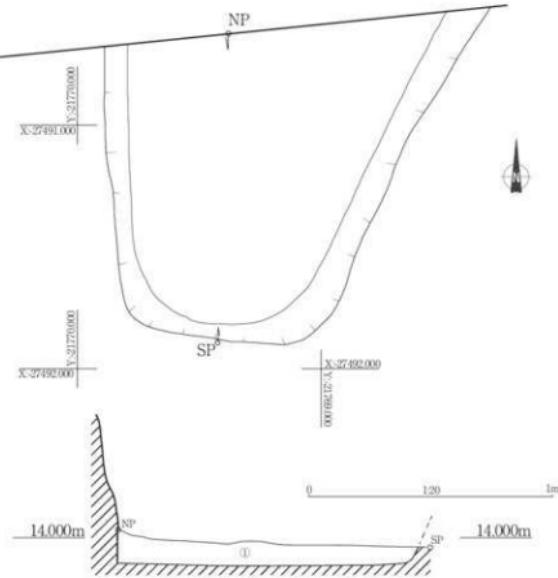
甕 8は甕の口縁である。口縁部は四角い粘土帯を貼り付けることで角帶状を呈する。口径は22.6cm、内外器面ともにナデ調整が施される。形状から時期は中期初頭に属する。

磨製石斧 14は太形蛤刃石斧の刃部片である。蛇紋岩製であり側面においても研磨されているなど比較的丁寧な整形によるものである。主となる使用方向からの破損ではなく、横方向からの衝撃により破損しており、偶発的な事象による破損と思われる。

第4表 S02出土遺物計測表(土器)

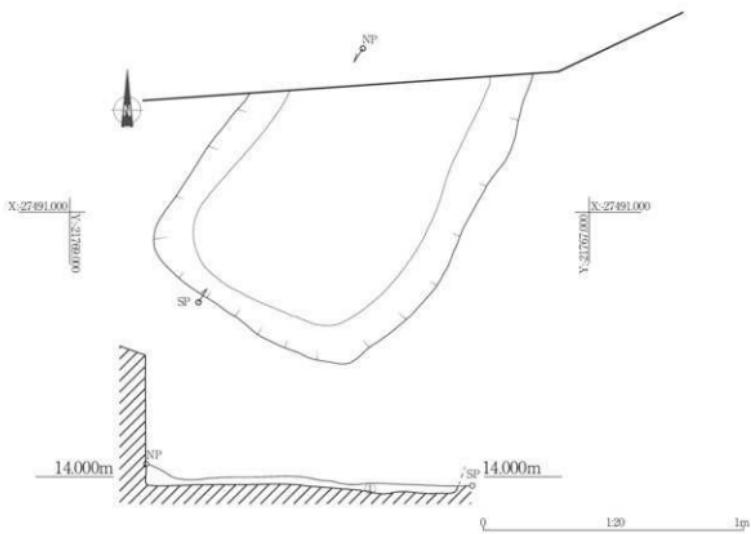
種 別 遺構 名 号	ダ ラ リ 土 層 位 D	出 土 部 分	器種	基底	口径 (cm)	高さ (cm)	底径 (cm)	泥取材	色調(%)	色調(内)	調整(%)	調整(内)	地底	備考
P08 S02	-	-	陶土罐	廣	口縁 ~底盤	(22.6)	(2.1)	-	黄	に赤い縁 Hue7.3197.3	に赤い縁 Hue7.3197.4	ナデ	ナデ	良好

捕団	調査区	遺構	層位	時代	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
L014		S02	③	弥生	石斧	3.91	4.93	2.74	35.16	



第16図 土壌墓(S30)実測図

X-27490.000
Y-343769900



第17図 土壌墓(S31)実測図

【S12（第14図）】

長楕円形の土坑である。弥生中期のものと考えられ、S02との関連から初頭に位置すると思われる。

【S30.31（第16.17図）】

S30.31は調査区北側で遺構の南半分が引っかかるように確認されたものである。およそ場所も近く方向や形状も似通っている。掘り方は素掘りであり床面は平坦である。幅はおよそ1m程度、長さは2~2.5m程度と推測される。

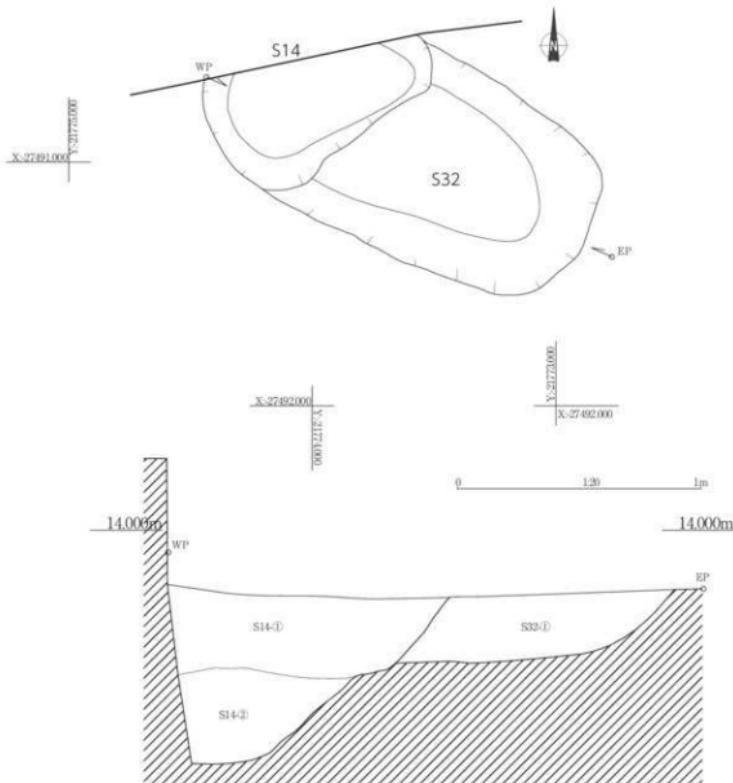
【S32（第18図）】

S32は隅丸の長方形を呈する。土坑のS14に切られている。幅は約1m、長さは約2mであり、S30.31に比べるとやや細身ではあるが、形状はよく似ている。掘り方は素掘りであり、床面は平坦である。埋土中から弥生中期初頭~前葉の壺の底部が出土している。

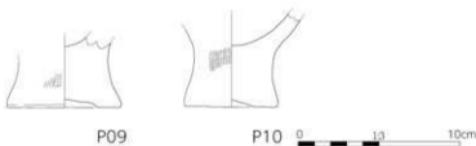
(3) その他土坑

【S3.14.26.28.35.37（第18.20.21図）】

S3はやや楕円の土坑である。幅約50cm、長さ約1mと比較的小さい。



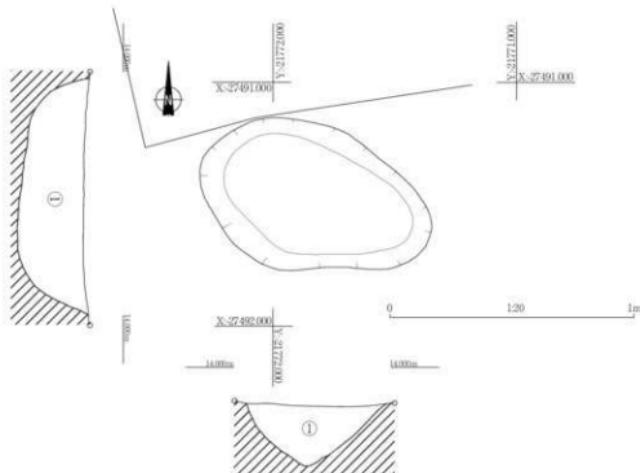
第18図 土壙墓（S32）実測図



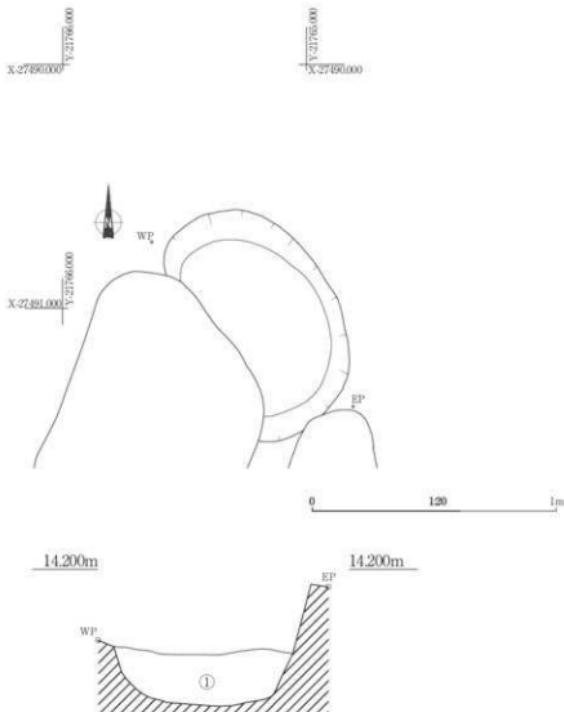
第19図 S32出土遺物実測図

第5表 S32出土遺物計測表

測定番号	グリッドF	出土位置	区分	基盤	頂部	口径(cm)	高さ(cm)	直径(cm)	裏面材	色調(外)	色調(内)	測定(外)	測定(内)	構成	備考
P9 S32	-	1	陶土器	壺	腹	4.40	7.1	4.40	灰石、青閃石 青色顕化粒	褐色 Hue:387/6	褐色 Hue:387/2	ナゲ	ナゲ、ハケ有	直付	
P10 S32	-	1	陶土器	壺	腹	5.40	8.7	5.40	灰石、青閃石 青色顕化粒	褐色 Hue:387/6	褐色 Hue:387/2	ナゲ	ナゲ、ハケ有	直付	



第20図 土坑(S3)実測図



第21図 土坑(S37) 遺構実測図

S14はS32を切る土坑である。幅50cm、長さ約1mとS3に形状はよく似る。深さは70cmを測る。S3も元来はその程度の深さがあったのかも知れない。

S37は幅60cm、長さ約1mでS3.14と形状がよく似ている。上部は削平されており、残存する部分での深さは20cmを測る。

[S26 (第22図)]

調査区西側の壁に半分程度見られた土坑である。当初住居の可能性も検討したが、不定形であることから土坑として扱った。

○土弾 (第22図11)

11は土弾である。紡錘形を呈し、中央付近でやや肥厚する。一見して土錐のようであった

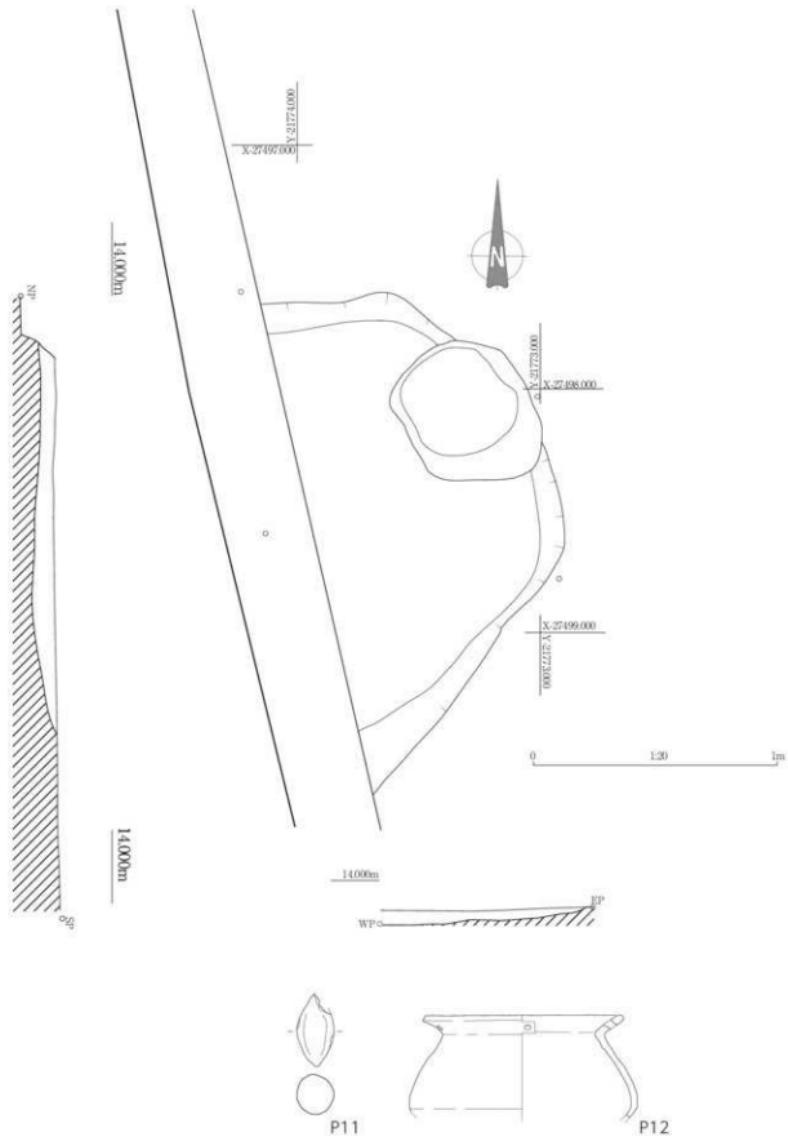
が穿孔が認められること、他遺跡での類例から判断して土弾とした。先端部を欠損する。

○穿孔鉢 (第22図12)

12は口縁部に穿孔がある鉢である。鉢の形状は外反する口縁と同部中央で大きく膨らむ。口径12.4cm、底部は破損しているため推定となるが残存高63であることから10cm前後と見られ、やや小ぶりである。口縁の外反と脣部の膨らみにより「く」の字状を呈する。口唇部はナデにより最外部で尖る形状をなす。口縁～くびれ部との中间あたりに4カ所焼成前穿孔を施す。

[S28 (第23図)]

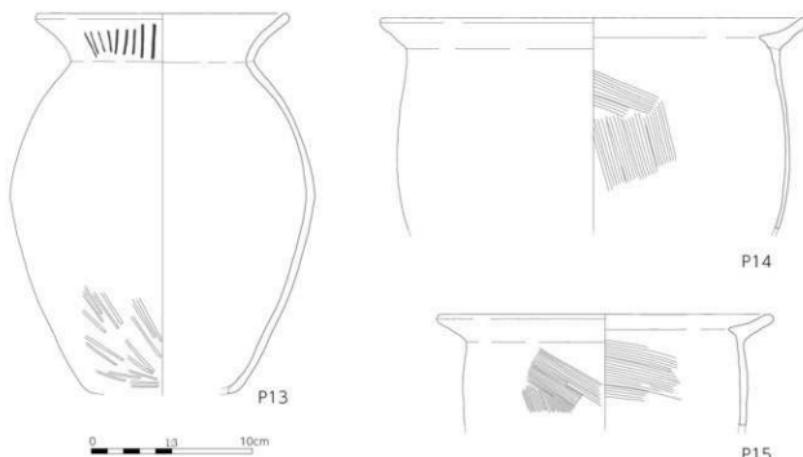
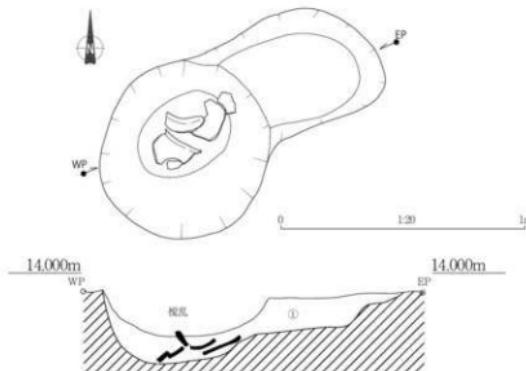
土坑の一部を搅乱で削られている。搅乱の底



第22図 土坑(S26)遺構実測図

第6表 S26 出土遺物計測表

器 種 名 称 番 号	遺 構 ア イ ド リ フ ラ ム	出 土 層 位	分 区	器種	部位	口径 (cm)	高 さ (cm)	底径 (cm)	混和材	色調(内)	調査(外)	調査(内)	構成	備考
P11 S26	-	I	陶生土器	鉢	口縁 ～側面	12.4	8.13	-	長石、石英、角閃石 雲母。赤色顔化粒	褐色 Rox3W7/6	褐色 Rox2.5W6/6	ナゲ	ナゲ	良好 穿孔4+
P12 S26	-	I	土製品	土作	-	最大径 2.3	最大高 (4.4)	重量 22.6kg	雲母	褐色 Rox7.5W6/4 Rox10W7/1	-	ナゲ	ナゲ	良好 全体的に黒色。



第23図 土坑(S28) 遺構・出土遺物実測図

第7表 S28 出土遺物計測表

井戸番号	遺物名	グリッド位置	出土層位	区分	器種	部位	口径(cm)	最高(cm)	底径(cm)	並列材	色調(外)	色調(内)	調整(外)	調整(内)	施度	備考
P13_S28	C3	I	生土上部	表	口縁～底面	(17.6)	(23.4)	(9.2)	黄瓦	青銅鏡 Hn7.5V88.6	にぶい緑 Hn7.5V87.4	ナゲ、ミガキ 複文	ナゲ	良好	外部面に縦行脊	
P14_S28	C3	I	生土上部	裏	口縁	(30.0)	(9.8)	—	鉛石、石英、青閃石 雲母、赤色酸化鉄	にぶい緑 Hn7.5V87.3	にぶい緑 Hn7.5V86.2	ナゲ、ハケ目	ナゲ、ハケ目	良好	外部面に縦行脊	
P15_S28	C3	I	生土上部	裏	口縁～脚部	(36.2)	(13.0)	—	鉛石、石英、青閃石 雲母、赤色酸化鉄	にぶい緑 Hn7.5V87.4	にぶい緑 Hn7.5V86.4	ナゲ	ナゲ、ハケ目	良好	外部面に赤茶の脈線	

面から土器が露出しており、それに続いて底付近で土器が出土している。いずれも破損品であるが破片は比較的大きかった。壺と甕が出土し、甕は底部を欠く。土器にあまり時期差は認められず、中期に属する。

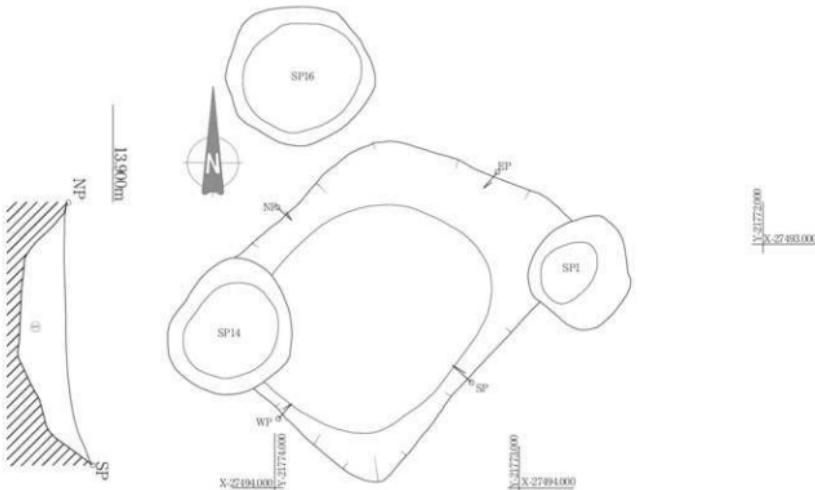
○壺 (第23図13)

13は壺である。底部付近にミガキ、口縁部に赤彩が施される。

○甕 (第23図14.15)

14.15は甕である。内湾する口縁部で内側に

至るまでに下方に向かって内側の突起は明瞭であり、その突起を過ぎてからやや外に傾いた後流れるように下方へ向かう。底部を欠いているが平底もしくはやや上げ底の底部が想定される。調整については15は胴部中頃から欠くため不明ではあるが、14と同様内器面は胴部中頃あたりを縦方向のハケ、くびれ部あたりを横方向のハケ目調整、外器面は横に近い斜めのハケ目である。14は口径26.2cm、15は口径20.8cmを測る。



第24図 土坑(S35) 遺構実測図

【S35（第24図）】

S35は幅1m、長さ1.3mの隅丸方形を呈する土坑である。床面は北方向に向かって傾斜している。

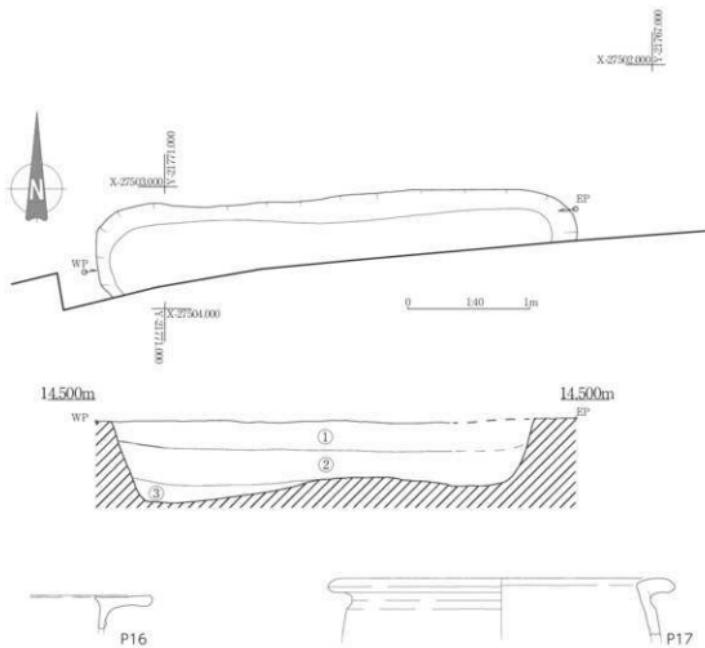
(4) 溝

【S18（第25図）】

東西方向に走る約38m程度の溝である。深さは60cmとある程度しっかりとしているが、延長は調査区内で留まるなど短く、同等のものが他にも認められないことから性状は不明である。埋土中に含まれる土器片から弥生中期前葉～中葉に属すると推定される。

○甕（第25図16,17）

16は甕の口縁部である。口縁はやや内傾し、やや肥厚する。口縁部はナデにより平坦に仕上げられるが、口唇部は下方に傾斜し最外部で尖るように整形される。また、口縁下部はナデにより抉りを巡らす。口径は21.4cm。17は平坦な口縁を有する甕である。口縁部は若干下方にくぼみ、内側は突起状に鋭く飛び出す。口縁下部に突帯を1条巡らす。



第25図 溝(S18)出土遺物実測図

第8表 S18出土遺物計測表

測定番号	測量	引 り 方 法	出土 量 目	区分	通幅	深幅	口幅 (cm)	溝高 (cm)	底幅 (cm)	葉和材	色調(外)	色調(内)	調査(外)	調査(内)	傾傾	備考
P16 S18 B2 1	歩行上部	直	~	直	口縫 ~縫出	(21, 4)	(3, 5)	-	黄木、石板、角閃石 雲母、赤色鉱化板	12.5×1.黄 木	12.5×1.黄 木	ナゲ	ナゲ	0.6%		
P17 S18 1	歩行上部	路	~縫出	直	口縫	-	(1, 9)	-	黄木、石板、角閃石 雲母、赤色鉱化板	12.5×1.黄 木	12.5×1.黄 木	ナゲ	ナゲ	直好	横出に雲母1束	

2 包含層出土遺物（土器）

調査区内から遺構に伴わざ出土した遺物が多数存在する。器種は壺・壺・鉢・高杯などで、特に壺が多い。また、破片の状態が非常に多く、底部まで接合できる例は稀であった。そのような状態にあるため、今回容器類については口縁部と底部を中心に報告する。

また、個別の観察結果については第表にまとめて掲載している。

(1) 壺 (第26~40図)

今回弥生時代の土器の中で最も多く出土した。一方で壺棺用と推定される大型品や特殊な用途が推定される精製土器の類は比較的少なく、生活に根付いた容器類が多数を占める。

口縁部形状は肥厚したものからT字を呈するものなどがあり、胴部に突帯を巡らすものとないものとが見られる。底部は平底のものからやや中央がくぼむもの、上げ底のものがあり、上げ底のものがやや優勢であるように見える。

以上の特徴から本遺跡で出土した弥生時代の壺にはいくつかの傾向が見て取れる。以下でその特徴と変遷について触れていく。

ア 口縁～胴部

古相のものとしては粘土紐を貼り付けて肥厚した口縁部を形成し、口縁下部に1条の断面三角形の貼付突帯をめぐらせるもの（第26図）である。その後、口縁は四角に近い断面形状（18）を呈するものから徐々にT字に近い形状（28）へ移行していく。口縁付近はやや内向し、胴部で最大径を取る樽形に近い。調整はナデを基本とし、一部にミガキを認める。

次段階として古相の変化を引き継ぎT字形が顕著化する。また、口縁下部に認められた1条の突帯はわずかな隆起として残る（28）ものから沈線（30、31）へと変化し、やがてその沈線も省略される。また、口縁部は肥厚したものから薄手（34）へと移行していく。

口縁部形状はT字形を維持しつつ薄手化が進むとともに下方向へのくぼみは弱まる（41）。口縁内側の突起は徐々に弱まり退化する。この退化により口縁部形状はくの字形に近づく。

くの字形への移行後、胴部の長胴化が進むようであるが本遺跡ではその傾向を示す資料はな

い。

イ 底部

底部は内器面下底付近の径と比してやや小さめの印象を受ける円筒状（79）・裾広の円筒（90）を呈する。完全な平底ではなく中央部をわずかにくぼませた形状のものから、明確にくぼみながらも上げ底の範囲を出ない程度のものに留まる。

次に裾広円筒形を維持しつつ、くぼみが発達する（29など）ことと裾が拡がる（45など）ことで上げ底から脚つき底部（60など）へと変化していく。またこのことにより内器面下底付近の径と比して底部外径は若干広めとなる。

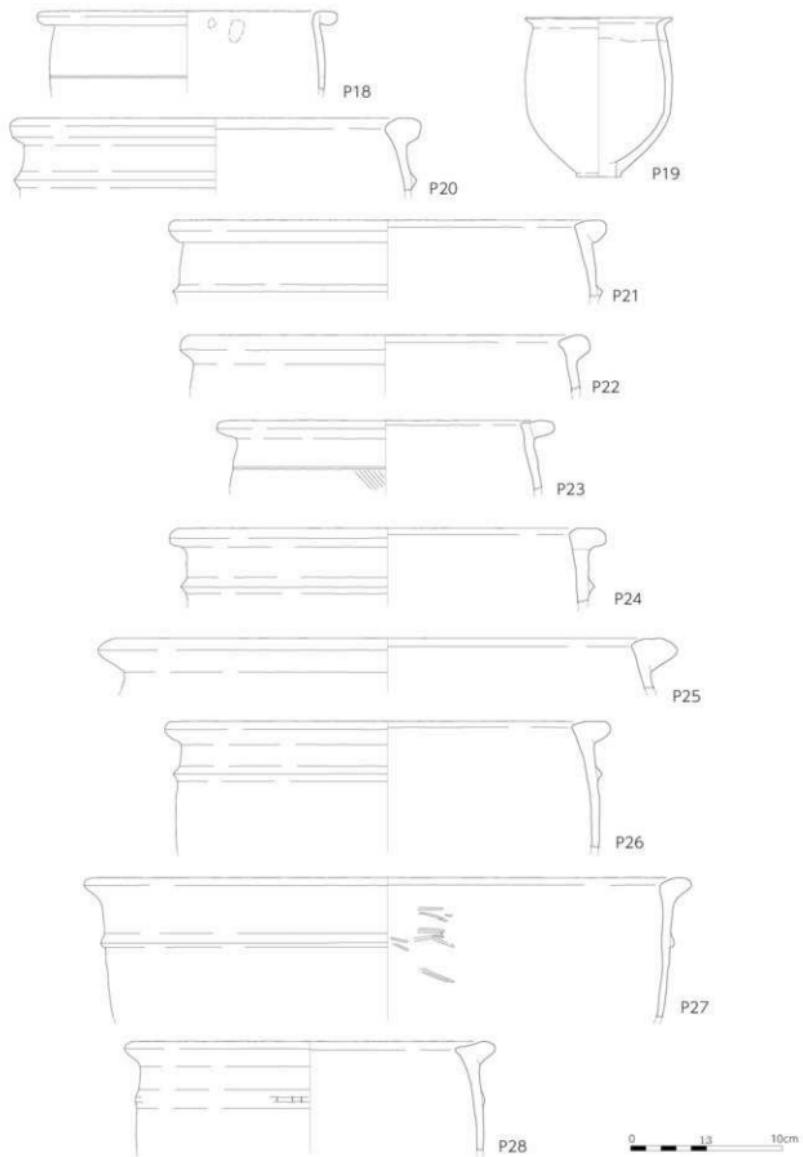
脚付き底部と呼べるほどに顕著化した中央部のくぼみは維持されつつ脚部が細くなっている。接地面はやや丸みを帯びる。

徐々に細くなった脚部は先端が先鋭化すると同時に裾広がりになり、接地面は平坦化する。

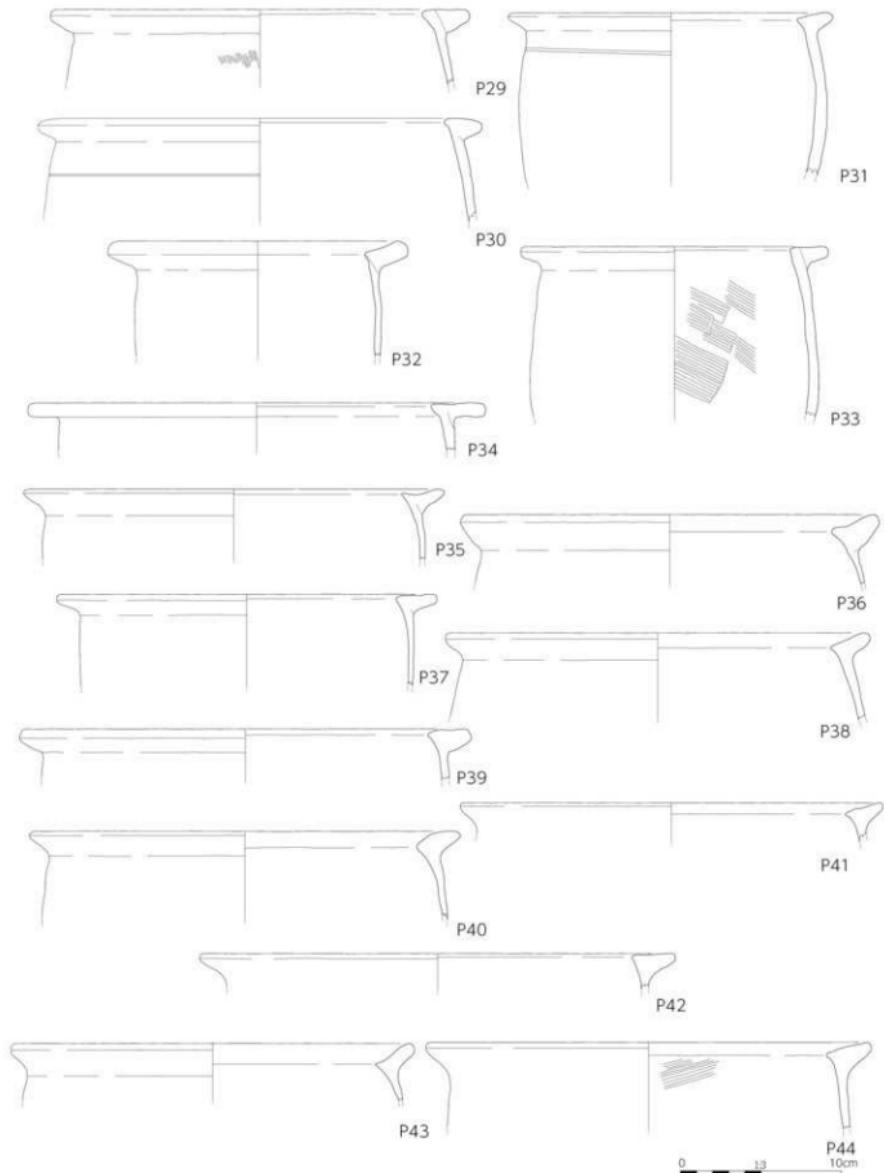
胴部の長胴化とともに脚付き底部の発達が見られるようであるが、本遺跡では胴部における変化と同様にその兆候を確認できない。状況を鑑みるとその前段階で遺跡占地が途絶えたかのようである。

ウ 小結

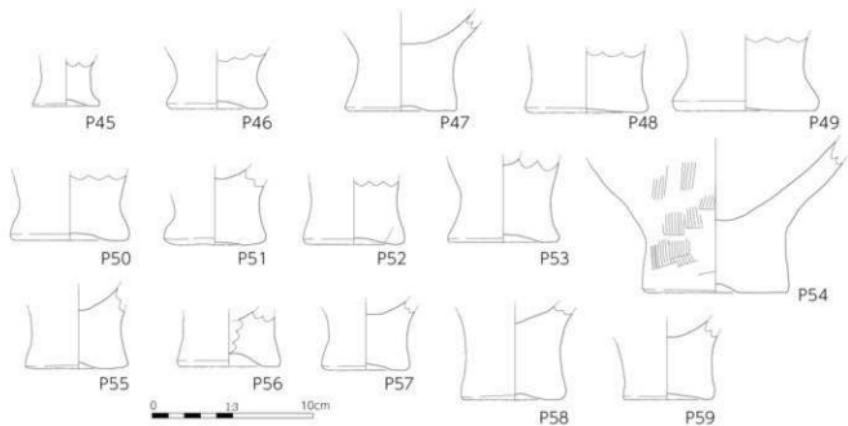
以上の特徴から本遺跡の壺は弥生時代中期～後期にかけてのもので占められており、特に中期中葉から後葉にかけてがそのピークであると見られる。T字形口縁からくの字形への移行が認められる一方で長胴壺・長胴脚付壺などは認められず、後期も前半台までと見られる。



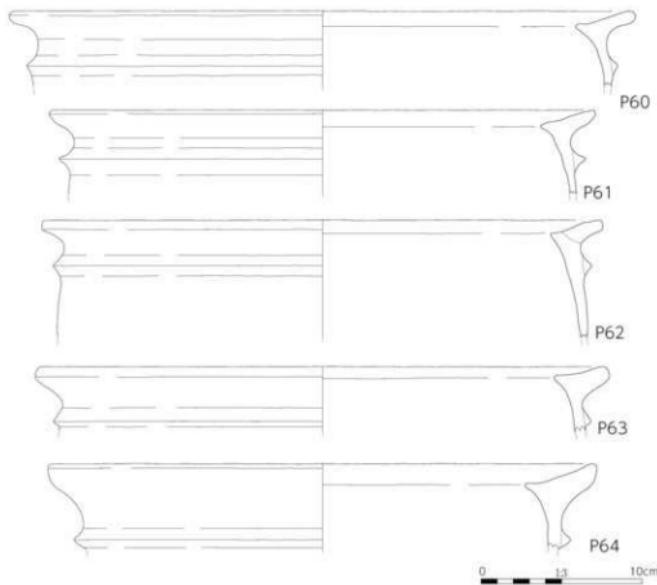
第 26 図 包含層出土土器（弥生時代）1



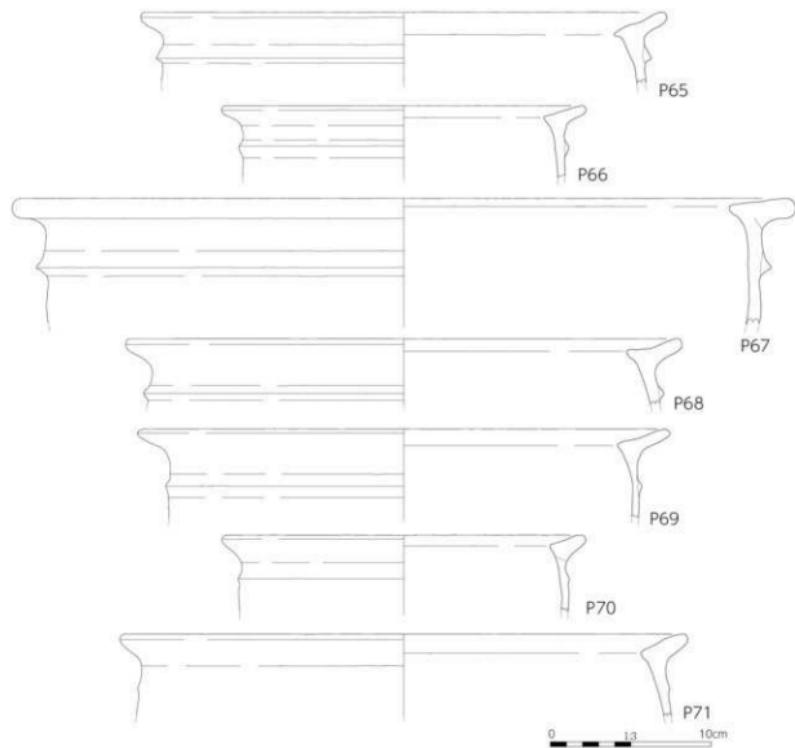
第 27 図 包含層出土土器（弥生時代）2



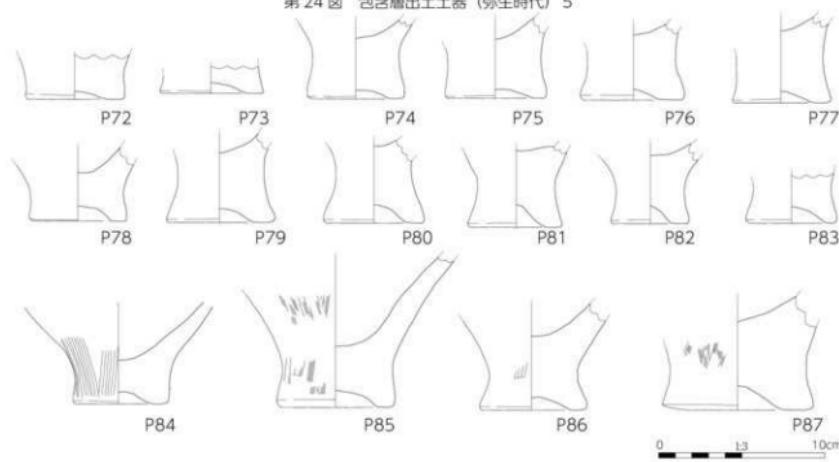
第28図 包含層出土土器（弥生時代）3



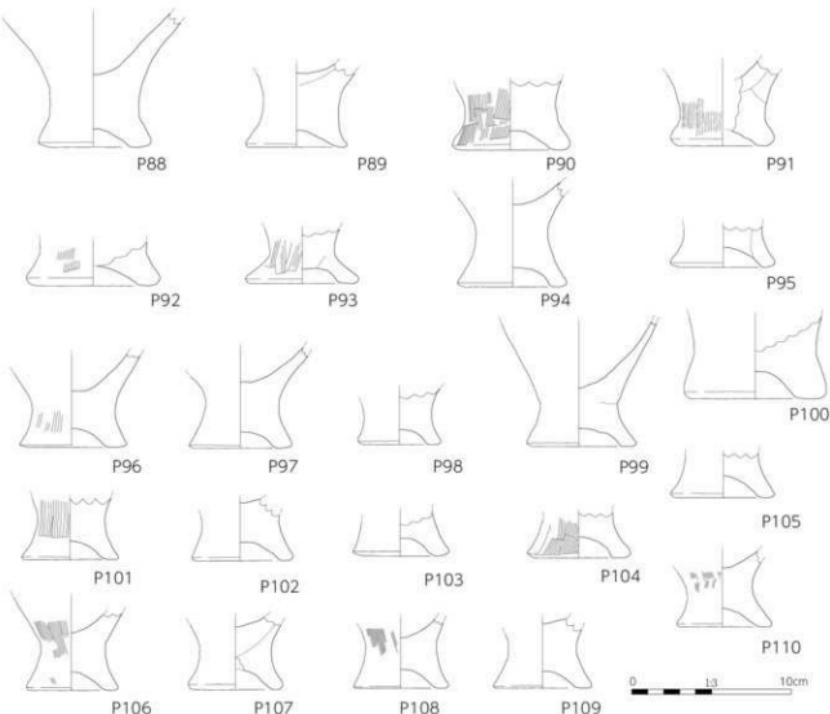
第29図 包含層出土土器（弥生時代）4



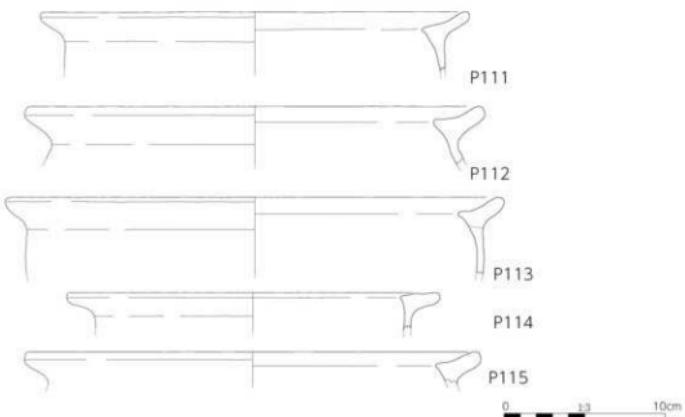
第24図 包含層出土土器（弥生時代）5



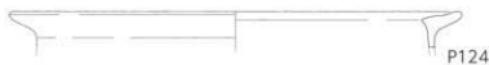
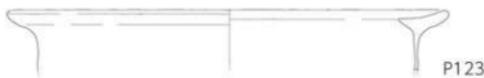
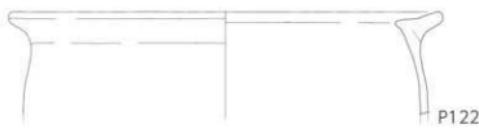
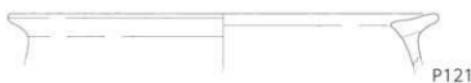
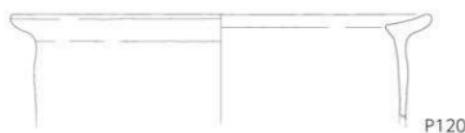
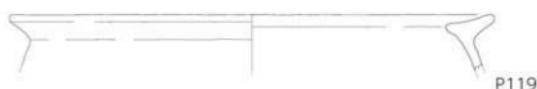
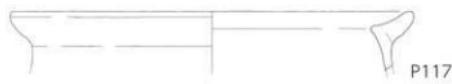
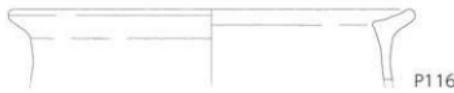
第30図 包含層出土土器（弥生時代）6



第31図 包含層出土土器（弥生時代）7

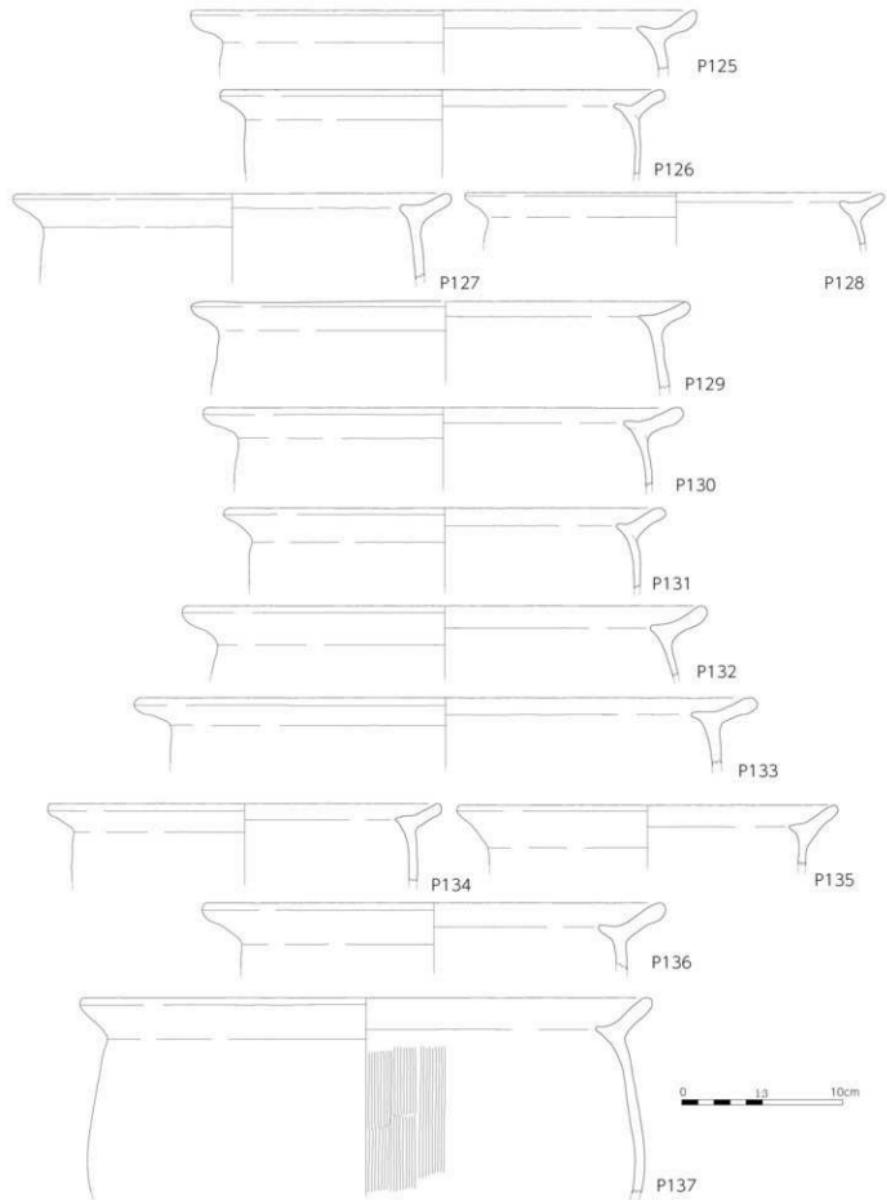


第32図 包含層出土土器（弥生時代）8

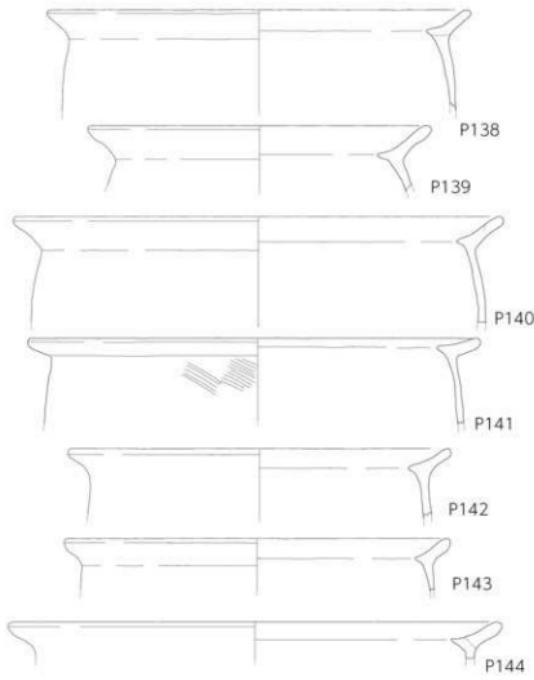


0 13 10cm

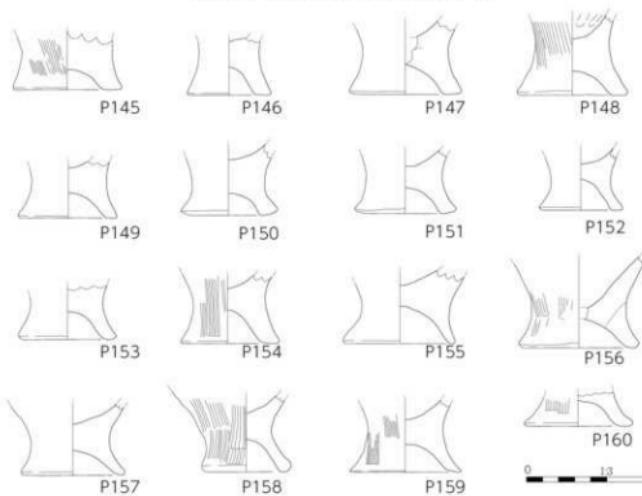
第33図 包含層出土土器（弥生時代）9



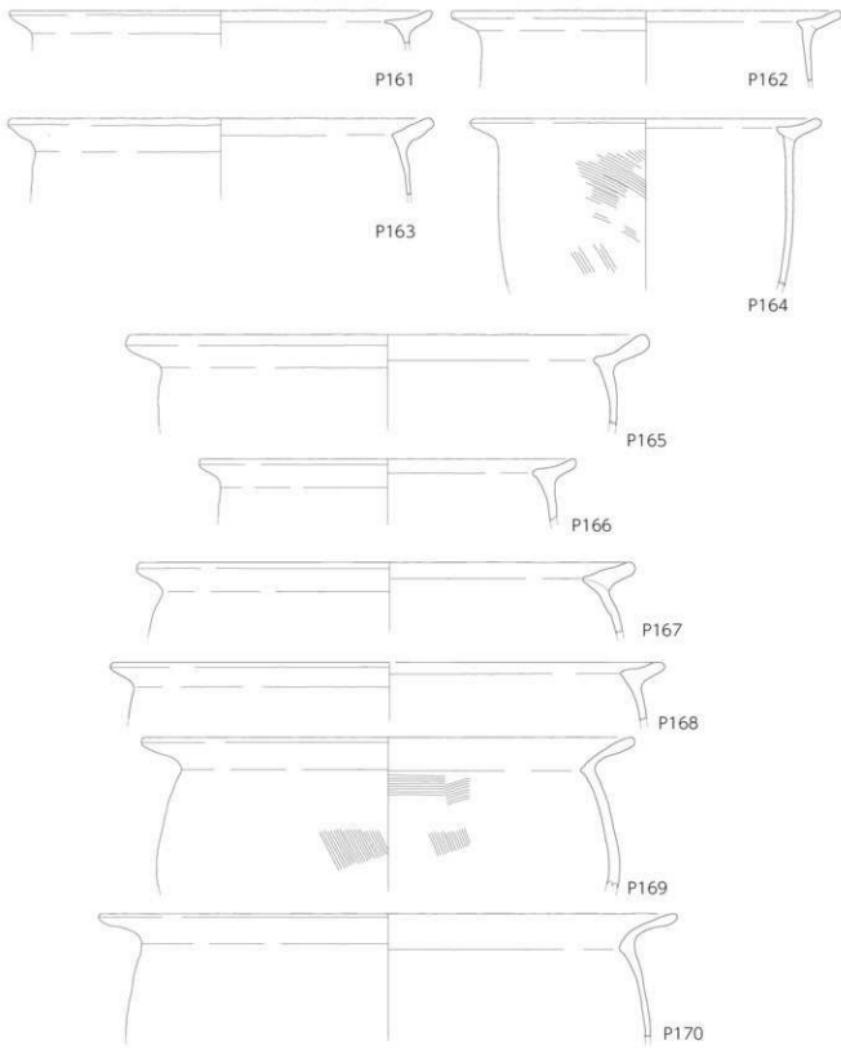
第34図 包含層出土土器（弥生時代）10



第35図 包含層出土土器（弥生時代）11

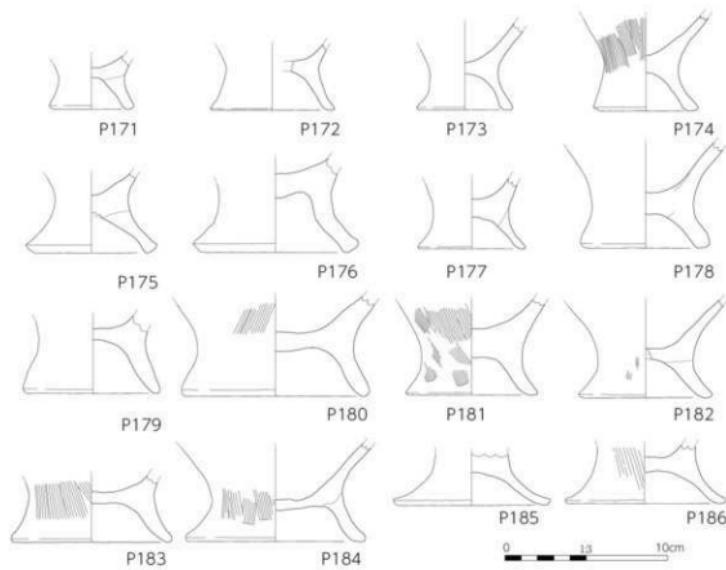


第36図 包含層出土土器（弥生時代）12

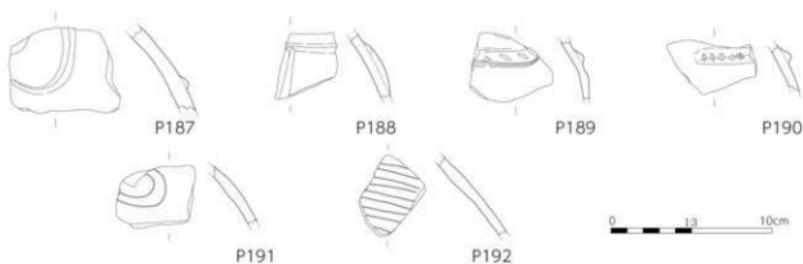


0 13 10cm

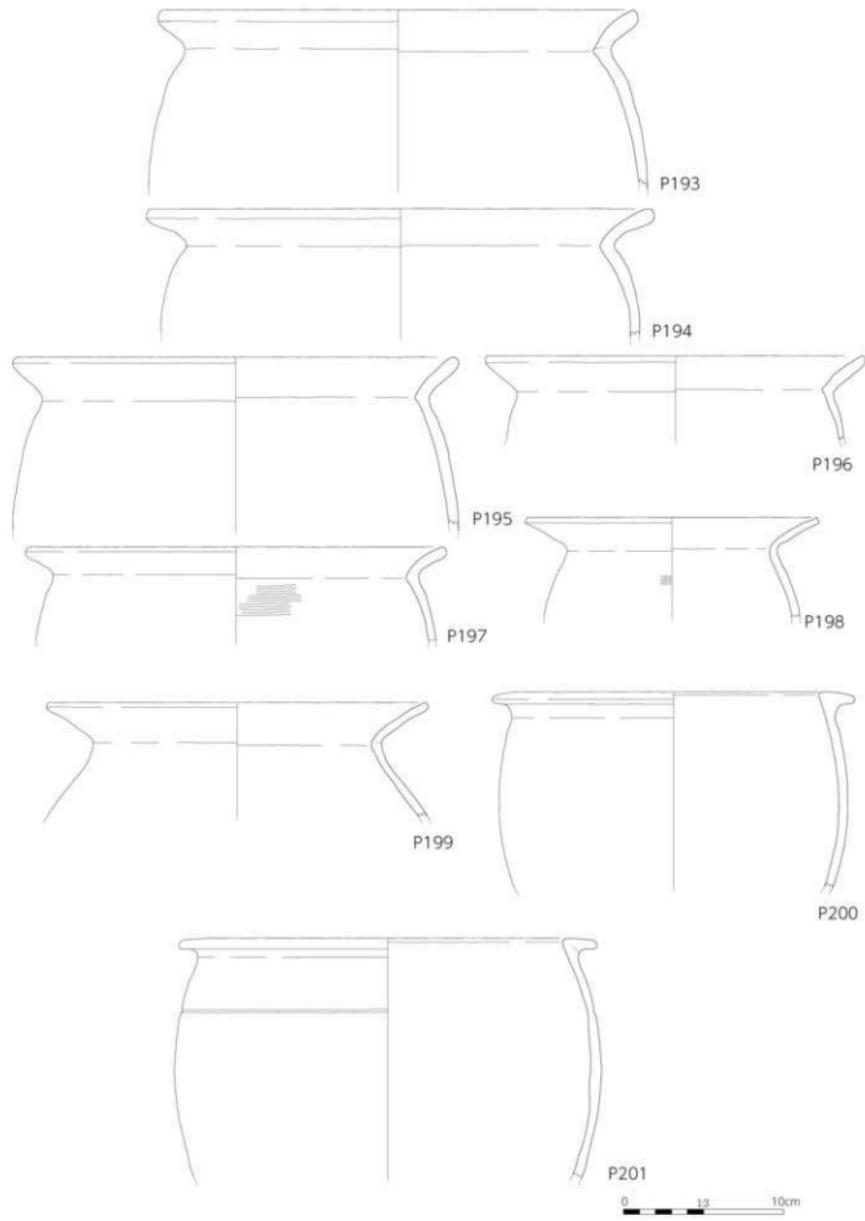
第37図 包含層出土土器（弥生時代）13



第38図 包含層出土土器（弥生時代）14



第39図 包含層出土土器（弥生時代）15



第40図 包含層出土土器（弥生時代）16

(2) 壺

(ア) 壺形（第41図）

壺形も甕に次いで多く出土している。これも甕と同様、破片での出土でありほとんど接合が出来なかった。

概観するに時期的にはおよそ甕と時を同じくするものであり、弥生時代中期～後後にかけてのものがほとんどである。

口縁部の形状や特徴に目を向けてみると、甕の口縁と類似するもの（202）、角張った口唇に刻目を持つもの（205,206）などが見られる。また、口縁下部に突帯を巡らすもの（208,209）も存在する。

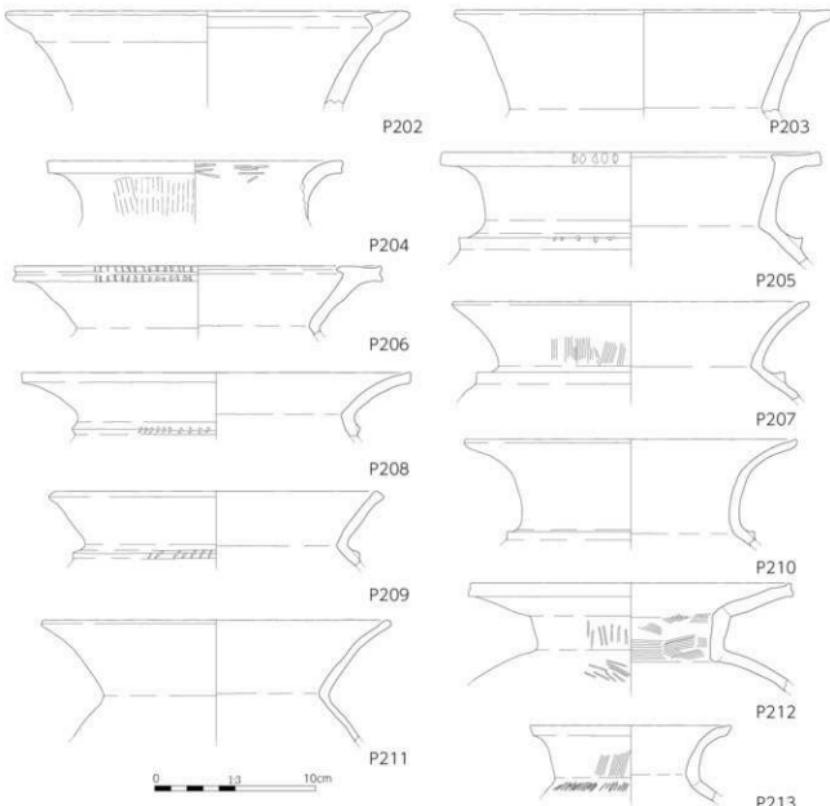
接合例に乏しいため胴部についての図示は今回出来ていない。

(イ) 口縁に暗文様ヘラミガキを有する壺

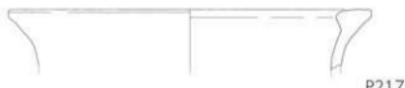
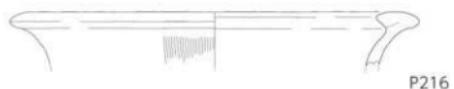
217～219は壺であるが精製された器面と肥厚した平坦面を持つ口縁に放射状（217）及びそれに交差する（218,219）ようなヘラミガキを施す。容器というよりも祭器的性格を持つものと思われる。

(ウ) 重弧文土器

小さな破片ではあるが重弧文を有する土器片が1点出土した。221は壺形とおぼしき胴部中程の破片であり、刻目を有する突帯の下部に3条の弧状沈線を施す。



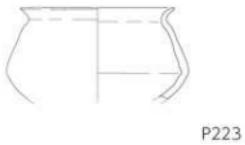
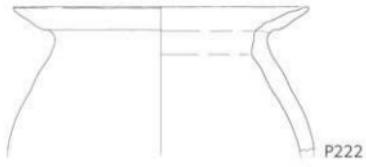
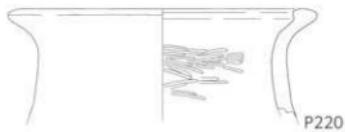
第41図 包含層出土土器（弥生時代）17



P217

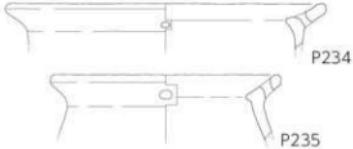
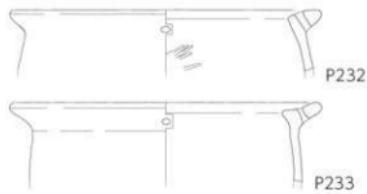
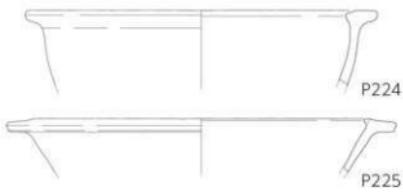


P219

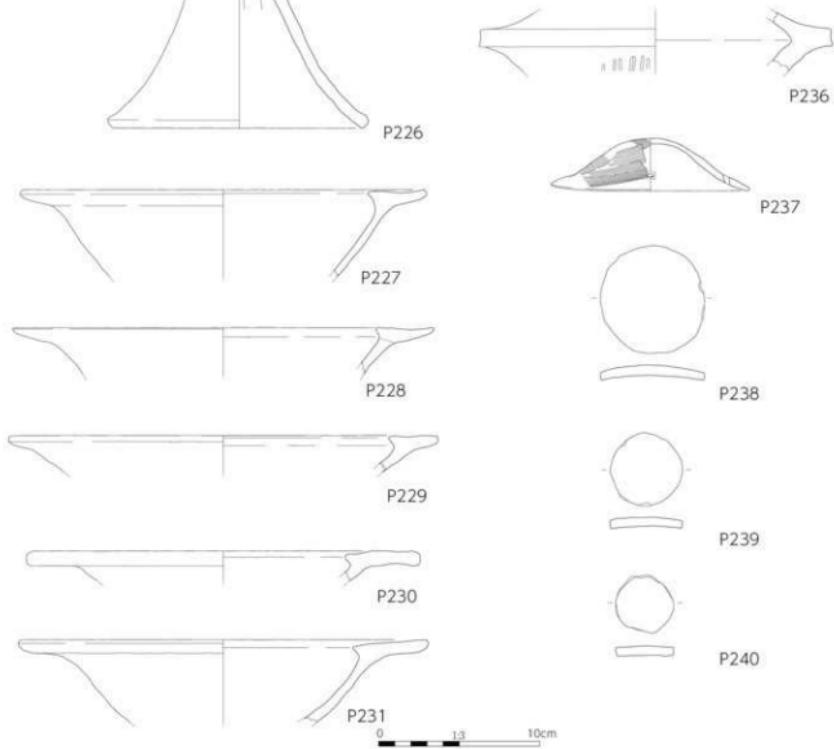


0 10cm

第42図 包含層出土土器（弥生時代）18



第44図 包含層出土土器（弥生時代）20



第43図 包含層出土土器（弥生時代）19

第45図 包含層出土土器（弥生時代）21

(3) 高坏 (第43図)

出土した弥生時代に属する高坏のほとんどは大きく欠損し、全容は不明である。224は口縁が肥厚し口縁内側は内湾する。胴部はやや深型を呈する。225は224に比べて若干深みが無くなるとともに口縁は外反する。口縁内側の突起は顕在化し、ナデ調整により口縁上部は平滑化する。227～231はほぼ水平に近い口縁部と口縁内側の突起がさらに発達し内器面が抉りこまれる形となり、224に比べると坏部の容積は少なくなっている。

(4) 鉢

222～225は口縁部に穿孔のある小型の鉢である。これらは形状が大きく異なったり、穿孔箇所が違うことはないが、細かい部分での差は見られ、216はやや口縁が肥厚し内側の突起はやや弱い。161,170は突起が明確化し170,279に至っては内傾化の傾向にある。穿孔箇所は1・2箇所であり、S26で出土した口縁穿孔鉢の例を考えると2・4箇所の偶数個穿孔される

ものと考えられる。調整はいずれも丁寧であり、216の内器面にはミガキが認められる。

(5) 筒形器台

236は筒形器台であるが、ほとんどを欠損しております。特徴的な口縁下部のみの出土となる。

丁寧な整形と調整であり、一部にミガキ、外器面は赤彩される。

(6) 蓋 (第45図)

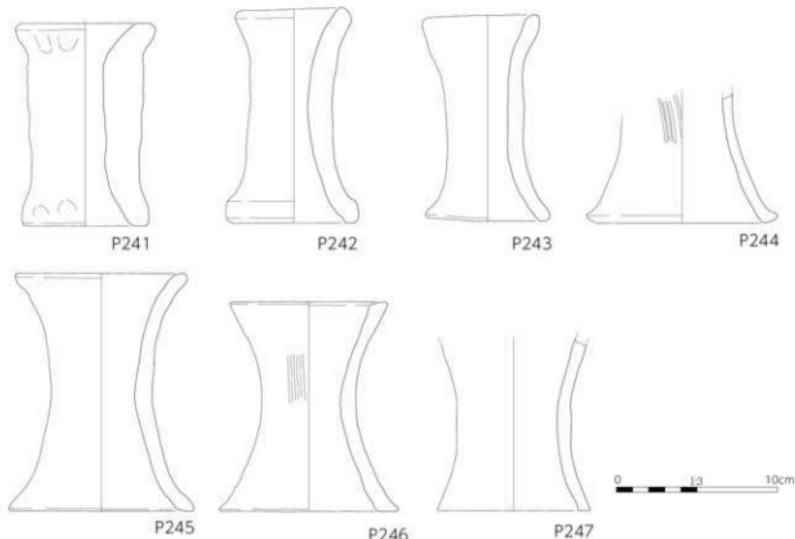
237は蓋である。径12cm程度の丸笠のような形状で4箇所に穿孔が施される。外器面には横方向に近いハケ目が施される。

(7) 円盤形土製品

238～240は円盤形土製品である。弥生土器片を打ち欠いた後縁辺部を研いで円形に仕上げたものである。実際弥生時代に作られたものであるかは不明ではあるが、出土した円盤形土製品全てが弥生土器であるため、弥生時代に位置付けるものとする。

(8) 器台

241は厚みのある器台である。胴部が最も厚



第46図 包含層出土土器（弥生時代）22

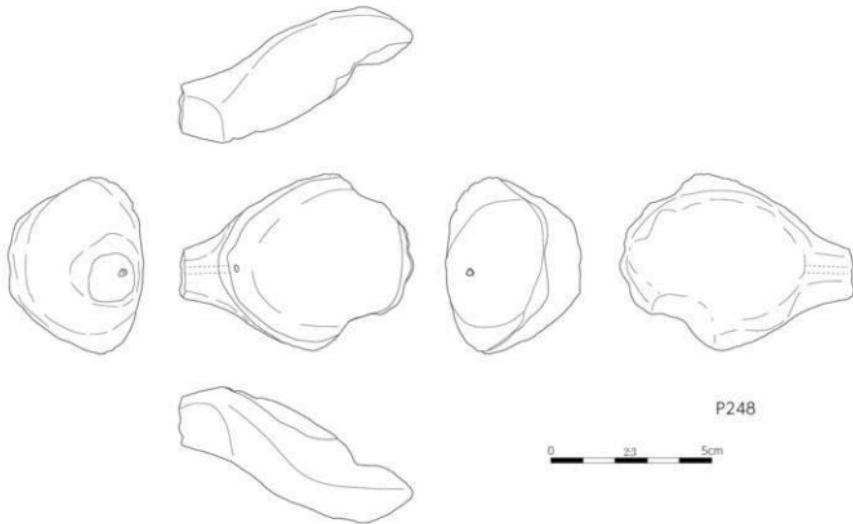
い。基本ナデ調整であるが指押さえの痕がよく残っており、表面はごつごつとした印象を受ける。243～247にかけて断面形状は部位を問わず均等な薄型化への傾向が見られる。

(9) 匙形土製品（第47図）

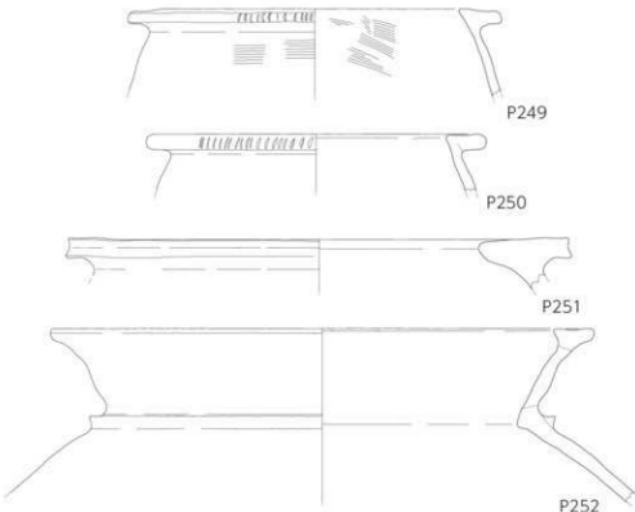
248は匙形土製品である。手捏ねで現代の匙に近い形状を作り出す。凹面は丁寧に仕上げられているが裏側は不明瞭な指頭圧痕により凹凸がある。柄を欠いている。また、柄と匙部の境目に貫通する孔が存在する。

(10) 壺棺（第48図）

249～252は壺棺の破片と考えられるものである。他の壺に比べて口縁が厚く口径が大きい。このことは遺構として壺棺が確認されていなくとも下六嘉丘陵上に壺棺が存在することを暗示するものである。



第47図 包含層出土土器（弥生時代）23



第48図 包含層出土土器（弥生時代）24

3 包含層出土遺物（石器）

(1) 石製穂摘具（第49～51図）

18点の石製穂摘具が出土した。ほとんど全てが折損している。また、度重なる刃部研磨により相当程度研ぎ減らしている。よって原形状による分類は難しいが、穿孔方法（村田1999）並びに穿孔位置、背面が直線的か否かにより分けられる。

また、製作後背面については加工を受けないと見解から孔と背面の距離が古い時期のものは中央近くにあるため長く、新しい時期のものは背面近くに穿孔されるため短くなる傾向にあることが指摘されている。

ア 敲打後穿孔

敲打後穿孔によるものは、敲打により凹みを形成させてその後転工具による穿孔を施すものである。そのため孔付近に敲打痕が認められ、孔径自体も大きめになる。

穿孔位置による背面との距離について見てみると、15～18については中央部寄りになるため背面との距離は比較的長いものになる。また、研ぎ減らしによる孔・刃部との距離は18が最も短く、相当程度使い込まれたものと言える。

今回敲打後穿孔の資料が刃部・孔・背面とともに揃って残存している資料が少ないため分析に耐えないが、形状は直線的な背面を持つ外湾刃半月形である。石材は灰白色を呈する砂岩質のものがほとんどであり、後述する直接穿孔ものと石材が異なる点は注目できる。

イ 直接穿孔

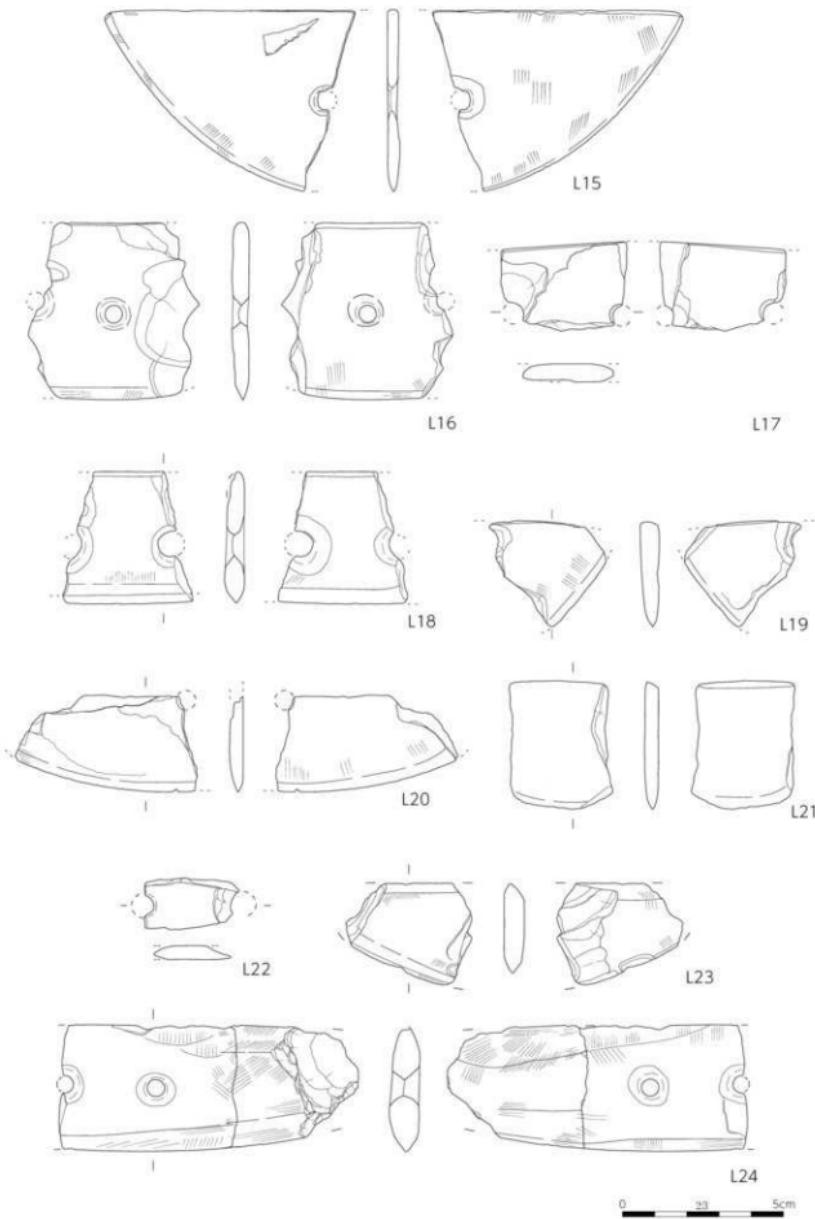
錐揉みにより穿孔される。断面形状は滑らかな円錐台形状となる。穿孔位置による背面との距離について見てみると、15,16については比較的中央寄りのため長め、27～32は背面近くのためやや短い。また、背面の形状という観点からは30を除いては全て直線的な背面を有する外湾刃半月形であり、30は背面刃部とともに外反する楕円形に近い形状となる。石材は黒灰色を呈する泥岩（片岩）質のものである。

ウ 石製穂摘具の時期差について

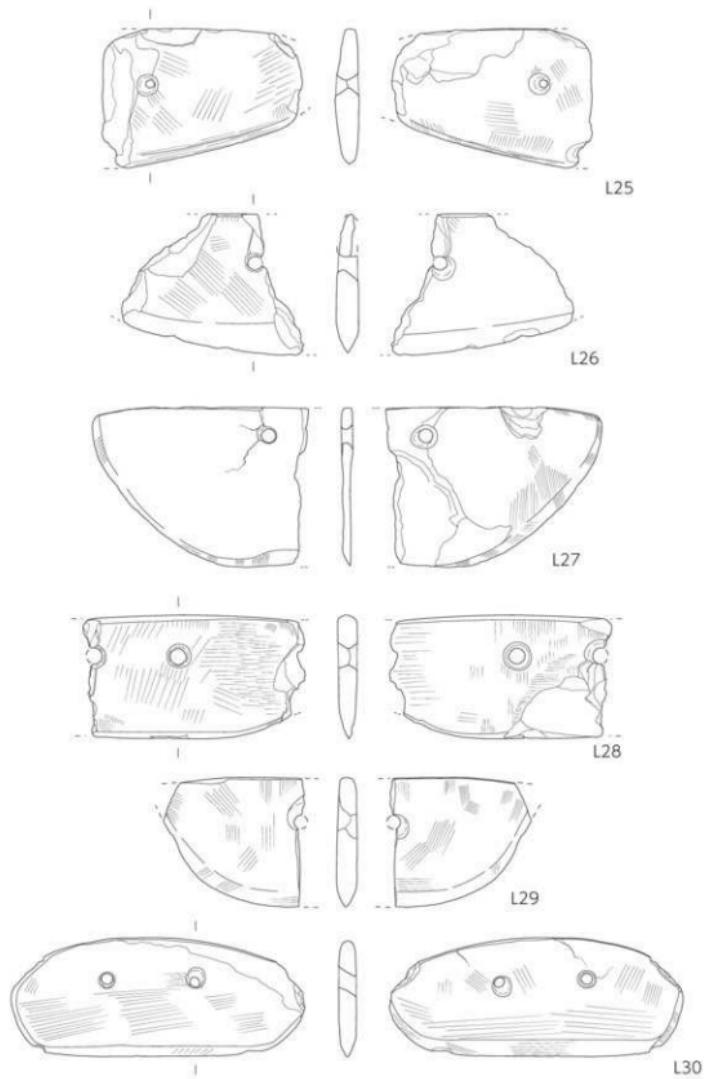
敲打後穿孔と直接穿孔のものに時期差は存在しないとされるが、古い時期に混在するものが新しい時期のものには直接穿孔がほとんどを占めるようになる。穿孔位置についても器体の中央寄りから背面に近くなることは、穿孔器具の改善（鉄器化）により選考中の破損リスクが著

第9表 弥生時代土器觀察表

標識番号	種類	タケヌキの分布地図	区分	地理	部位	口径(cm)	基高(cm)	底径(cm)	選択材	色調(内)	色調(外)	調整(内)	調整(外)	備考	
P218	-	-	3	野生上部	森	口縁 ～根元	-	(2, 3)	-	黒色、赤褐色 黒色、赤褐色	12.5cm・薄緑 12.5cm・薄緑	ナチュラル ナチュラル	ナチュラル ナチュラル	良好	口縫上面に剥離
P219	B3	3	野生上部	森	～根元	(8, 9)	(6, 7)	-	黒色、赤褐色 黒色、赤褐色	12.5cm・薄緑 12.5cm・薄緑	ナチュラル ナチュラル	ナチュラル ナチュラル	良好	良好	
P220	-	4	野生上部	森	輪葉	-	(3, 4)	-	黒色、赤褐色 黒色、赤褐色	12.5cm・薄緑 12.5cm・薄緑	ナチュラル ナチュラル	ナチュラル ナチュラル	良好	輪葉に剥離日焼 輪葉に剥離あり	
P221	-	-	6	野生上部	森	口縁 ～根元	(8, 2)	(6, 9)	-	黒色、赤褐色 黒色、赤褐色	12.5cm・薄緑 12.5cm・薄緑	ナチュラル ナチュラル	ナチュラル ナチュラル	良好	良好
P222	C2	3	野生上部	森	～根元	口縁 ～根元	(8, 3)	(6, 4)	黒色、赤褐色 黒色、赤褐色	12.5cm・薄緑 12.5cm・薄緑	ナチュラル ナチュラル	ナチュラル ナチュラル	良好	口縫面剥離一箇に剥れ垂	
P223	B3	3	野生上部	森	～根元	口縁 ～根元	(11, 4)	(8, 6)	黒色、赤褐色 黒色、赤褐色	12.5cm・薄緑 12.5cm・薄緑	ナチュラル ナチュラル	ナチュラル ナチュラル	良好	良好	
P224	B3	3	野生上部	森	～根元	口縁 ～根元	(11, 4)	(8, 6)	黒色、赤褐色 黒色、赤褐色	12.5cm・薄緑 12.5cm・薄緑	ナチュラル ナチュラル	ナチュラル ナチュラル	良好	良好	
P225	C3	-	野生上部	森	口縁	(11, 5)	(10, 3)	-	黒色、赤褐色 黒色、赤褐色	12.5cm・薄緑 12.5cm・薄緑	ナチュラル ナチュラル	ナチュラル ナチュラル	良好	良好	
P226	-	B3	4	野生上部	森	口縁 ～根元	22.2	21.9	10.1	黒色、赤褐色 黒色、赤褐色	12.5cm・薄緑 12.5cm・薄緑	ナチュラル ナチュラル	ナチュラル ナチュラル	良好	輪葉内側面にしおり感あり
P227	C2	3	野生上部	森	～外縁	口縁 ～外縁	(25, 4)	(30, 1)	黒色、赤褐色 黒色、赤褐色	12.5cm・薄緑 12.5cm・薄緑	ナチュラル ナチュラル	ナチュラル ナチュラル	良好	良好	
P228	-	-	4	野生上部	森	口縁 ～根元	(26, 6)	(20, 0)	黒色、赤褐色 黒色、赤褐色	12.5cm・薄緑 12.5cm・薄緑	ナチュラル ナチュラル	ナチュラル ナチュラル	良好	良好	
P229	C2	3	野生上部	森	口縁	(26, 11)	(22, 3)	-	黒色、赤褐色 黒色、赤褐色	12.5cm・薄緑 12.5cm・薄緑	ナチュラル ナチュラル	ナチュラル ナチュラル	良好	内、外縫間に剥離	
P230	-	C2	2	野生上部	森	口縁	(24, 1)	(11, 0)	-	黒色、赤褐色 黒色、赤褐色	12.5cm・薄緑 12.5cm・薄緑	ナチュラル ナチュラル	ナチュラル ナチュラル	良好	良好
P231	-	2	野生上部	森	～外縁	口縁 ～外縁	(25, 3)	(30, 0)	黒色、赤褐色 黒色、赤褐色	12.5cm・薄緑 12.5cm・薄緑	ナチュラル ナチュラル	ナチュラル ナチュラル	良好	良好	
P232	-	1	野生上部	森	～外縁	口縁 ～外縁	(18, 2)	(18, 0)	黒色、赤褐色 黒色、赤褐色	12.5cm・薄緑 12.5cm・薄緑	ナチュラル ナチュラル	ナチュラル ナチュラル	良好	口縫に剥離あり	
P233	C3	1	野生上部	森	口縁	(18, 3)	(14, 9)	-	黒色、赤褐色 黒色、赤褐色	12.5cm・薄緑 12.5cm・薄緑	ナチュラル ナチュラル	ナチュラル ナチュラル	良好	口縫に剥離なし	
P234	B3	3	野生上部	森	～外縁	(18, 0)	(21, 0)	-	黒色、赤褐色 黒色、赤褐色	12.5cm・薄緑 12.5cm・薄緑	ナチュラル ナチュラル	ナチュラル ナチュラル	良好	口縫に剥離なし	
P235	H2	2	野生上部	森	口縁 ～根元	(14, 2)	(14, 0)	-	黒色、赤褐色 黒色、赤褐色	12.5cm・薄緑 12.5cm・薄緑	ナチュラル ナチュラル	ナチュラル ナチュラル	良好	剥離なし	
P236	B3	-	野生上部	森	輪葉部分	-	(3, 1)	-	黒色、赤褐色 黒色、赤褐色	12.5cm・薄緑 12.5cm・薄緑	ナチュラル ナチュラル	ナチュラル ナチュラル	良好	外縫面に剥離	
P237	C2	-	野生上部	森	-	12.5	3.2	-	黒色、赤褐色 黒色、赤褐色	12.5cm・薄緑 12.5cm・薄緑	ナチュラル ナチュラル	ナチュラル ナチュラル	良好	芽吹き4+	
P238	B3	3	土製品	円盤形	-	黒色	最大直径 6.6	(6, 4)	黒色、赤褐色 黒色、赤褐色	12.5cm・薄緑 12.5cm・薄緑	ナチュラル ナチュラル	ナチュラル ナチュラル	良好	口縫に剥離あり	
P239	-	3	土製品	円盤形	-	黒色	最大直径 6.6	(4, 4)	黒色、赤褐色 黒色、赤褐色	12.5cm・薄緑 12.5cm・薄緑	ナチュラル ナチュラル	ナチュラル ナチュラル	良好	良好	
P240	-	-	3	土製品	円盤形	-	黒色	最大直径 6.6	黒色、赤褐色 黒色、赤褐色	12.5cm・薄緑 12.5cm・薄緑	ナチュラル ナチュラル	ナチュラル ナチュラル	良好	良好	
P241	-	B2	2	野生上部	森	口縁 ～根元	(6, 6)	12.5	(17, 0)	黒色、赤褐色 黒色、赤褐色	12.5cm・薄緑 12.5cm・薄緑	ナチュラル ナチュラル	ナチュラル ナチュラル	良好	良好
P242	H2	-	野生上部	森	口縁	7.1	13.3	8.2	黒色、赤褐色 黒色、赤褐色	12.5cm・薄緑 12.5cm・薄緑	ナチュラル ナチュラル	ナチュラル ナチュラル	良好	良好	
P243	H2	4	野生上部	森	口縁	7.2	12.7	7.6	黒色、赤褐色 黒色、赤褐色	12.5cm・薄緑 12.5cm・薄緑	ナチュラル ナチュラル	ナチュラル ナチュラル	良好	良好	
P244	B3	2	野生上部	森	口縁 ～根元	-	(6, 6)	11.7	黒色、赤褐色 黒色、赤褐色	12.5cm・薄緑 12.5cm・薄緑	ナチュラル ナチュラル	ナチュラル ナチュラル	良好	良好	
P245	C3	1	野生上部	森	口縁	(6, 6)	(11, 4)	-	黒色、赤褐色 黒色、赤褐色	12.5cm・薄緑 12.5cm・薄緑	ナチュラル ナチュラル	ナチュラル ナチュラル	良好	良好	
P246	H3	3	野生上部	森	口縁 ～根元	(23, 6)	(3, 4)	-	黒色、赤褐色 黒色、赤褐色	12.5cm・薄緑 12.5cm・薄緑	ナチュラル ナチュラル	ナチュラル ナチュラル	良好	口縫面に剥離あり	
P247	-	-	3	野生上部	森	口縁 ～根元	(23, 6)	(3, 3)	黒色、赤褐色 黒色、赤褐色	12.5cm・薄緑 12.5cm・薄緑	ナチュラル ナチュラル	ナチュラル ナチュラル	良好	口縫面に剥離あり	
P248	B3	3	野生上部	森	口縁 ～根元	(31, 2)	(31, 1)	-	黒色、赤褐色 黒色、赤褐色	12.5cm・薄緑 12.5cm・薄緑	ナチュラル ナチュラル	ナチュラル ナチュラル	良好	良好	
P249	C2	2	野生上部	森	口縁 ～根元	(33, 4)	(16, 0)	-	黒色、赤褐色 黒色、赤褐色	12.5cm・薄緑 12.5cm・薄緑	ナチュラル ナチュラル	ナチュラル ナチュラル	良好	周囲に剥離あり	



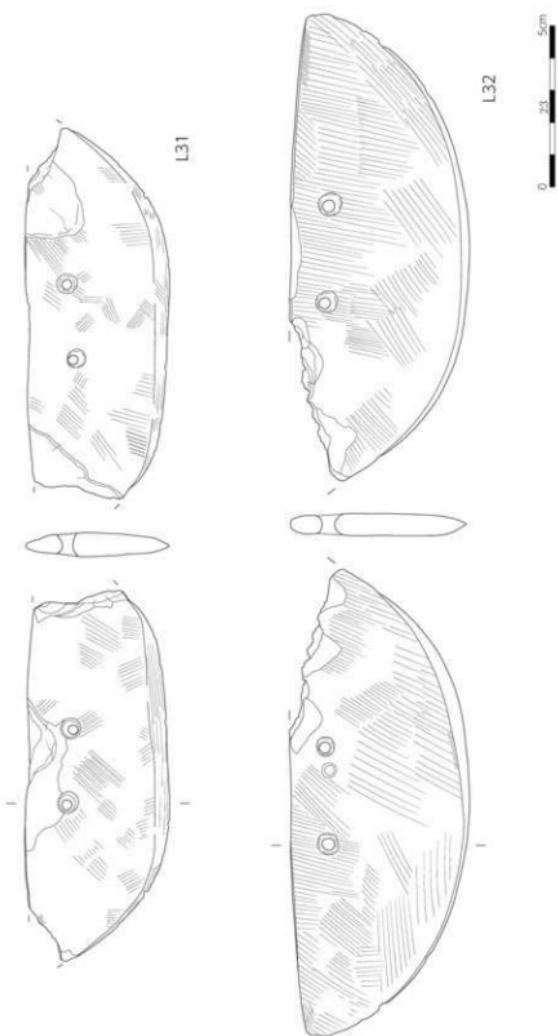
第49図 包含層出土石器（弥生時代）1

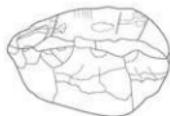
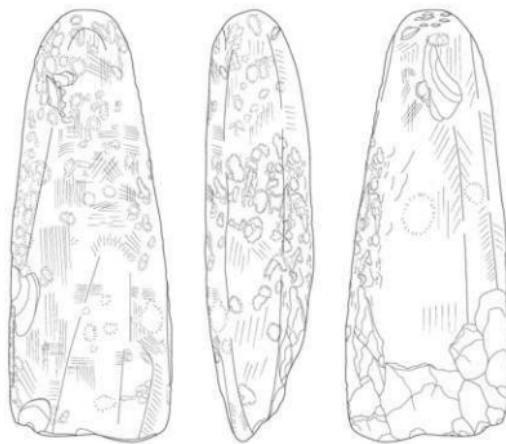


0 23 5cm

第50図 包含層出土石器（弥生時代）2

第51図 包含層出土石器（弥生時代）3

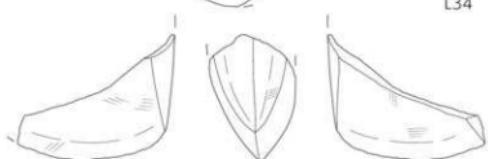




L33



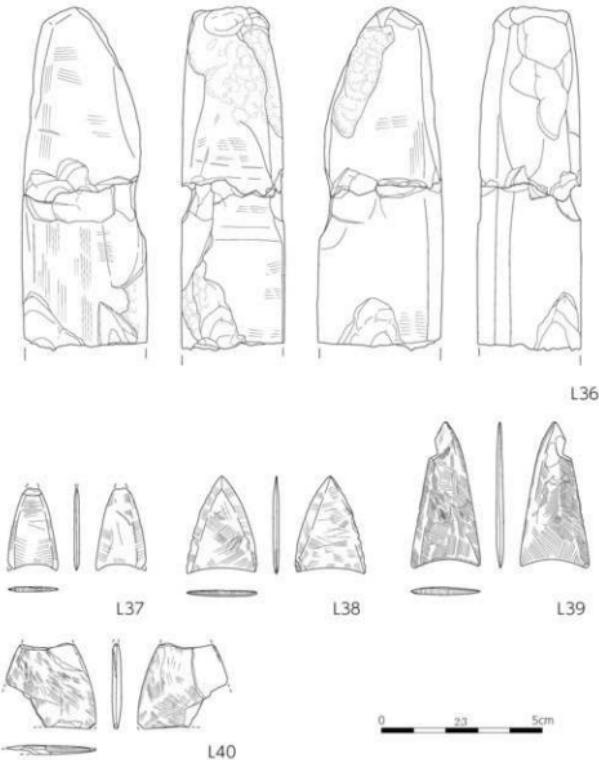
L34



0 23 5cm

L35

第52図 包含層出土石器（弥生時代）4



第53図 包含層出土石器（弥生時代）5

しく低減されたことによるとされる（森、前掲）。また、下六嘉遺跡群が所在する熊本平野部は産地から遠く離れた地域であり、この地域に石製穂摘具を生産したいわゆる原産地遺跡が存在しない点から純粋な消費地であると言えよう。石材についてもその産地を反映したものであると考えられるが、大きく分けて対馬で産出する石材（※1）と泥岩（片岩）質の産地同定の進展により産地と消費地とを線で結ぶ事も可能になると思われる。下六嘉遺跡群周辺でも一定程度石製穂摘具の出土を見ていることから、熊本平野部における石製穂摘具の石材同定については今後の課題としておきたい。

エ 石鎌転用品

24は石鎌を石製穂摘具に転用したものである。折損するため全容については不明である。

他の穂摘具はおよそ断面形状が薄く扁平なものであるが、これは元が石鎌であるためやや厚めの両面凸レンズ状になる。

加えて穂摘具の刃部とは異なる稜線が画面左右に1条ずつみえるものは、石鎌の整形時に付けられた刃部後段であり、石鎌の中央部付近を利用したものと推測される※2。

穿孔方法については敲打後穿孔であり、穿孔箇所も器面の中央部付近である。鎌の稜を残していることからあまり研ぎ減らしを受けておらず

ず、使用は限定的であった可能性がある。

また、背面にも研磨が及んでいる点は石剣整形時のものと転用時のものと不可分的である。

両端を欠くが、左側は折損、右側が先端方向からの力による剥離によるものである。

また、石材も他のと異なり立岩産※3と考えられる赤紫色泥岩を使用している。

※1～3：能登原孝道氏（熊本県教育庁文化課）のご教示による

(2) 磨製石斧

33～35は太形蛤刃石斧である。33は刃部を欠損したため、剥離調整により刃部を再形成しようとしている。ただしその後研磨は行われておらず剥離面はそのままに残置される。蛇紋岩製。

34は基部のみ、35は刃部を残して全て欠損する。いずれも断面が円柱～楕円形に近く、分

厚く重たい印象を受けるものである。

36は有溝石斧である。先端部付近を大きく欠損する。背面中央よりやや上の位置に着柄のための弓状の抉りが入れられる。断面形状は隅丸方形である。安山岩製。

(3) 磨製石鎌

本遺跡から磨製石鎌が4点出土した。基部形状は凹基（37～39）、平基（40）で凹基のものが優勢である。基部幅は約15mm（37）、約20mm（38,39）、30mm（40）、軸長30mmで幅に対して1.5～2倍程度の長さである一方、39は45mmと幅に対して3倍の長さとなる。40は破損しているため全長は不明であるが、推定される長さから正三角形に近い形状となる。

第10表 弥生時代石器観察表

採図	調査区	遺構	層位	時代	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
L015	B2		3	弥生	石製櫛摘具	5.70	7.80	0.38	24.94	打ち欠き穿孔
L016				弥生	石製櫛摘具	5.40	5.18	0.56	26.18	打ち欠き穿孔
L017			1	弥生	石製櫛摘具	2.80	3.92	0.58	10.36	打ち欠き穿孔
L018			1	弥生	石製櫛摘具	4.12	4.00	0.64	16.17	打ち欠き穿孔
L019		一括	弥生		石製櫛摘具	3.31	3.61	0.59	8.38	打ち欠き穿孔
L020		4	弥生		石製櫛摘具	3.01	5.61	0.45	11.76	孔不明
L021		3	弥生		石製櫛摘具	4.02	3.24	0.43	10.41	孔不明
L022		4	弥生		石製櫛摘具	1.60	2.90	0.44	2.94	打ち欠き穿孔
L023		一括	弥生		石製櫛摘具	3.12	3.91	0.65	9.66	孔不明
L024		3	弥生		石製櫛摘具	9.40	3.82	0.85	47.34	石縫転用、打ち欠き穿孔
L025	C2	3	弥生		石製櫛摘具	4.36	6.24	0.75	25.22	器具穿孔
L026	B3	3	弥生		石製櫛摘具	5.54	4.38	0.72	18.32	器具穿孔
L027	C2	3	弥生		石製櫛摘具	4.89	6.62	0.49	20.09	器具穿孔
L028		一括	弥生		石製櫛摘具	3.85	6.92	0.60	22.18	器具穿孔
L029	C2	3	弥生		石製櫛摘具	4.02	4.39	0.65	17.78	器具穿孔
L030	B2		弥生		石製櫛摘具	9.12	3.69	0.62	33.11	器具穿孔
L031		3	弥生		石製櫛摘具	11.50	4.60	0.83	58.50	器具穿孔、穿孔試行痕
L032		一括	弥生		石製櫛摘具	5.57	14.58	0.70	72.10	器具穿孔、穿孔試行痕
L033			弥生		磨製石斧	13.44	5.07	3.40	314.54	
L034			弥生		磨製石斧	5.93	5.08	4.43	149.64	
L037	B2	3	弥生		磨製石鎌	2.56	1.50	0.16	0.92	
L038	B3	3	弥生		磨製石鎌	2.98	2.20	0.18	1.54	
L039		3	弥生		磨製石鎌	4.53	2.14	0.23	2.75	
L040	B3	3	弥生		磨製石鎌	2.65	2.77	0.30	2.83	

第5節 古墳時代

1 遺構

古墳時代の遺構に結びつけられるものはあまりなく、主立ったものとしては住居址1基と土器溜まりである。

(1) 住居址

古墳時代に位置づけられる住居址を1基確認した。

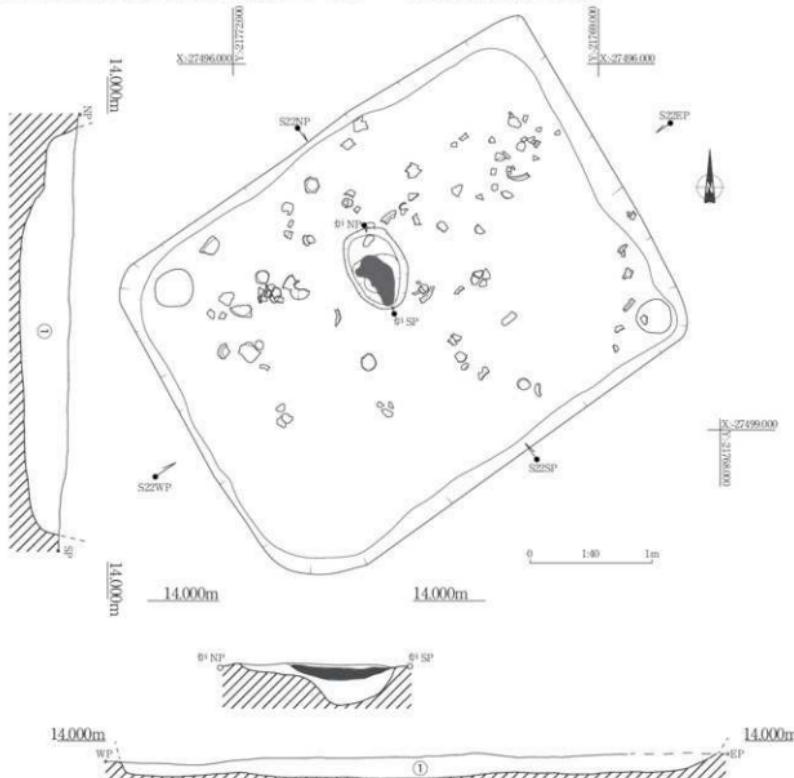
【S22】

調査区の中央付近で確認された。長辺約4m、短辺約3mの抹角長方形を呈する。炉穴を有し、埋土上半部に焼土が見られた。柱穴については

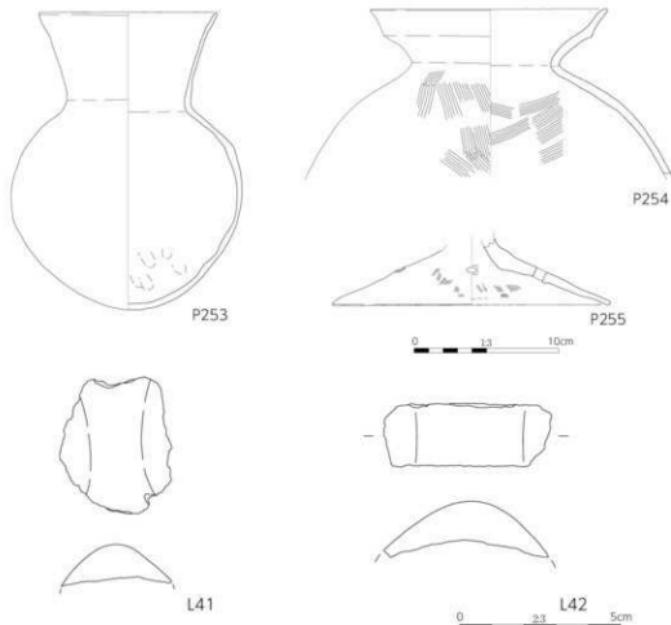
2基それらしきものを認めるも浅く、この遺構に伴うものではない可能性もある。

炉 住居の中央部よりやや北側に焼土を伴う炉穴が確認された。平面形状は楕円形で南側に約40cmの円形くぼみを有する。焼土は底面が北側のテラス状部分と高さをほぼ同じくしており、中心は土坑の中央から南側にレンズ状に分布する。

遺構内出土遺物 遺物は壺、高坏などのほか土器片を多く認めるもほとんどが小片であったため図示していない。また、砥石、磨石など石器類も出土している。高坏及び壺の形状から布留1式段階と思われる。



第54図 住居址(S22) 遺構実測図



第55図 S22出土遺物実測図

第11表 S22出土遺物観察表

件目番号	遺構	大きさ マトリクス	出土層位	区分	器種	部位	口径 (cm)	最高 (cm)	底径 (cm)	底材	色調(内)	色調(外)	重量(g)	重量(g)	構成	備考
P253	S22	(2)	-	上鉢部	広口壺	口縁	12.2	20.4	-	石英、石英、角閃石	青灰	褐色	100g	100g	直身	
P254	S22	(2)	1	土師部	壺	口縁	16.3	111.31	-	長石、石英	青灰	青灰	100g	100g	直身	
P255	S22	(2)	1	上鉢部	壺	脚部	-	14.0	18.8	石英、石英、角閃石	青灰	褐色	100g	100g	直身	脚部欠損

○小形広口壺（253）

小形で丸底の広口壺である。器面が荒れていって調整は鮮明ではない。球形の胴部に外反し高く伸びる口縁を有する。口縁径は12.2cm、器高は20.4cmを測る。

○高坏（255）

脚部のみの出土である。脚は口径が大きく、高さが低い。脚部の中頃に4穴の穿孔がある。坏部との接合面付近で破損する。坏部は塊状で脚の口径よりも小さい所謂台付き椀であると推測される。

○磨石（41,42）

大部分を欠損する。41は端部、42は中間部の残存である。ともに明瞭な研磨作業による表面の平滑化が認められる。

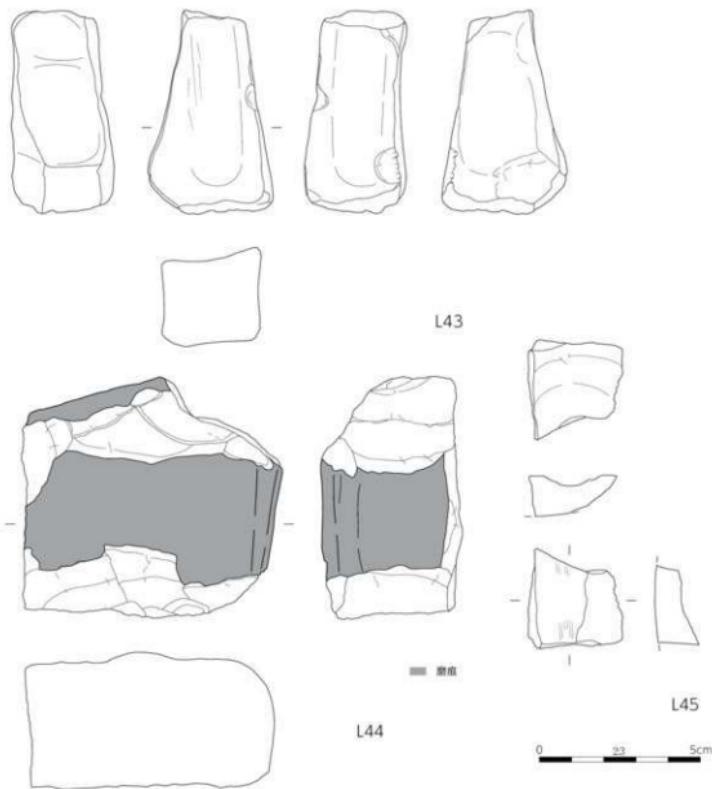
○砥石（43～45）

形状から手持ちのもの（43,45）と据え置きのもの（44）に分かれる。全て破片である。

（2）土器溜まり

[S10]

調査区北端において土器の集中が認められ



第56図 S22出土石器実測図1

第12表 S22出土石器観察表

挿図	調査区	遺構	層位	時代	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
L41		S22	①		磨石	4.23	3.50	1.30	13.29	
L42		S22	①		磨石	1.98	5.24	1.80	17.65	
L43	C2, C3	S22	①		砥石	6.35	3.87	3.24	88.42	
L44	C2, C3	S22	①		磨石	7.56	8.30	4.40	418.81	
L45		S22	①		砥石	2.96	3.10	1.93	13.71	

た。土器の周辺は約20cm程度のやや浅くくぼむ地形にあり、土器はそのくぼみよりも上に固まった形で分布している。元々掘られた土坑のようなものが埋没過程で浅くくぼんだ部分が存在し、そのくぼみに土器を投棄したものと考えられる。

土器は土師器で占められ、器種は甕を主体とし、一部に高壺・壺を含む。

遺構内出土遺物

○高壺 (256,257)

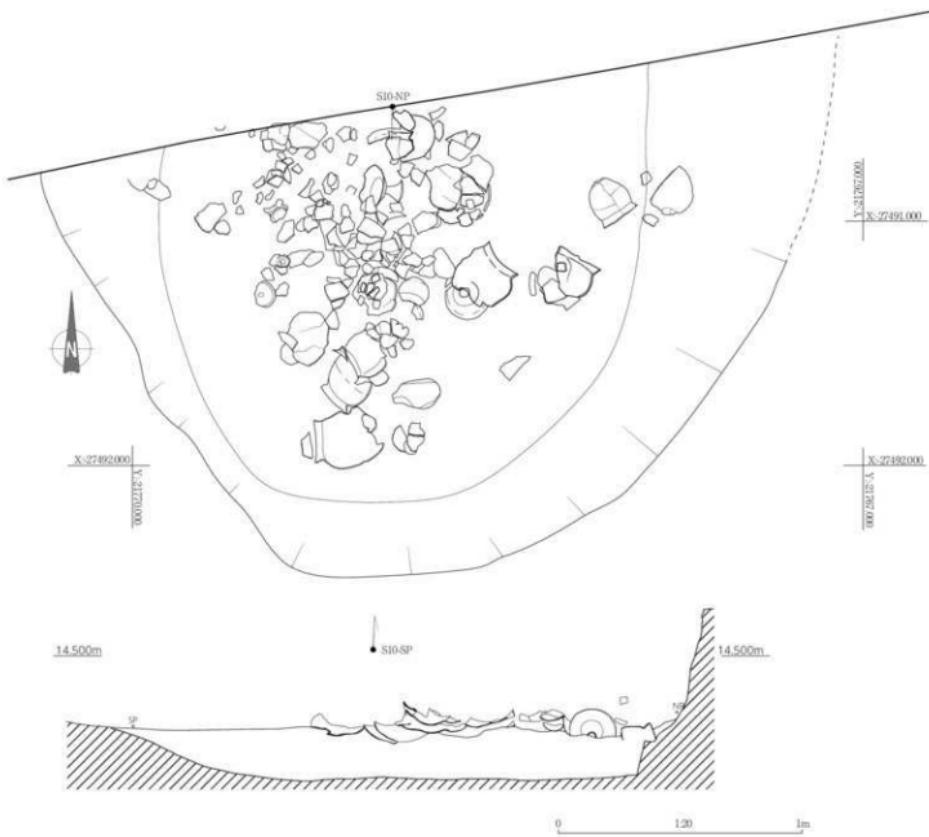
脚部を有するものと壺部のみのものがある。256は脚部を有する高壺である。壺と胴が

未分化の脚で壺上部に円形透かしが3つある。壺部は胴と口縁が明確に分かれており、中間付近で段がつく。段を境に口縁は広く拡がり断面形状は花弁のようである。胴は底に向かってゆるやかな弧を描き、塊状を呈する。

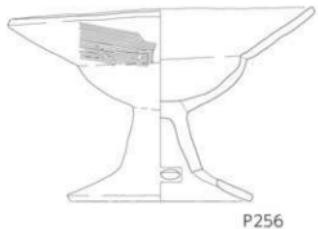
257は256とはほぼ形状を同じくするが、塊部の胴と口縁の境目が直線的であり、胴も直線的となるためやや角張った印象を受ける。また、直線的な胴により若干浅く感じる。

○壺 (258)

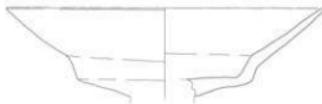
円形で小型の壺である。器面はともにナデ調整であるが、荒れ気味の器面のため不明瞭であ



第57図 土器溝まり (S10) 遺構実測図



P256



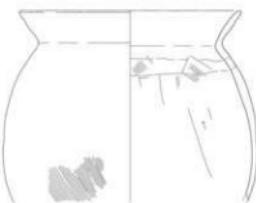
P257



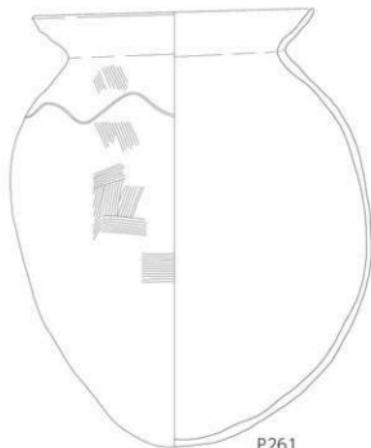
P258



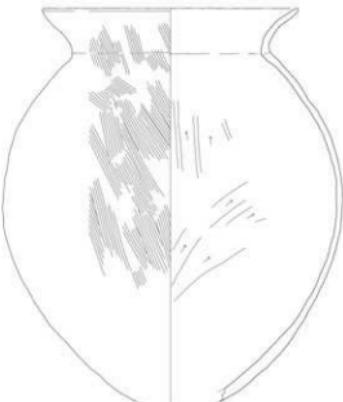
P259



P260



P261

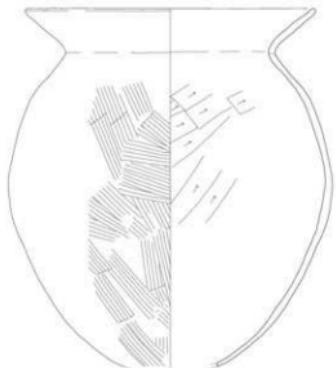


P262

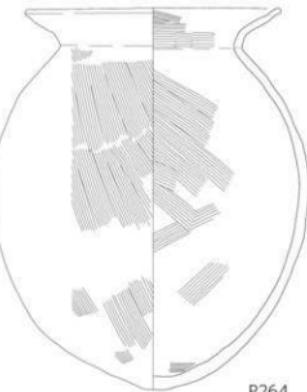
0 13 10cm

第58図 土器溜まり (S10) 遺構実測図

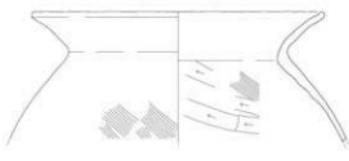
古墳前期前葉



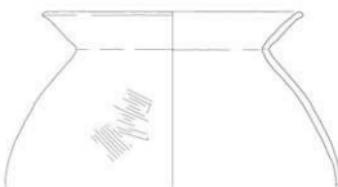
P263



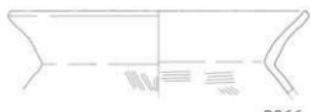
P264



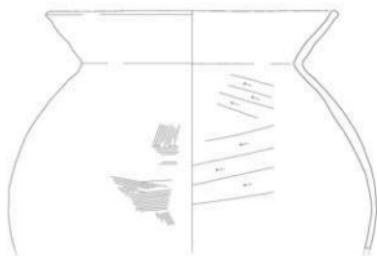
P265



P267



P266



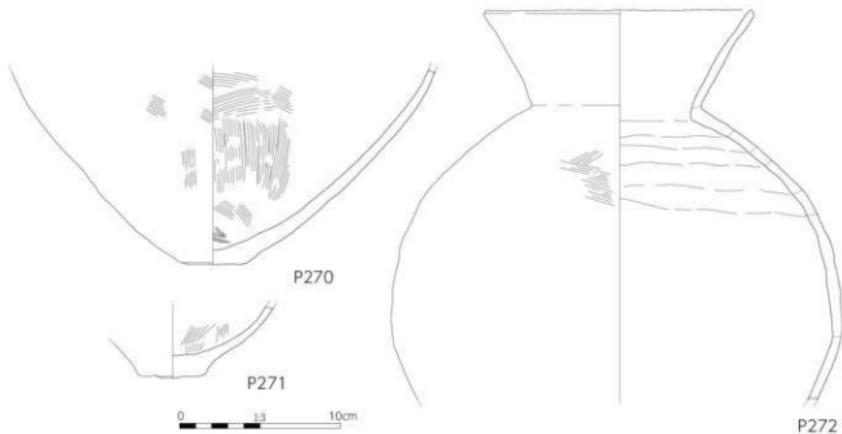
P268



P269



第59図 S10 出土遺物実測図



第60図 S10出土物実測図

第13表 S10出土土器観察表

保存番号	遺構	グリッド	出土位置	区分	器種	部位	口径 (cm)	高さ (cm)	底径 (cm)	質和材	色調 (内)	色調 (外)	調整 (外)	調整 (内)	焼成	備考
P256	S10	H2	1	土師器	瓶	口縁	18.9	22.0	11.4	灰石、黒陶	暗	暗	ナゲ、ハケ目	ナゲ	良材	傾かし、3+
P257	S10	-	土師器	瓶	口縁	19.0	15.33	-	灰石、赤陶石 赤陶化焼成	暗	暗	ナゲ	ナゲ	良材		
P258	S10	-	土師器	瓶	口縁	11.6	3.2	-	灰石、赤陶石 赤陶化焼成	暗	暗	ナゲ	ナゲ	良材		
P259	S10	H2	1	土師器	甕	口縁	13.0	18.0	-	貝壳、石英、陶石 赤陶化焼成	淡黄褐	淡黄褐	ナゲ、ハケ目	ナゲ、ハラケ目	良材	外側曲輪底に漆付有
P260	S10	H2	3	土師器	甕	口縁	13.40	11.73	-	貝壳、石英、陶石 赤陶化焼成	淡黄褐	淡黄褐	ナゲ、ハケ目	ナゲ、ハラケ目	良材	内部底に漆付有り
P261	S10	H2	1	土師器	甕	口縁	17.3	22.0	-	貝壳、石英、陶石 赤陶化焼成	淡黄褐	淡黄褐	ナゲ、ハケ目	ナゲ	良材	銅鏡に覆付有り+条
P262	S10	H2	1	土師器	甕	口縁	15.6	21.25	-	貝壳、石英、陶石 赤陶化焼成	淡黄褐	淡黄褐	ナゲ、ハケ目	ナゲ、ハラケ目	良材	内、外側面に漆付有
P263	S10	H2	1	土師器	甕	口縁	17.0	12.00	-	貝壳、石英、陶石 赤陶化焼成	淡黄褐	淡黄褐	ナゲ、ハケ目	ナゲ、ハラケ目	良材	外側面に施施
P264	S10	H2	1	土師器	甕	口縁	15.0	23.4	-	貝壳、石英、陶石 赤陶化焼成	淡黄褐	淡黄褐	ナゲ、ハケ目	ナゲ、ハラケ目	良材	外側面に施施
P265	S10	H2	3	土師器	甕	口縁	18.0	16.40	-	貝壳、石英、陶石 赤陶化焼成	淡黄	淡黄	ナゲ、ハケ目	ナゲ、ハラケ目	良材	
P266	S10	-	土師器	甕	口縁	18.0	15.13	-	貝壳、石英、陶石 赤陶化焼成	淡黄褐	淡黄褐	ナゲ、七ガキ	ナゲ、ハケ目	良材		
P267	S10	H2	3	土師器	甕	口縁	16.00	16.73	-	貝壳、石英、陶石 赤陶化焼成	淡黄褐	淡黄褐	ナゲ、ハケ目	ナゲ	良材	
P268	S10	H2	1	土師器	甕	口縁	18.0	14.40	-	貝壳、石英、陶石 赤陶化焼成	淡黄褐	淡黄褐	ナゲ、ハケ目	ナゲ、ハラケ目	良材	
P269	S10	H3	-	土師器	甕	口縁	17.0	13.00	-	貝壳、石英、陶石 赤陶化焼成	淡黄褐	淡黄褐	ナゲ	ナゲ	良材	
P270	S10	-	土師器	甕	口縁	-	12.00	4.1	貝壳、石英、陶石 赤陶化焼成	淡黄	淡黄	ナゲ、ハケ目	ナゲ、ハケ目	良材		
P271	S10	-	土師器	甕	口縁	-	13.00	4.1	貝壳、石英、陶石 赤陶化焼成	淡黄	淡黄	ナゲ、ハケ目	ナゲ、ハケ目	良材		
P272	S10	H3	2	土師器	甕	口縁	16.5	21.05	-	貝壳	淡黄	淡黄	ナゲ、ハケ目	ナゲ	良材 内側面に漆付有り+条	

る。

○壺（259～269）

広口の口縁を持ったもので口縁径よりも大きな胴部を有するいわゆる球形胴とよばれる壺である。S10 で出土した壺はほぼこの形であり、若干胴部の形状が長めのものと球状のものが混在することからこの遺構が同時期ではあるがある程度の時間差を有するものと思われる。

は胴部上方に波状の沈線が施されるほかは基本無文である。調整は内外器面ともに斜め方向のハケ目を主体とする。

○壺（270～272）

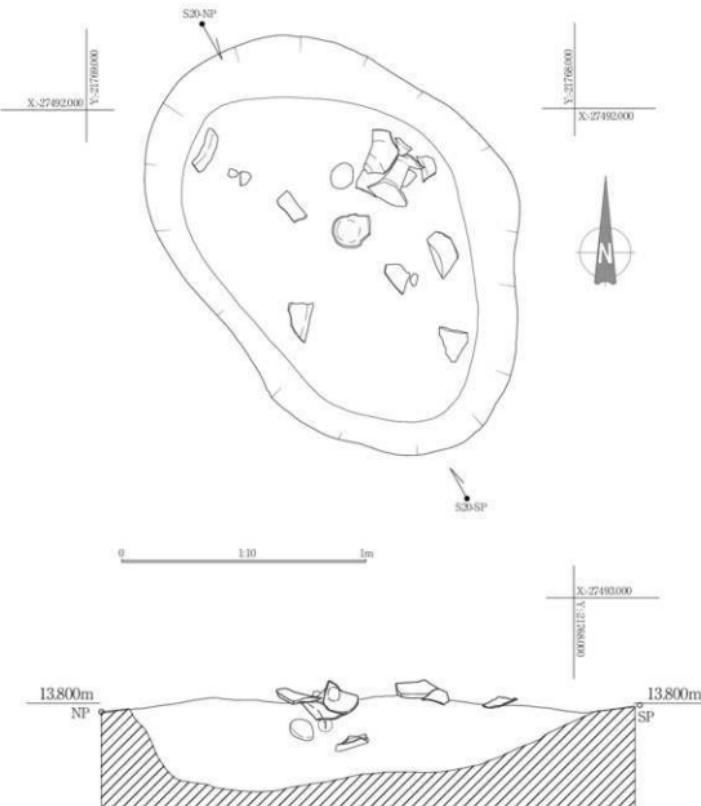
数としては少ないが壺も出土している。壺に比べて口縁は狭いものの上方に広く口を開いており、球形の胴については壺よりも大きく張り出す。器面が荒れがちであるため調整ははつきりとしない。

(3) 土坑

【S20】

S10 に近い位置にある遺構である。形状は長軸方向に約 1 m 50cm、短軸方向約 1 m の楕円形を呈する。深さは最深部で検出面から約 30cm と比較的浅い。

土器は検出面～土坑の中間部にかけて出土し



第 61 図 土坑 (S20) 遺構実測図

ている。器種は高坏、小型丸底壺などの土器に加え、磨石が出土している。S10における年代観もほど近く、近い時期に形成されたものと考えられる。

○高坏 (273)

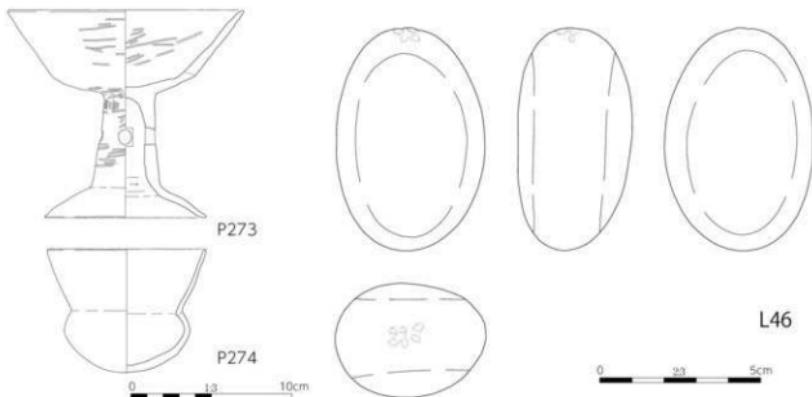
胴は筒状で裾部はやや広がる形態の脚部に広口の口縁を持つ坏部で構成される。脚胴部に穿孔透かしが2つ施される。内・外器面はナデ調整のちミガキとなっており脚部と坏部の境目付近ではハケ目が残存する。

○小型丸底壺 (274)

高さ約8cmの広口口縁部を有する小型丸底壺である。器面はナデ調整止まりであり、ミガキは認められない。

○磨石 (46)

楕円形の石材を用いた磨石である。長軸端部に敲打痕が認められる。



第62図 土坑 (S20) 出土遺物実測図

第14表 土坑 (S20) 出土遺物観察表

検査番号	遺構	グリッド	出土層位	区分	器種	断面	口径(cm)	最高(cm)	底径(cm)	調和材	色調(S)	色調(P)	調整(内)	備考
P273	12B	-	土坏部	高坏	口縁 一底部	口縁 一底部	11.4-6	12.8	10.8	粘土、石英、角閃石 赤色鉄化物	黒 RoxSBT7.0 RoxSBT7.4	にじむ ハート	ナゲ、ミガキ ハート	ナゲ、ミガキ 直脚 透かし、2+
P274	12B	-	土坏部	小型丸底壺	口縁 一底部	口縁 一底部	9.7	7.8	-	粘土	12.5-1 RoxS19B-1	12.5-1 RoxS19B-2	ナゲ	ナゲ 直脚

検査番号	調査区	遺構	層位	時代	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
L46	22	S20	①	古墳	磨石	6.29	4.68	3.55	166.71	

2 古墳時代の包含層出土土器(第63～69図)

(1) 壺

壺は脚を有さずやや長胴のもので線文(286,287)並びに波状文(284,285)を有するもの、最大胴部径が口縁径を上回り胴部が強く張り出すもので占められる。調整は概ねナデ及びハケ目であり、一部には外器面にタタキ目を残すもの(278,279)も含まれる。

(2) 壺

壺に比べると数としてはわずかではあるが、大形の壺も出土している。

293は二重口縁壺であり、頭部直上に疑似口縁を有し、その擬口縁に貼り付けて広口になるように口縁を巡らす。294～295はその傾向がやや簡略化されたものと思われ、擬口縁からの立ち上がりがあり發達しない。

303は広口壺である。住居址(S22)で出土したものと形態が似る。内外器面ともにミガキを施し、精製である。

(3) 丸底壺(304～317)

丸底壺にはいくつかの特徴が見られ、小形のもの(310～317)、やや大形のもの(304～309)と大きさで2つに分かれる。

また、口縁と胴部の高さ比率が口縁が胴部の2倍以上となるもの(312,313～316)、ほぼ同じ比率となるもの(310,316)口縁が胴部に比べて短いもの(304～309)など特徴に差が見られ、特に口縁が短いものはやや大形のものに限られている。

調整は他の器種に比べて精製のものが多く、内外器面ともにミガキを施されるものもある。

(4) 坏(318～322)

他の器種に比べると数は少ないが坏も出土している。7～8cmと器高が高く楕状を呈するもの(318,319)、3～4cmとやや低いもの(320～322)の2種に分かれる。内外器面ともにナデ調整が施されている。

(5) 高坏(326～345)

様々な形の高坏が出土している。概して脚が短く、脚部と裾部の境が不明瞭なものが多い。その一方で329は破片であるが脚が長く、脚と裾の境が明瞭であるものである。また、脚部中頃に円形の透かしが2カ所設けられている。

331は短い脚に境目から広く拡がる裾を持つものである。脚と裾の境目付近に3カ所透かしが設けられる。

332～345は脚と裾が未分化のものである。ほとんどが坏部を欠いているが340のようなあまり口縁の発達しない坏部を有するものであると推測される。脚の中頃に透かしが2～4設けられる。341～345は坏部口縁と同じかそれ以上に広がる脚を持つ所謂台付き鉢と呼ばれるものである。坏部は340に見られるよりも法量が大きい。

(6) 瓶・有孔鉢

346は瓶の棧部に当たるものと思われるものである。

347,348は有孔鉢である。鉢の形状を取るが底部に焼成前穿孔が認められる。348は絞り痕のようないわゆる見られ、捻りあげて整形されたものか。外器面はタタキ、工具痕が残る。

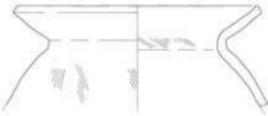
(7) 小結

本遺跡では弥生時代後期末にかけて見られる脚を有する長胴壺は認められず、脚のないやや長胴の壺及び球形胴のもので占められる。つまり近畿V様式系統のもの並びに布留系統のものである。また、高坏の形状から壺と時期をほぼ同じくする近畿系のものと在地系の並存が指摘されよう。

住居址(S22)及び土器だまり(S10)における時期もこれら包含層出土土器とほぼ同じくしており、遺跡の中心時期の一つであると言える。



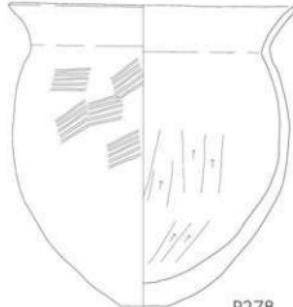
P275



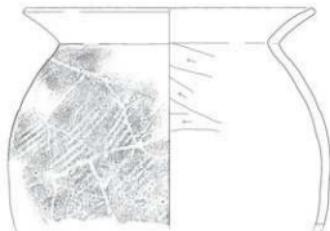
P276



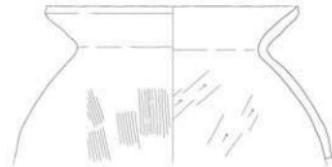
P277



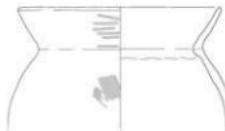
P278



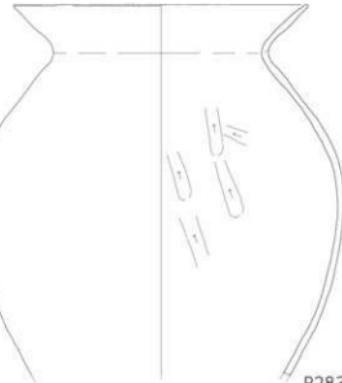
P279



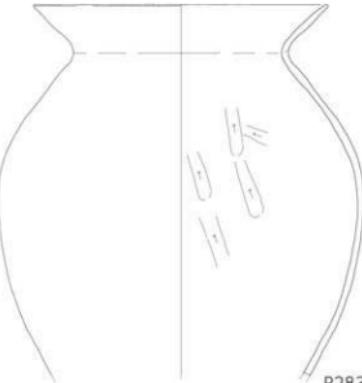
P280



P281



P282

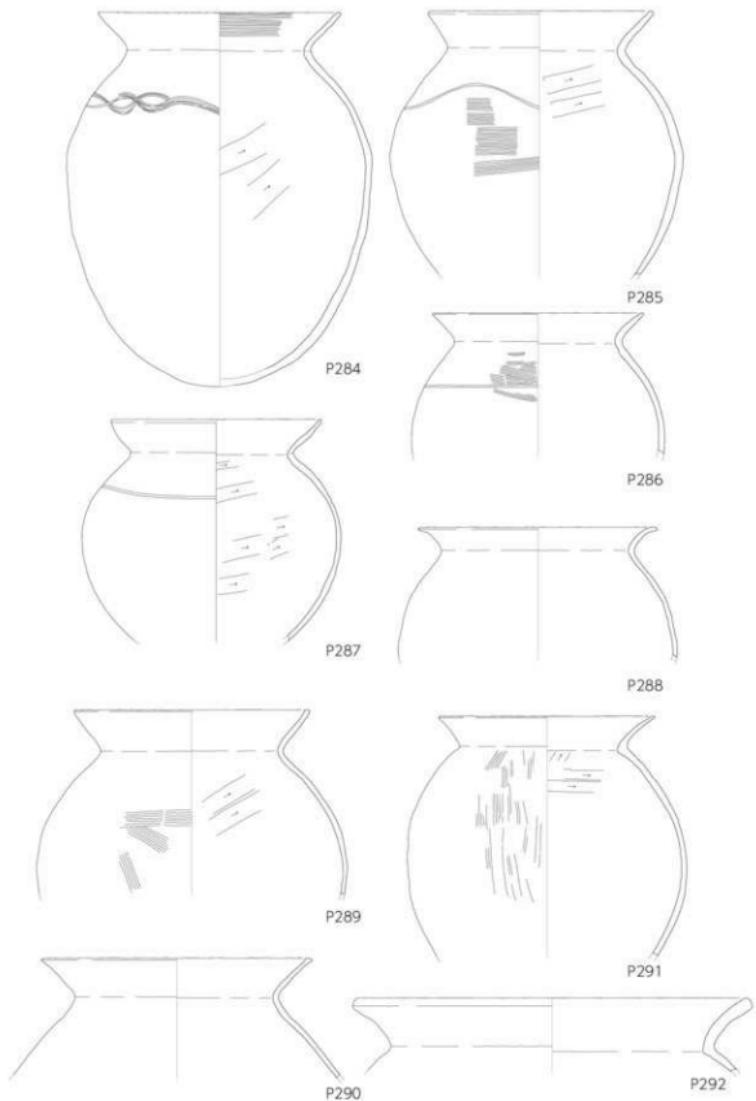


P283

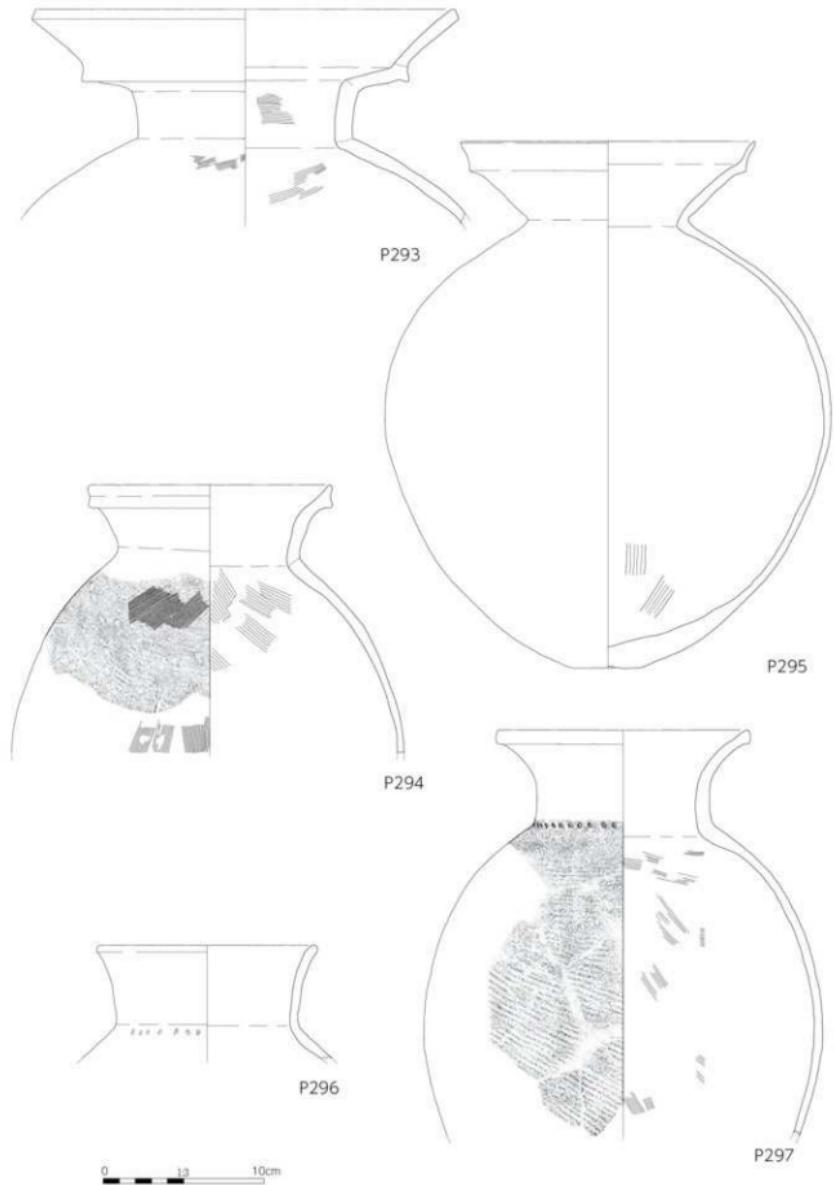
第63図 包含層出土土器（古墳時代）

10cm

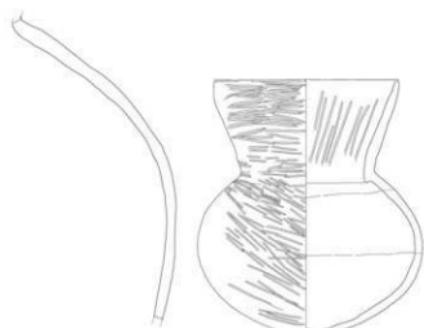
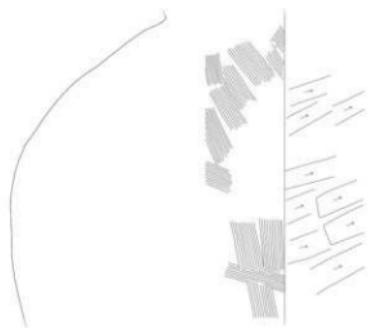
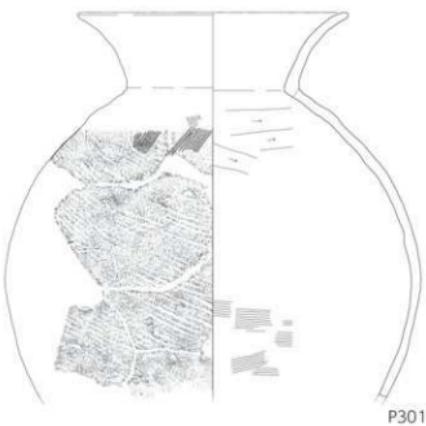
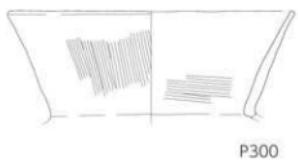
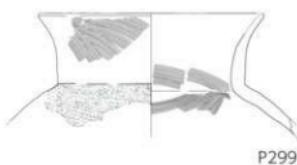
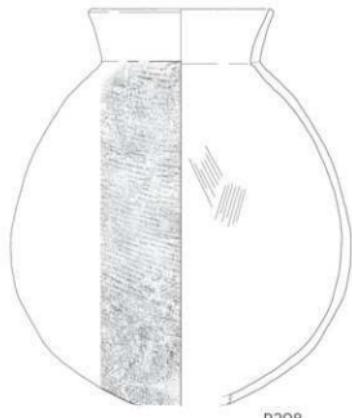
13



第64図 包含層出土土器（古墳時代）2

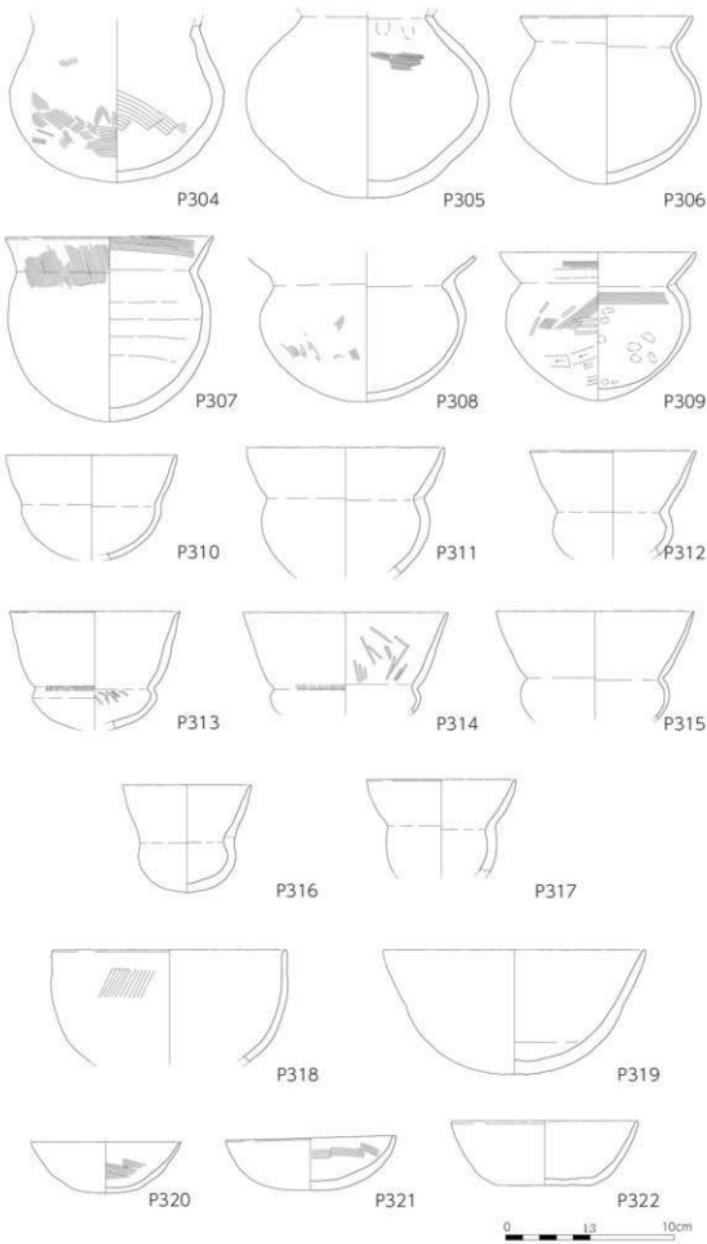


第65図 包含層出土土器（古墳時代）3

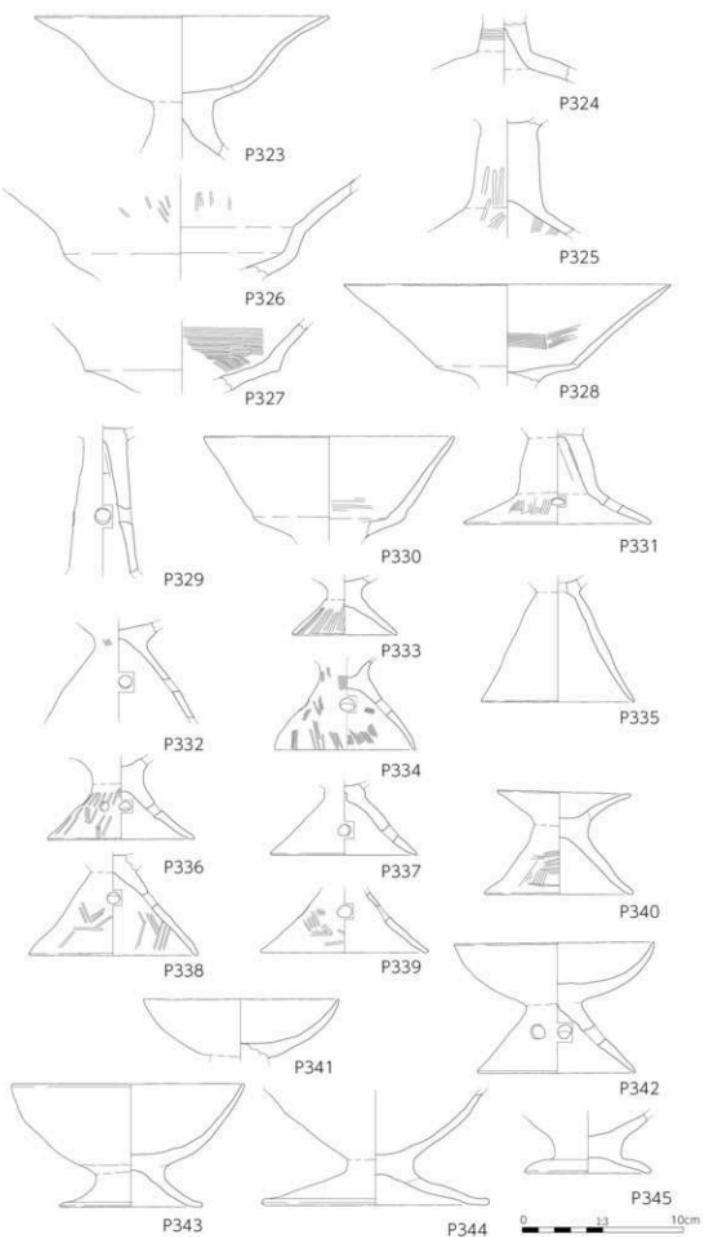


0 10cm

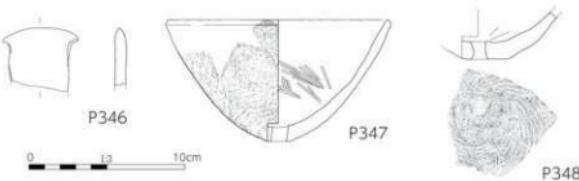
第66図 包含層出土土器（古墳時代）4



第67図 包含層出土土器（古墳時代）5



第68図 包含層出土土器（古墳時代）6



第69図 包含層出土土器（古墳時代）7

第15表 包含層出土土器観察表（古墳時代）

件番号	遺構	分類	基準	基様	縦様	口径 (cm)	高さ (cm)	底径 (cm)	底様	底材	色調 (H)	色調 (P)	底形 (S)	調査 (R)	備考	備考
P225	-	2	土師器	素	口縁 ～脚部	(22.2)	(6.8)	-	直石、内側有 施色焼成化粧	灰	Hue7.31106.6	Hue7.31106.6	ナゲ	ナゲ	良好	
P226	H2	-	土師器	素	口縁 ～脚部	(14.6)	(3.9)	-	直石、内側有 施色焼成化粧	灰	Hue7.31107.4	Hue7.31106.6	ナゲ、ハケ目	ナゲ、ハケ目	良好	
P227	-	4	土師器	素	口縁 ～脚部	(13.2)	(4.7)	-	直石、内側有 施色焼成化粧	灰	Hue7.31107.4	Hue7.31106.7	ナゲ、ハケ目	ナゲ、ハケ目	良好	外表面に保村青
P228	H2	-	土師器	素	口縁 ～脚部	(16.8)	(7.6)	2.8	直石、内側有 施色焼成化粧	灰	Hue7.31107.4	Hue7.31107.4	ナゲ、タキリ	ナゲ、タキリ	良好	外机面に黒斑
P229	H2	-	土師器	素	口縁 ～脚部	(17.1)	(7.1)	-	直石、内側有 施色焼成化粧	灰	Hue7.31107.4	Hue7.31106.6	ナゲ、タキリ	ナゲ、タキリ	良好	外表面に保村青
P230	-	4	土師器	素	口縁 ～脚部	(14.9)	(9.8)	-	直石、内側有 施色焼成化粧	灰	Hue7.31107.4	Hue7.31106.6	ナゲ、ハケ目	ナゲ、ハケ目	良好	
P231	C2	-	土師器	素	口縁 ～脚部	(11.9)	(7.0)	-	直石、内側有 施色焼成化粧	灰	Hue7.31107.4	Hue7.31106.7	ナゲ、タキリ	ナゲ、タキリ	良好	外表面に保村青
P232	C2	2	土師器	素	口縁 ～脚部	(11.9)	(6.8)	-	直石、内側有 施色焼成化粧	灰	Hue7.31107.4	Hue7.31106.7	ナゲ	ナゲ	良好	外表面側面に黒斑あり
P233	H2	-	土師器	素	口縁 ～脚部	(17.2)	(21.6)	-	直石、内側有 施色焼成化粧	灰	Hue7.31107.4	Hue7.31106.7	ナゲ、タキリ	ナゲ、タキリ	良好	
P234	-	2	土師器	素	口縁 ～脚部	(10.8)	(25.8)	-	直石、内側有 施色焼成化粧	灰	Hue7.31107.4	Hue7.31106.7	ナゲ	ナゲ	鋤面に施伏沈継り糸	
P235	H2	-	土師器	素	口縁 ～脚部	(15.6)	(16.0)	-	直石、内側有 施色焼成化粧	灰	Hue7.31107.4	Hue7.31106.7	ナゲ、ハケ目	ナゲ、ハケ目	良好	鋤面に施伏沈継り糸
P236	-	3	土師器	素	口縁 ～脚部	(14.5)	(10.7)	-	直石、内側有 施色焼成化粧	灰	Hue7.31107.4	Hue7.31106.7	ナゲ、ハケ目	ナゲ、ハケ目	良好	鋤面に沈継り糸
P237	C2	2	土師器	素	口縁 ～脚部	(14.4)	(15.3)	-	直石、内側有 施色焼成化粧	灰	Hue7.31107.4	Hue7.31106.7	ナゲ	ナゲ	良好	鋤面に沈継り糸
P238	H2	2	土師器	素	口縁 ～脚部	(16.2)	(6.8)	-	直石、内側有 施色焼成化粧	灰	Hue7.31107.4	Hue7.31106.7	ナゲ	ナゲ	良好	鋤面に黒斑あり
P239	H2	3	土師器	素	口縁 ～脚部	(10.3)	(12.3)	-	直石、内側有 施色焼成化粧	灰	Hue7.31107.4	Hue7.31106.7	ナゲ、ハケ目	ナゲ、ハケ目	良好	
P240	C2	2	土師器	素	口縁 ～脚部	(10.8)	(6.2)	-	直石、内側有 施色焼成化粧	灰	Hue7.31107.4	Hue7.31106.7	ナゲ	ナゲ	良好	
P241	H2	3	土師器	素	口縁 ～脚部	(14.0)	(16.5)	-	直石、内側有 施色焼成化粧	灰	Hue7.31107.4	Hue7.31106.7	ナゲ、ハケ目	ナゲ、ハケ目	良好	外表面に赤筋
P242	-	土師器	素	口縁 ～脚部	(27.6)	(3.8)	-	直石、内側有 施色焼成化粧	灰	Hue7.31107.4	Hue7.31106.7	ナゲ	ナゲ	良好		
P243	C2	-	土師器	二重口縁器	口縁 ～脚部	(26.2)	(13.3)	-	直石、内側有 施色焼成化粧	灰	Hue7.31107.4	Hue7.31106.7	ナゲ、ハケ目	ナゲ、ハケ目	良好	
P244	H2	-	土師器	素	口縁 ～脚部	(15.9)	(16.5)	-	直石、内側有 施色焼成化粧	灰	Hue7.31107.4	Hue7.31106.7	ナゲ、タキリ	ナゲ、タキリ	良好	外表面側面に赤筋
P245	-	土師器	素	口縁 ～脚部	(18.1)	(32.2)	4.5	直石、内側有 施色焼成化粧	灰	Hue7.31107.4	Hue7.31106.7	ナゲ	ナゲ	良好	外表面側面に黒斑	
P246	H2	3	土師器	素	口縁 ～脚部	(13.7)	(17.0)	-	直石、内側有 施色焼成化粧	灰	Hue7.31107.4	Hue7.31106.7	ナゲ	ナゲ	良好	外表面側面に黒斑文
P247	H2	1	土師器	素	口縁 ～脚部	(15.6)	(25.0)	-	直石、内側有 施色焼成化粧	灰	Hue7.31107.4	Hue7.31106.7	ナゲ、タキリ	ナゲ、タキリ	良好	外表面側面に黒斑文
P248	-	H2	1	土師器	素	(11.4)	(21.3)	-	直石、内側有 施色焼成化粧	灰	Hue7.31107.4	Hue7.31106.7	ナゲ、タキリ	ナゲ、タキリ	良好	内部面側面に黒斑文

第6節 包含層出土石器

石器の多くは遺構から出土していない。多くはこの遺跡の中心的な時期である弥生時代中期のものと考えられるが、時期的な特徴を持たない器種については不明である。

1 砥石

砥石に分類されるもののうち、大きさや形状で用途として①据置、②可搬性重視、③携帯性重視の大きく3つに分類される。

(1) 据置型（第70～図）

長さ20cm以上、厚さ10cm程度の大形の砥石であり、床等に据え付けて使用したように思われるものである。

形状は直方体に近い。重量も相当程度である。使用部位は広い面だけでなく、側面にも使用痕が認められ、土中に一部を埋めて使用することで安定させたようなものと思われる。

146は先端がやや先細りの直方体状のもので小口以外の面全てを使用面とする。使用面は度重なる研磨の結果端部付近が外反する。

(2) 可搬性重視型（第図）

据置型に比べて、長さ10～15cm、厚さ3～5cmと比較的小さく軽量のものである。両側に平坦面をもつ方形のものであったと考えられ、多くは破損する。

使用面は主に広い平坦面に集中し、側面の使用については据置型に比べて低調であるように見える。一部には敲打痕を有するもの（9）も含まれており、単純に砥石のみとして使用されたものではない可能性のものも存在する。

51は、被熱の結果いくつもの破片に破砕した砥石である。主な使用面は広い面を持つ表裏面を使用している。石器の大部分に被熱の痕跡である赤化とスス状痕跡が見られる。

(3) 携帯性重視型

現代における砥石に近い棒状の形態をしているものである。研磨の進行により中央部が凹み、それが全面に及んだ結果端部が太く中央部がくびれる形状を示すものが多い。

(4) 方形

砥石とするか判断に迷うものもあるが、上記のものとは明らかに形状を異とするものであ

る。また、109・130のように側縁を使用ではなく整形（面取り）のように直線的になっているものもある。また、表面は使用によって全面的に平滑化している一方、裏面は原礫面むき出しになっており、やや凹面を形成しているようにも見える。

2 磨石

表面が研磨作業により平滑化した磨石の一群である。形状は球形、扁円形、亜角形などのものがあり、扁円形が多数を占める。

縁辺部および中央部に敲打痕が認められるものも含まれており、次項で扱う敲石と機能的に不可分なものもあると思われる。また、一部には顔料が付着したものもあり、粉碎対象がそうした顔料なども含まれることを示唆している。

3 敲石

前掲の磨石と形状をほぼ同じくするが、一部にはばち状を呈するものも一定数含まれる。敲打痕が顕著であり、擦痕が低調であるものである。

使用部位は円形のものは石の縁辺部（特に端部）および中央部に集中しており、一部の資料では原礫面の形状を留めないほどに敲打を繰り返しているものも含まれる。

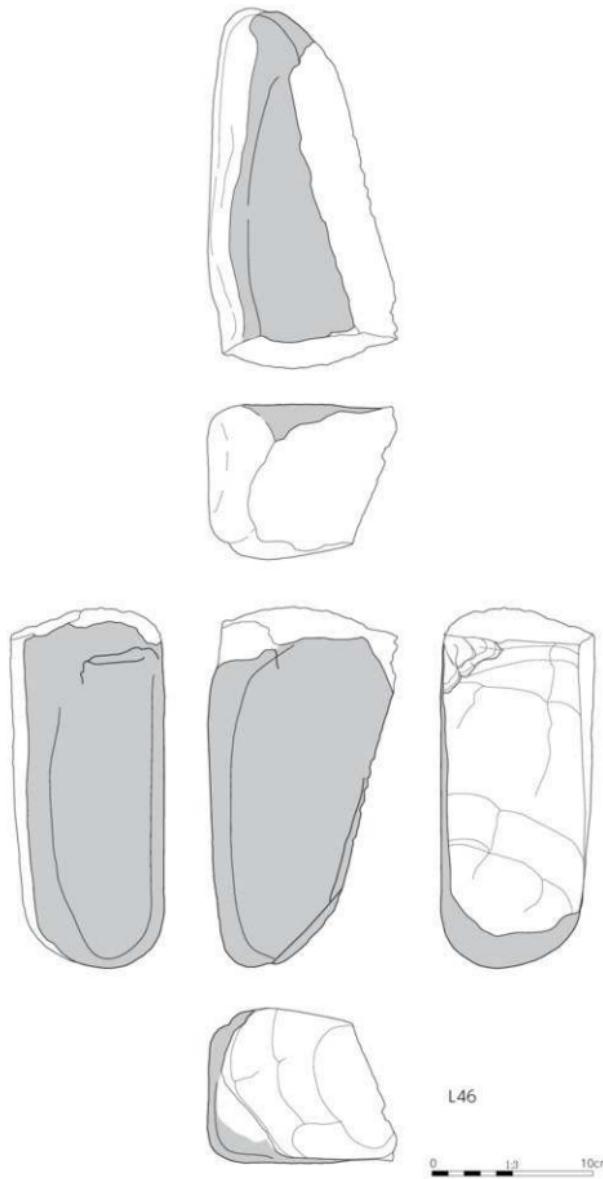
一方ばち形を呈するものは使用痕の分布が特定の側に偏る傾向が強く、使用のあり方として低調な部分を握って叩きつけるような運動が考えられる。

また、一部には擦痕を有するものが含まれ、切り合い関係により磨石として使用されていたものが敲石へと転用されたと考えられるもの、恒常に研磨と敲打を兼ねているものの2通りが考えられるが、前掲の磨石との兼ね合いを考えると後者と考えられる。

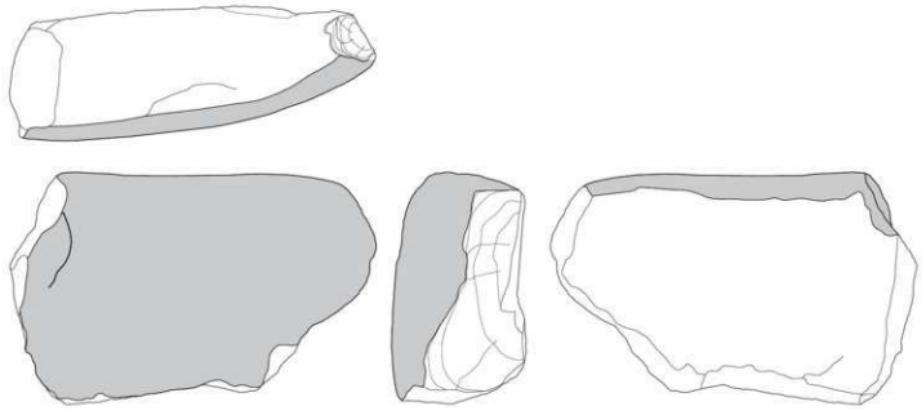
また、磨石にもあった顔料が残存するものがあり、同様に粉碎対象が顔料であることを示している。

4 台石

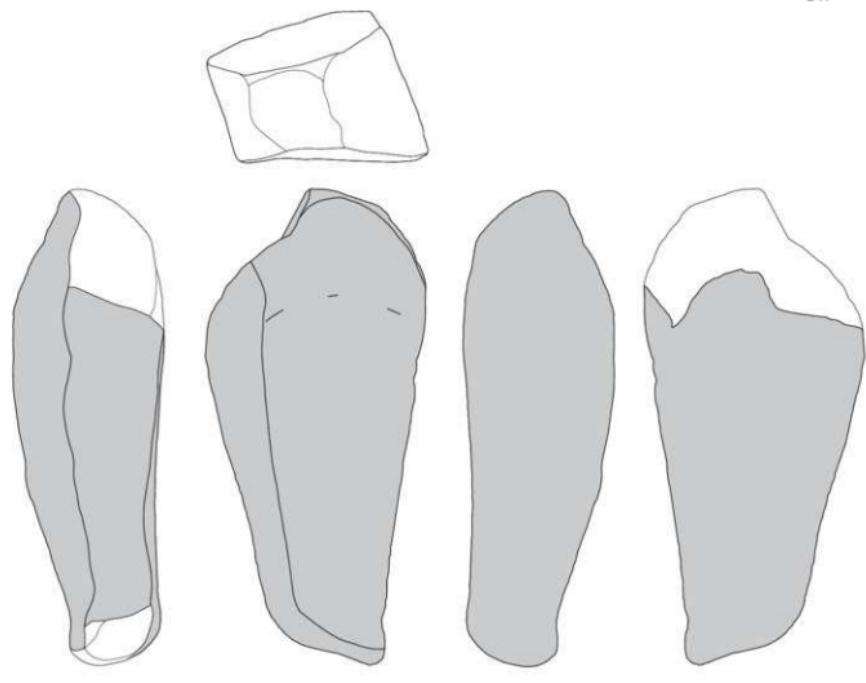
36は台石と考えられるものである。大部分を破損している。大きさから据置型の砥石に近



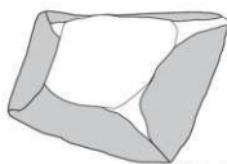
第 70 図 包含層出土石器 1



L47

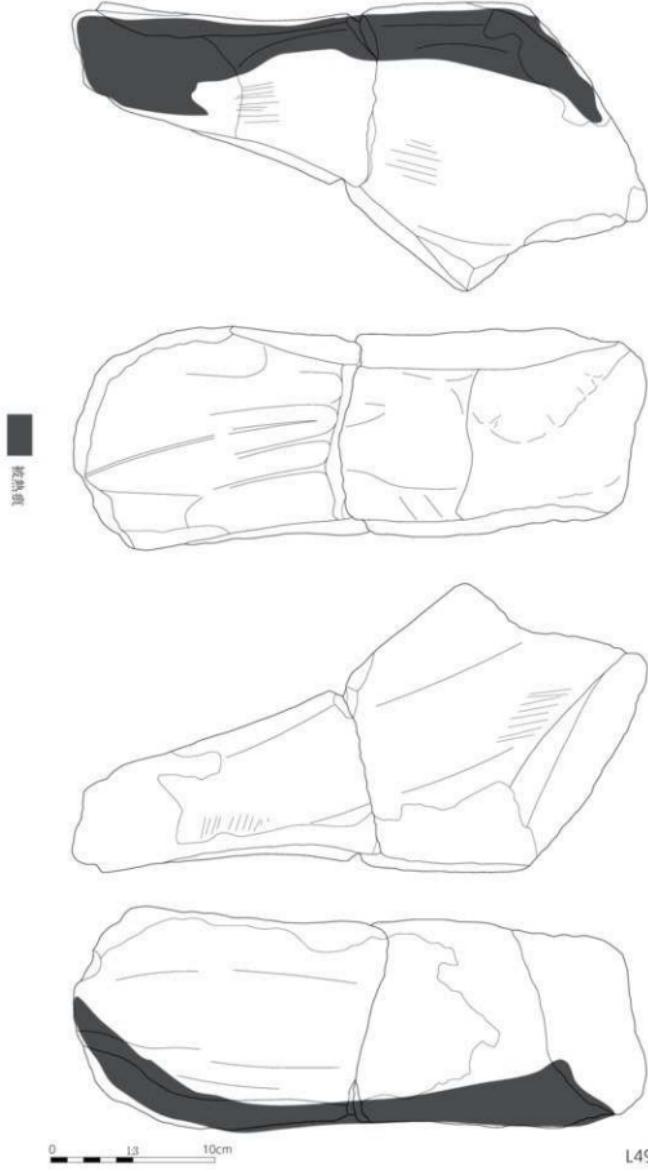


L48

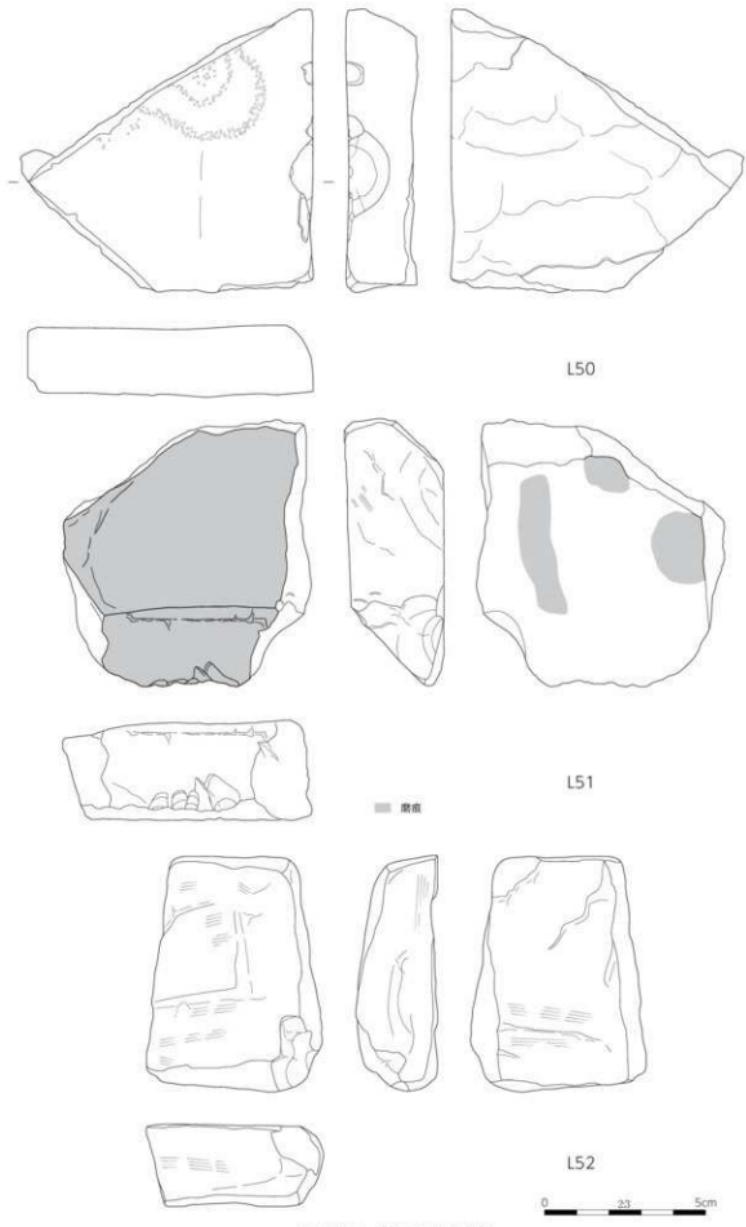


0 13 10cm

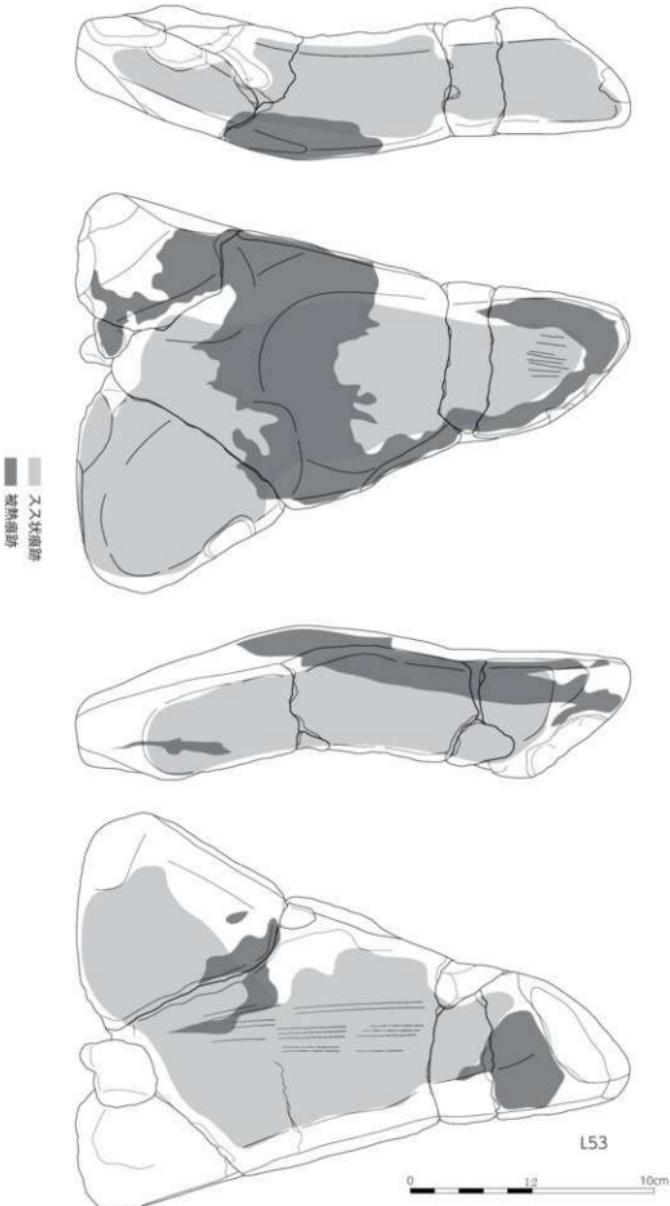
第 71 図 包含層出土石器 2



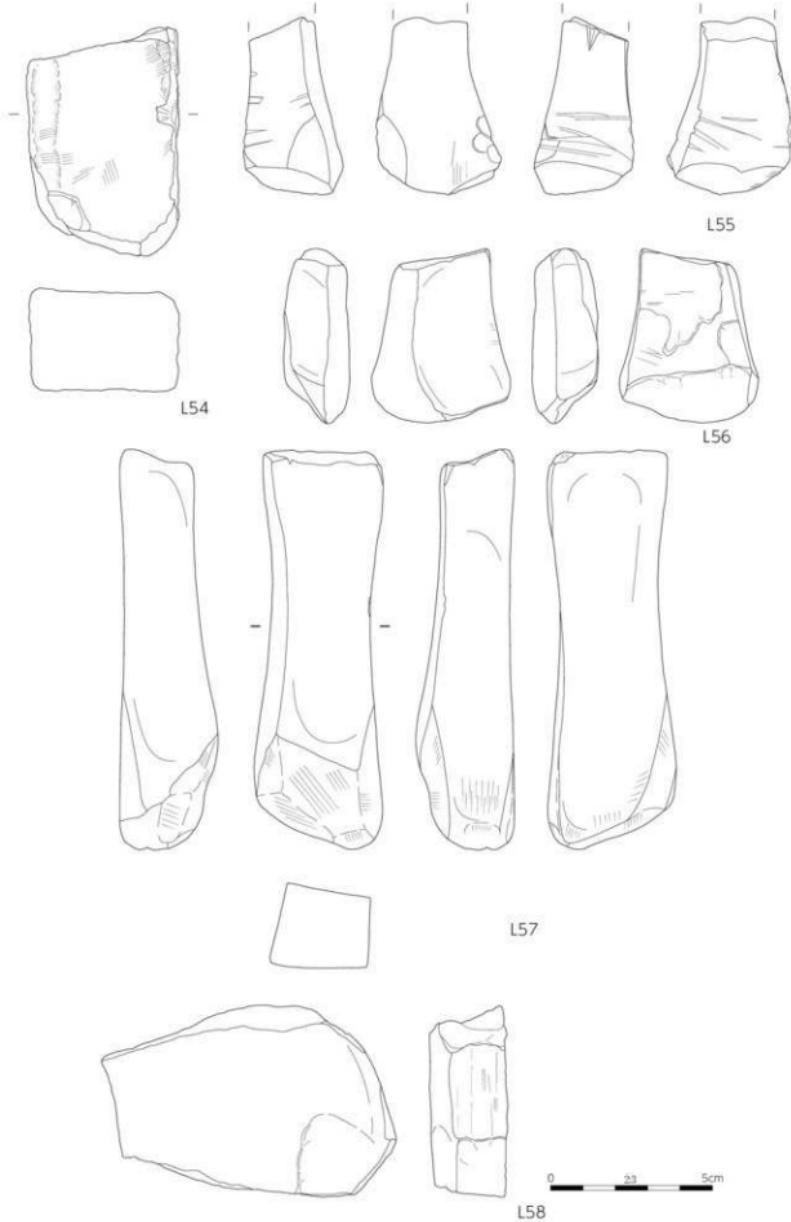
第 72 図 包含層出土石器 3



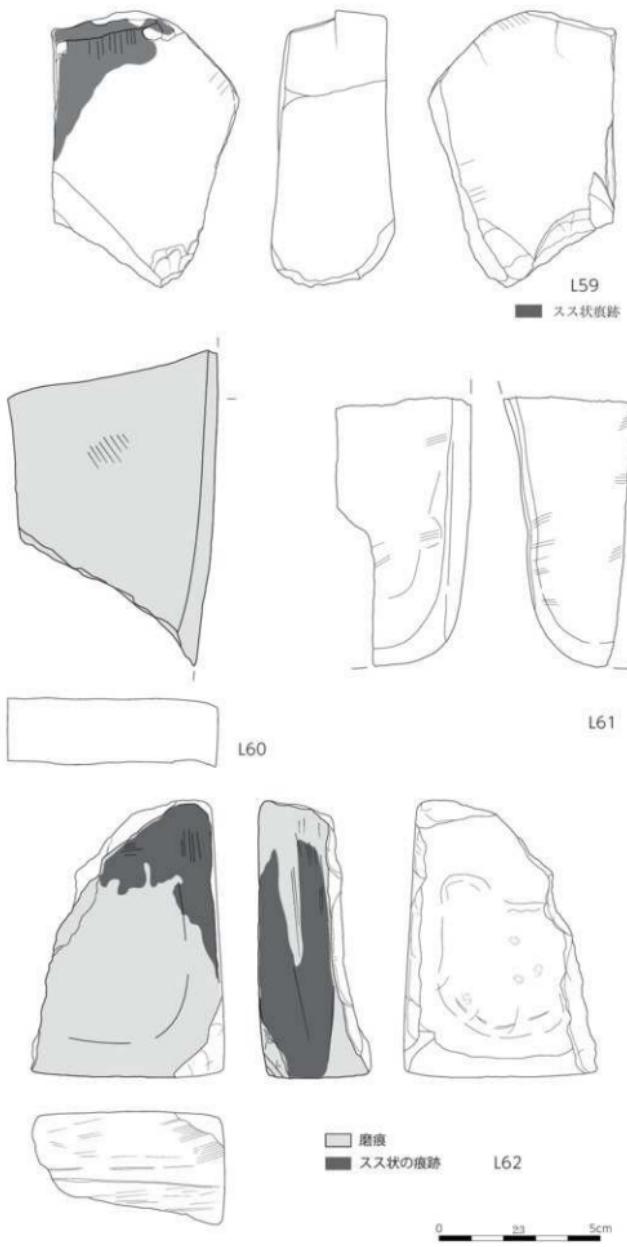
第73図 包含層出土石器4



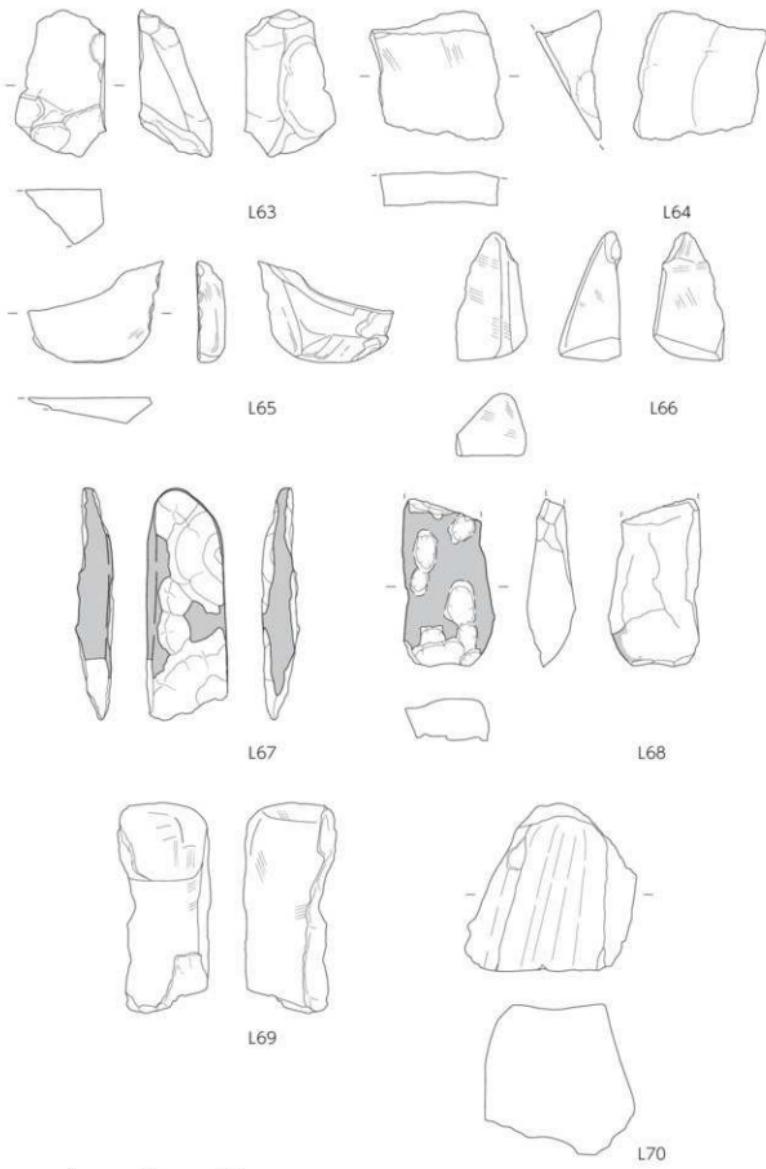
第 74 図 包含層出土石器 5



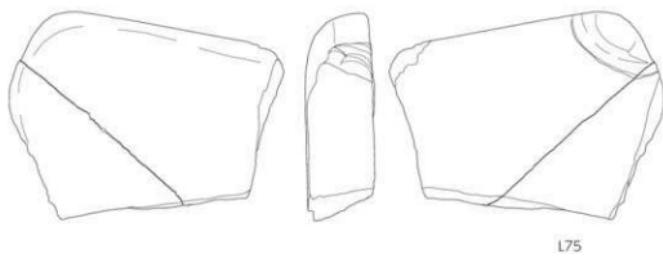
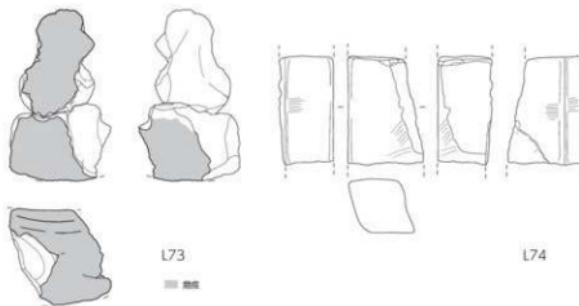
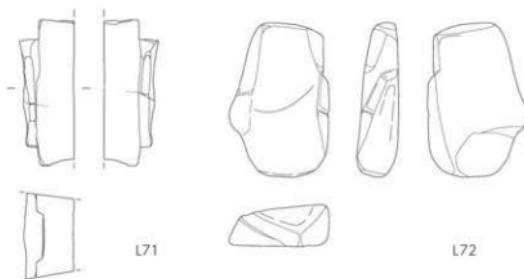
第 75 図 包含層出土石器 6



第 76 図 包含層出土石器 7

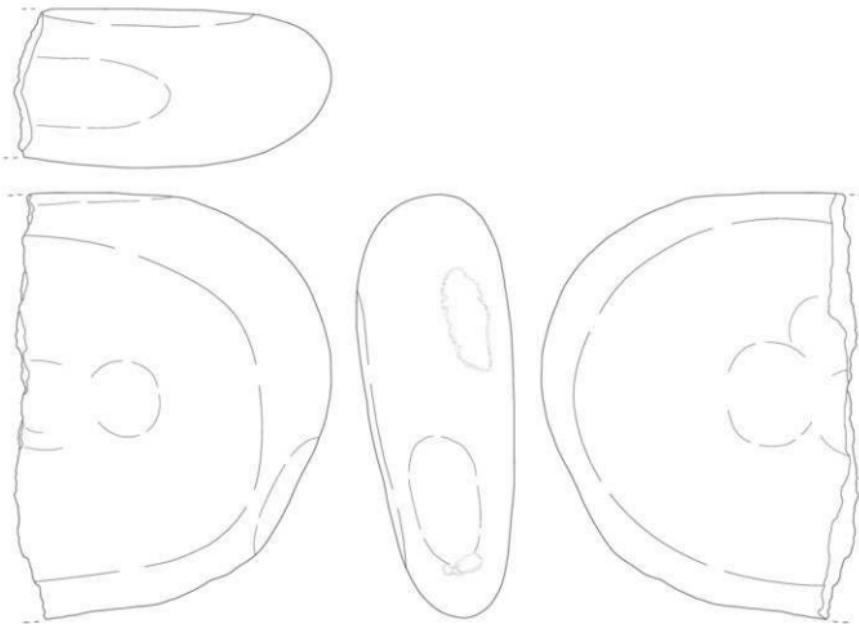


第 77 図 包含層出土石器 8

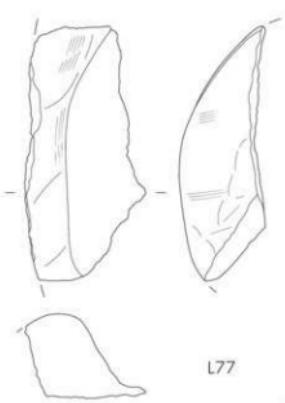
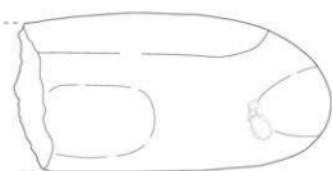


0 20 50 mm

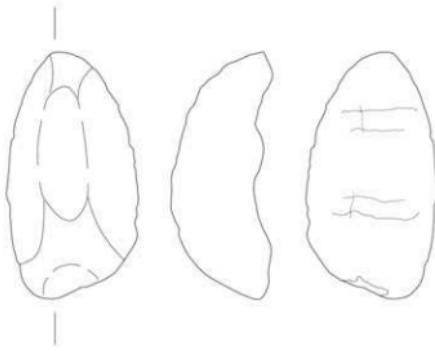
第 78 図 包含層出土石器 9



L76

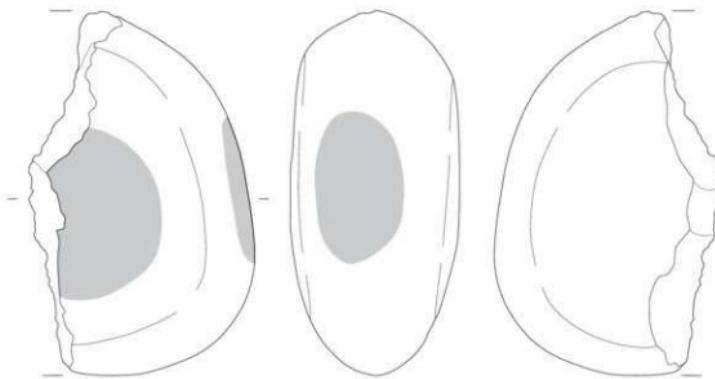


L77



0 23 5cm L78

第79図 包含層出土石器 10



L79

L80

L81

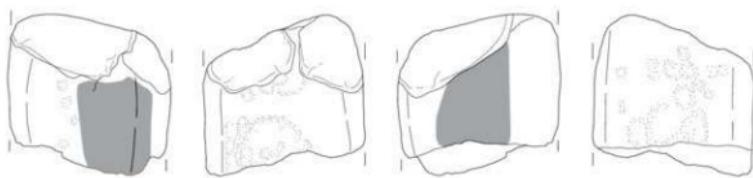


第 80 図 包含層出土石器 11



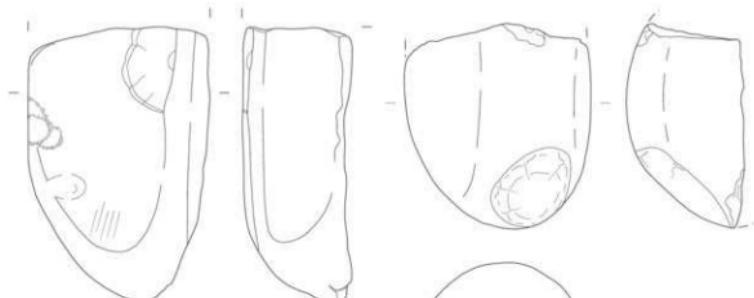
L82

■ 錐形

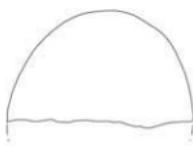


L83

■ 強い裏面



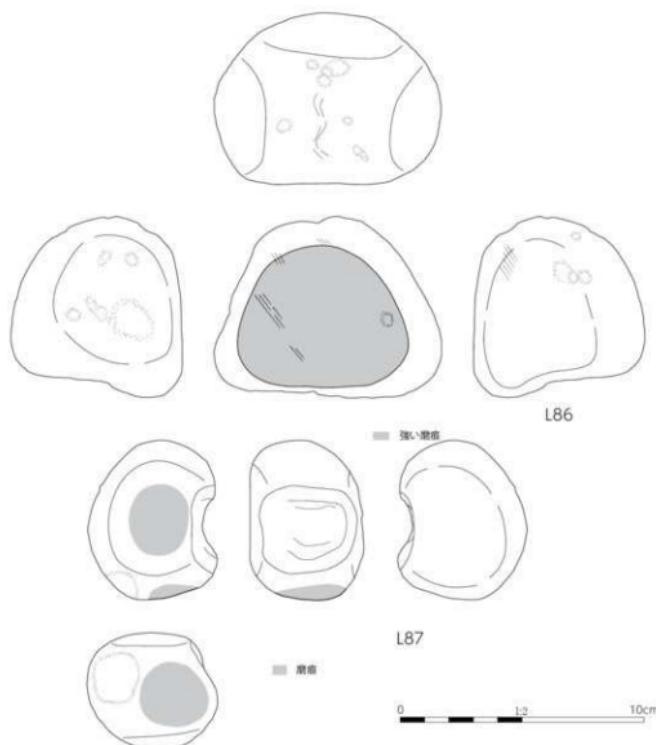
L84



L85

0 10cm

第 81 図 包含層出土石器 12



第 82 図 包含層出土石器 13

いが研磨痕が砥石に比べて少ないため台石とした。

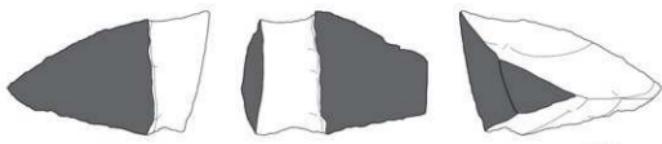
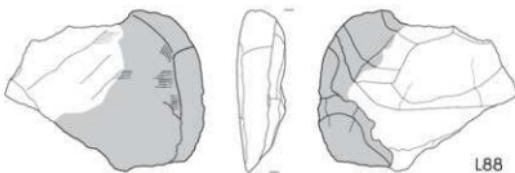
5 その他

(1) 不明石製品 (123,124,126)

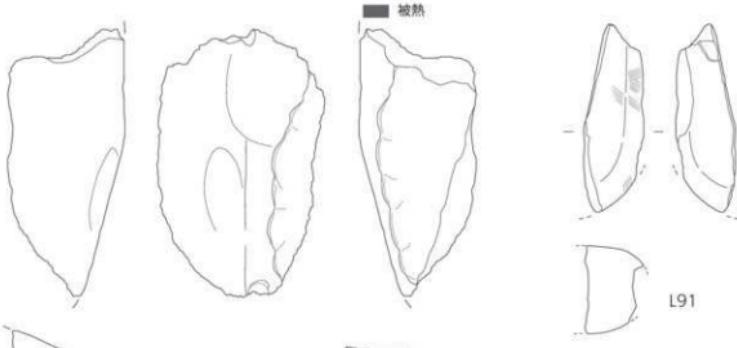
形状から機能的に分類できないものの、擦痕や加工が認められるため何らかの石製品であるとしたものである。

123,126 は均等に薄い石材で両面は擦られて平滑である。126 は上部を剥離するがその縁辺は擦れている。砥石に近いものか。

124 は砥石に使用される石材であるが基部を細く作り出している。上部の段は意図的なものか判断しかねたが、全体的な形状を見るに何らかの形状を模したものではないかと推測する。



L89

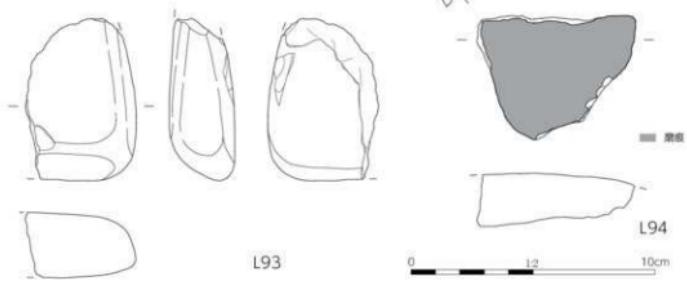


L91



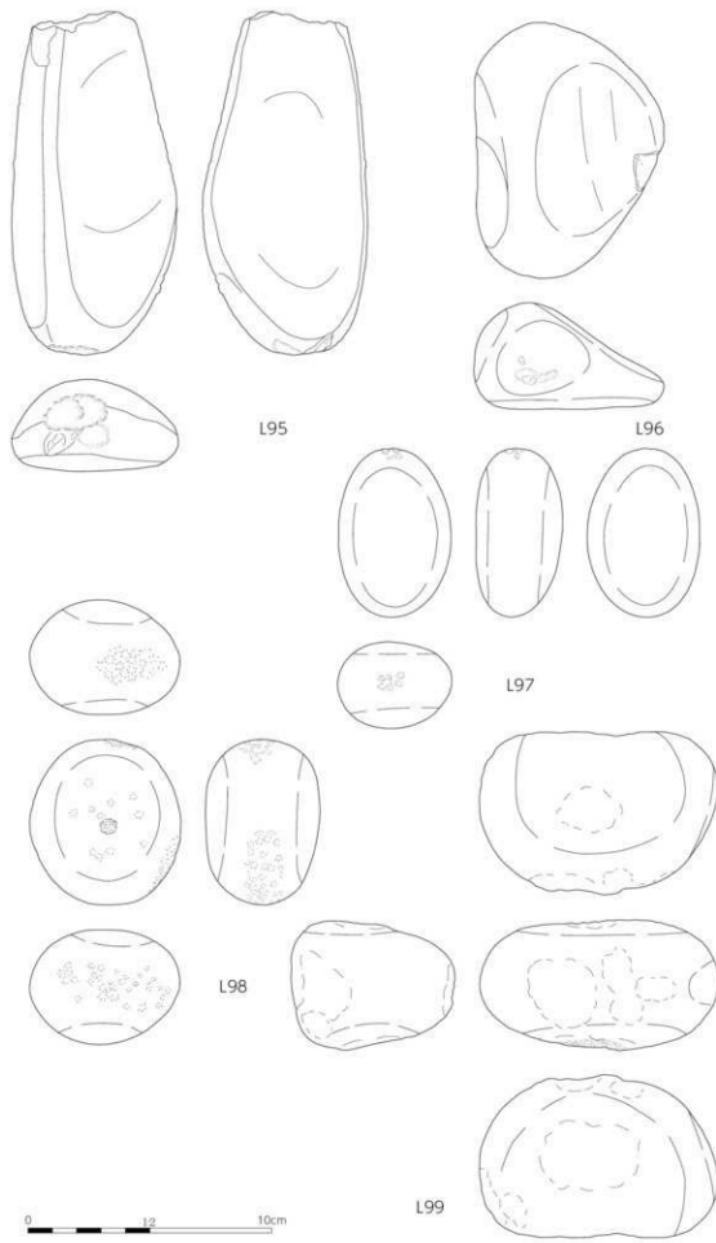
■ 熟成

L92



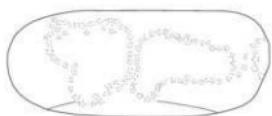
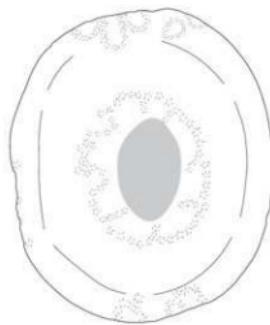
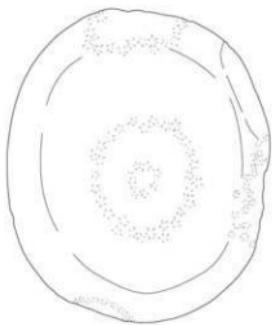
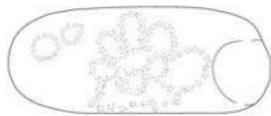
0 10cm

第 83 図 包含層出土石器 14

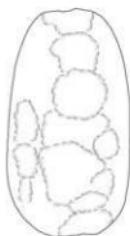
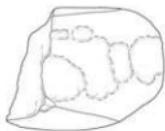


0 1cm 2cm 10cm

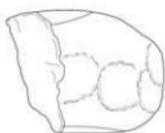
第 84 図 包含層出土石器 15



L100



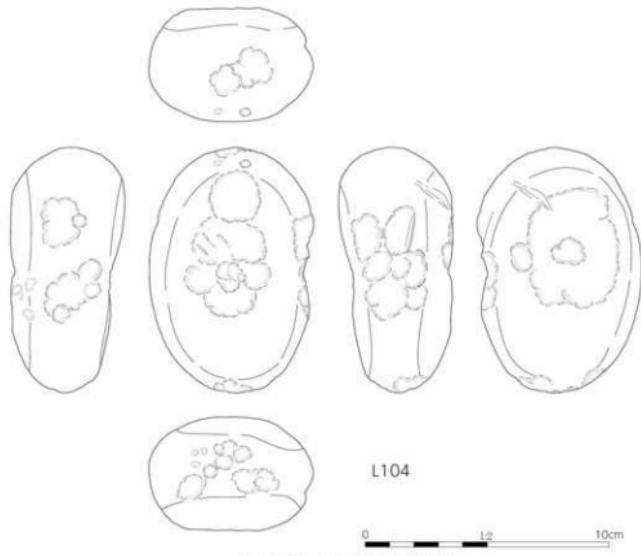
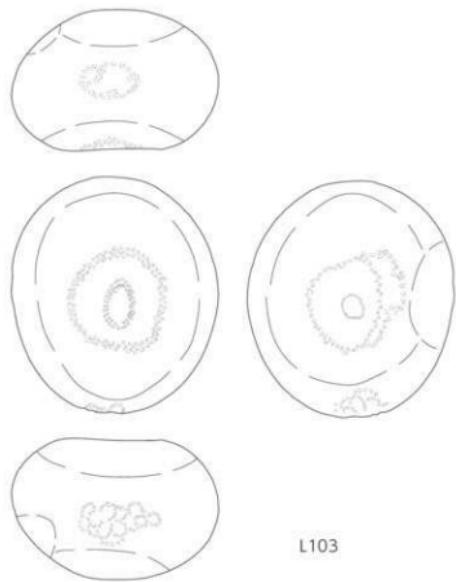
L102



L101

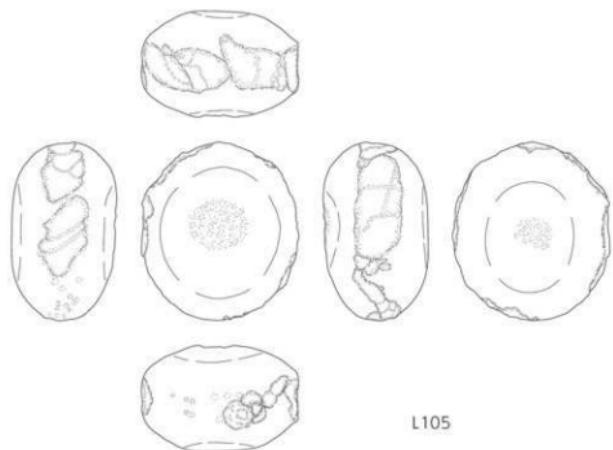


第 85 図 包含層出土石器 16

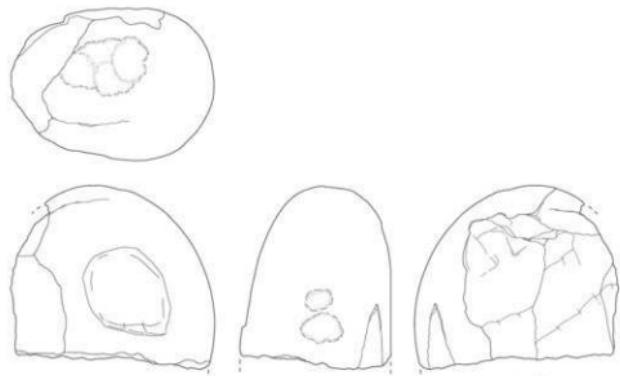


第 86 図 包含層出土石器 17

0 12 10cm



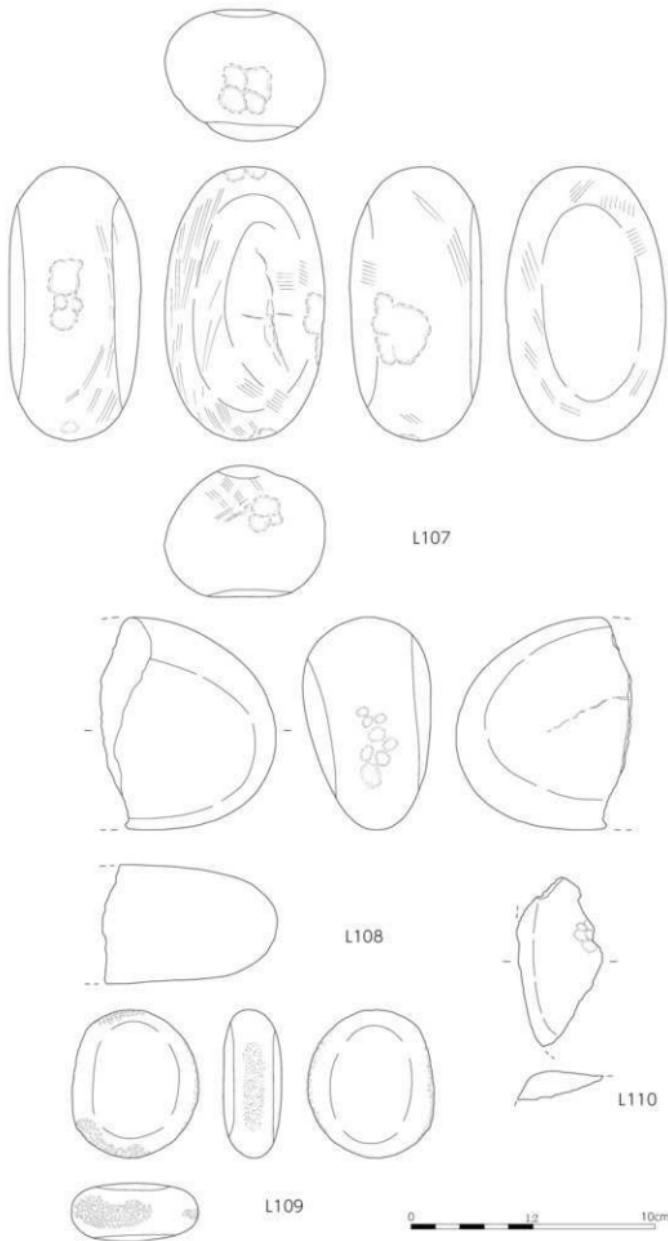
L105



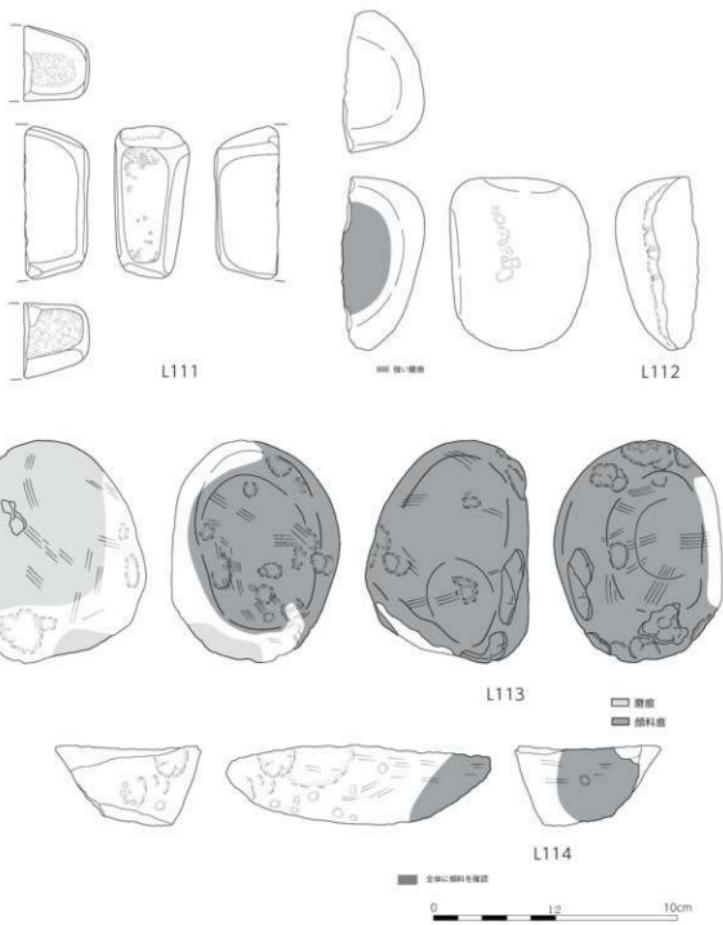
L106

0 12 10cm

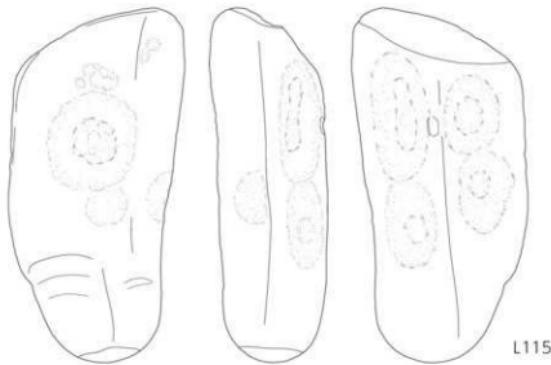
第 87 図 包含層出土石器 18



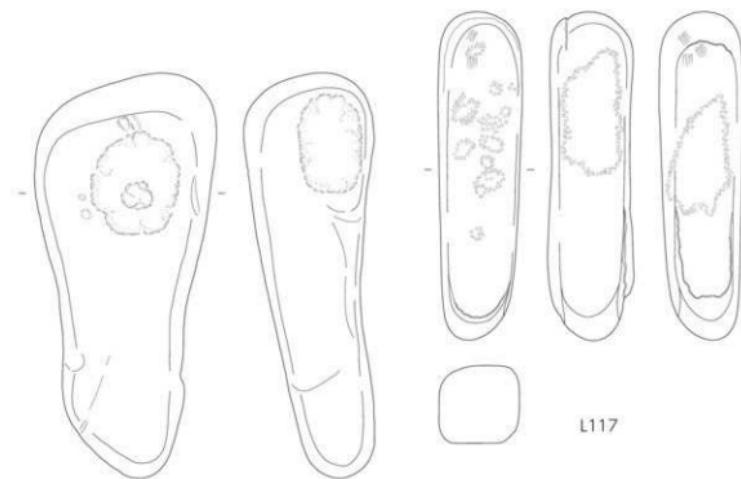
第88図 包含層出土石器 19



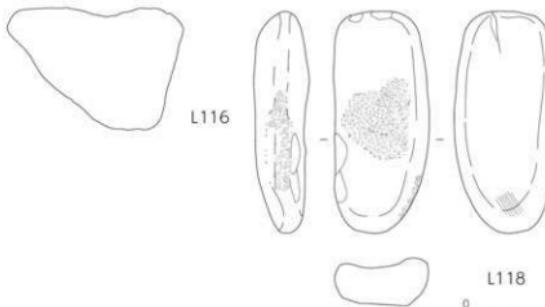
第 89 図 包含層出土石器 20



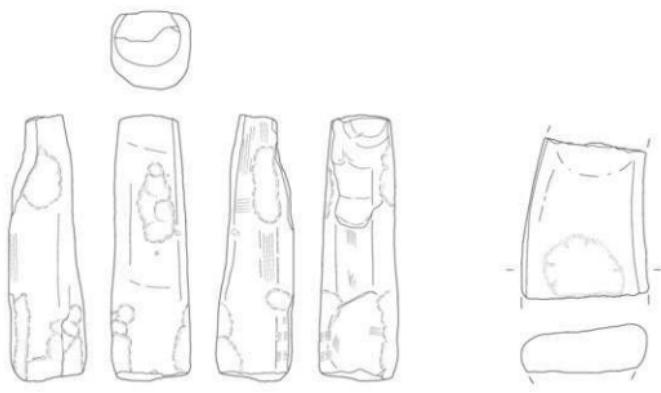
L115



L117

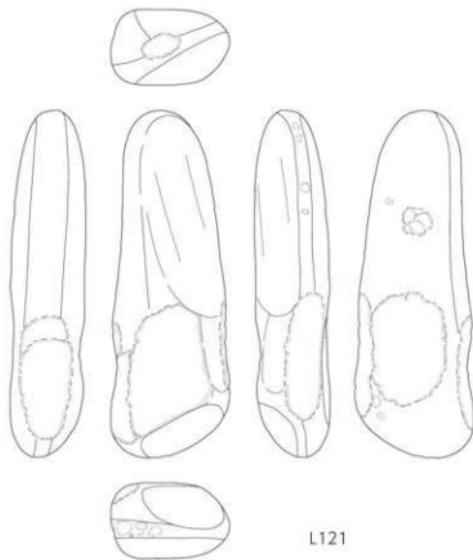


第 90 図 包含層出土石器 21



L119

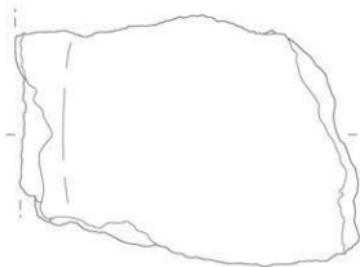
L120



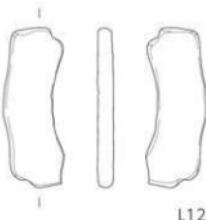
L121

0 10cm

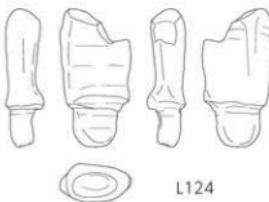
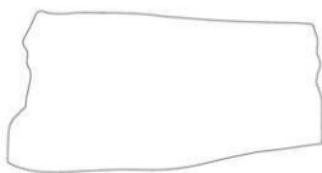
第91図 包含層出土石器 22



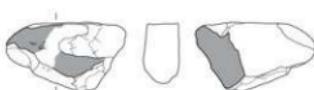
L122



L123

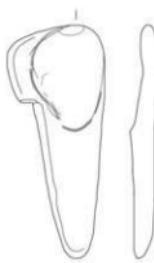


L124

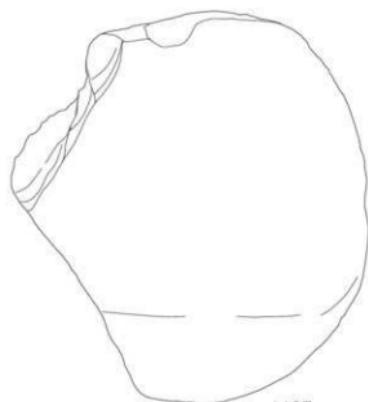
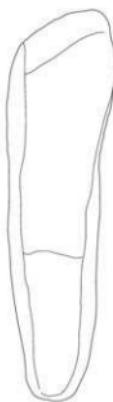


L125

0 23 5cm



L126



L127

0 12 10cm

第92図 包含層出土石器 23

第16表 包含層出土石器観察表

標団	調査区	遺構	層位	時代	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
L046					砥石				2950. 00	
L047					砥石				3750. 00	
L048					砥石				3000. 00	
L049	C2		3		砥石	17.55	6.80	8.80	931.26	
L050	D3		1		砥石	8.80	9.10	2.23	216.19	
L051	B3		3		砥石	8.37	7.74	3.10	246.90	
L052	B3		3		砥石	7.32	5.50	2.55	125.02	
L053	C2				砥石	17.25	12.45	4.78	651.71	
L054					砥石	7.06	4.72	3.06	169.46	
L055	D2				砥石	5.50	3.90	3.10	75.65	
L056			4		砥石	8.21	6.52	3.11	165.97	
L057	C3		3		砥石	12.30	4.01	3.08	200.66	
L058					磨石	9.16	5.92	2.42	188.43	
L059					砥石	8.66	5.85	3.87	281.97	
L060					砥石	9.89	6.55	2.13	202.45	
L061		2			磨石	8.40	4.20	3.91	144.40	
L062		2			砥石	8.66	6.33	3.55	190.28	
L063		4			砥石	4.55	2.82	2.30	12.25	
L064		4			砥石	4.02	4.15	2.04	21.96	
L065		4			砥石	3.16	4.24	0.93	5.73	
L066	D3		3		砥石	4.01	2.17	1.95	11.30	
L067			4		砥石	7.20	2.55	1.21	23.19	
L068			3		砥石	5.20	2.85	1.51	26.20	
L069			3		砥石	6.53	2.80	3.07	74.07	
L070	B3		3		砥石	5.25	5.34	4.80	158.58	
L071	C3		3		砥石	5.37	3.38	2.00	53.61	
L072	B3		3		砥石	5.70	3.70	1.55	37.66	
L073			3		磨石	6.34	3.75	3.60	59.51	
L074	C2		3		磨石	4.01	2.90	2.02	32.87	
L075					磨石				1205.50	
L076			4		磨石	175.00	130.10	6.51	2450.00	
L077	C3		3		磨石	7.95	3.77	2.70	72.64	
L082	D6				磨石	9.76	4.27	3.92	270.26	
L083					磨石	5.02	5.25	5.08	152.91	
L084			3		磨石	8.60	5.64	3.44	217.30	
L085	C3		3		磨石	6.40	5.86	3.66	182.62	
L086			4		磨石	5.63	7.06	5.32	266.44	
L087	B3		3		磨石	4.97	4.02	3.60	92.94	
L088	B2				磨石	6.22	5.03	1.51	43.25	
L089			4		磨石	3.85	6.28	5.78	87.04	
L090	B3		2		磨石	8.31	3.64	5.23	151.74	
L091	B3		2		磨石	5.85	1.84	2.73	40.44	
L092					磨石	2.78	5.32	2.70	19.34	

掲図	調査区	遺構	層位	時代	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
L093	D3				磨石	5.03	3.50	2.04	51.33	
L094			4		磨石	3.90	4.93	1.78	30.08	
L095					敲石	14.11	6.86	3.76	513.87	
L096	D3		3		敲石	10.51	7.82	4.38	451.86	
L097	22				磨石・敲石	6.29	4.68	3.55	166.71	
L098			4		敲石・磨石	6.81	6.20	4.70	293.50	
L099	D3		3		敲石	9.83	5.40	6.68	482.60	
L100			1		敲石	12.96	10.81	4.45	1044.34	
L101	B3				敲石	9.41	6.50	5.04	384.08	
L102					磨石	9.91	6.27	4.15	330.20	
L103	B2				磨石・敲石	9.80	8.50	5.80	719.11	
L104					敲石	10.12	6.81	4.66	331.44	
L105	D3				敲石	7.33	6.50	4.33	306.58	
L106	B3				磨石	7.65	8.45	6.30	521.07	
L107	C3		3		磨石	11.26	6.60	5.40	576.56	
L108	C3		3		磨石	8.82	7.27	5.30	456.45	
L109			1		敲石	6.12	5.23	2.41	112.23	
L110	C2		3		磨石	6.94	3.55	1.38	28.64	
L111			1		敲石	6.27	2.70	3.08	79.53	
L112					磨石	7.10	3.42	5.83	168.36	
L113	B2		3		敲石	9.15	6.97	6.72	520.28	
L114	D3		3		敲石	3.30	6.03	10.88	202.77	
L115					敲石	14.57	7.23	4.86	686.48	
L116	D3				敲石	16.60	7.51	5.45	686.48	
L117			1		敲石	13.50	3.50	3.20	279.92	
L118			4		敲石	9.19	3.97	2.24	126.23	
L119	B3		3		敲石	10.96	3.28	3.20	177.88	
L120	C2		3		敲石	6.67	5.25	2.36	138.57	
L121	C3		3		敲石	14.31	4.91	3.10	287.26	
L122	C3		3		台石	7.80	10.68	5.15	700.75	
L123	C2		3		不明石製品	4.97	1.90	0.54	7.64	
L124	D1		3		不明石製品	4.29	2.21	1.20	10.31	
L125					不明石製品	2.03	4.78	0.55	9.06	
L126					不明石製品	7.20	2.85	0.45	5.70	
L127					台石	16.00	14.40	4.20	763.26	

附 篇

下六嘉遺跡群出土の人形土製品をはじめとした 祭祀関連遺物について

【要旨】

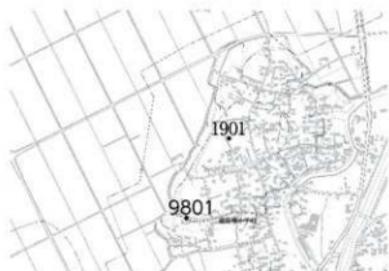
今回報告された下六嘉遺跡群 1901 地点とは異なる地点における不時発見に伴う調査の際、人形土製品をはじめとした祭祀関連と思われる一連の遺物が出土している。

詳細については、今後刊行される町内遺跡調査報告書に掲載する予定ではあるが、今回その遺物自体の重要性と 1901 地点の関連性をうかがう上で重要であるため速報的にこれを報告するものである。

第1節 遺跡の位置

当時県の非常勤職員として調査を担当した当町の前担当からの聞き取りにより遺跡の位置は嘉島東小学校の北側の道路沿いで、西側からの坂を登り切った付近の南側法面と推定される(第1図)。より正確な位置については図面が見当たらないため不明であったが、調査中の写真によりおよその場所を特定することができた。

この付近は、道路北側法面までが下六嘉遺跡群となっており、今回の地点はその隣接地と言える。についてはこの地点を下六嘉遺跡群 9801 地点と呼称することとした。



第1図 下六嘉遺跡群 9801 地点の位置

第2節 調査と発見までの経緯

(1) 調査の経緯

平成 10 (1998) 年 2 月に嘉島町立東小学校裏の道路を改良工事中に甕棺が道路法面に露出しているとの通報を受けて熊本県文化課から非常勤職員が派遣され、不時発見に伴う調査が実施された。調査後図面を町教委に預けたとされるが現存しておらず、遺物のみが残されている。

(2) 遺物発見の経緯

筆者が入庁した平成 28 (2016) 年に当時の調査を行った町の前担当から当該地点で「甕棺が出土し、土鏡が中から出てきた」という話とともに菓子缶に入れられた土鏡を手渡された。また、その他の遺物は遺物収蔵庫となっている上島倉庫のミカン箱に入れられて積まれているのは把握していた。

ただし、出たと聞いていたのは甕棺のみで他の遺物については聞かされていなかったため、



9801 地点近景と調査風景

とりあえず進行中であった他の報告書作成作業を優先させ、これらについてはそのうち整理しようと思い、遺物はそのまま保管された。

令和2（2020）年に至り、平成28年熊本地震関連の予備調査がひとまず収束しつつあることを受けて、令和3年度に町内遺跡調査報告書を刊行するべく予備調査関連の遺物洗浄を開始した。

その際、上島倉庫に積まれたままとなっていた過去の予備調査分の遺物を引き出し、洗いにかけていたところ当該遺物が含まれていることに気づいた次第である。

第3節 出土遺物について

(1) 遺物の出土状況

土層に関する所見が見つからないため、詳細については不明であるが、土製品が含まれるのは1～2層とされており、おそらく表土付近と思われる。また、甕棺とは別に包含層中出土ということで取り上げられたものの中に含まれる。

また、甕棺埋土中からも出土しているとなっているが、これら遺物は道路掘削中に割り取られた際に混ざった遺物の可能性も高く、原位置は留めていないものと思われる。

(2) 出土遺物

本調査区から甕棺に伴う破片及び副葬品？、包含層からは弥生土器、古墳時代の土師器・須恵器、古代の土師器・須恵器、中世以降の陶磁器が出土している。中心は弥生時代から古墳時代にかけてとなる。

第4節 出出土製品について

出土した土製品には人形、動物形、袋状鉄斧形、鉢形、高壺形？、堅杵形、器台形？がある。破損品が多く、完形に戻らないものもあるため今回掲載するのは完形かそれに近いものに留めるが、破片の多くはかつては何かのパーツであったものが複数あり、付近には潜在的にまだ多くの土製品が存在していたことをうかがわせる。

(1) 人形土製品 [写真1, 2]

2点出土している。1は顔の表現がはっきりとした人形である。帯状の土塊を折りたたんで棒状にした痕跡が脚部内側に見られる。本来これは調整により消されるものであろうが、その部分を省略するなど手捏ねらしさが垣間見える。頭部は作り込まれており、耳・鼻梁をつまみ上げて作り出し、工具の刺突により目・鼻腔・口を作り出している。首は頭部分離を防ぐためがあまり明瞭ではないが、指先及びヘラ状工具のケズリにより胸部との区別が計られている。



1- 人形土製品



2- 人形土製品

一方で胸部以下は、顔の詳細さに比べて足は簡素であり、背に至っては指頭圧痕が明瞭に残り、脚は足先を簡略に曲げて平たく伸ばしたばかりは特に表現がなく、極めつきには手がない。また、意図的なものか不明であるが、両足の間には会陰部状の穴が穿たれている。表現によるものか、設置の際に地面に立たせる目的で穿ったものの可能性もある。性差表現がないため性別については不明である。

2は、男性形土製品である。1に比べて調整の粗さも相まってごつごつとした印象を受ける。頭部を欠いているため説明は胸部以下となるが肩らしきものと胸のくびれ、陰茎を表現しており男性と判断される。

脚部は、粘土紐が折りたたまれて棒状となるが先述のものと同様に内側の調整が省略され、境目が残る。足先は、親指の腹と人差し指の第1～2関節あたりで挟み込むようにして平たく伸ばすことで表現する。なお、太もも～胸部及び背面には上下方向のハケ目が残る。

また、1と同様に手は表現されていないほか、臀部に棒状工具で凹みを作り出されている。これも設置時の支えを入れるものためか。

ちなみに欠いた頭部の境界付近は折損痕から判断するに両肩を巻き込みつつ一様に折れている。偶発的ではなく意図的に頭部を欠くものか。
(2) 動物形土製品【写真3】



写真3-動物形土製品

1点出土している。棒状の土塊を曲げて頭部としつまみ上げて鶴冠状に尖らせ、前方も合わせてつまみ上げたのち口と鼻を分離させるよう切り込みを入れてある。首は頭部を折り曲げて作った部分がそのまま残置され、肩にかけて異様に括がる突起状のものを認める。胸部も頭部と同様に粗く手捏ねで上方に湾曲した背部と腹側に向けてややすぼまる形が表現されている。尾部は胸部からつまみ上げられて平たく長めに飛び出す形状となる。脚部は4本いずれも欠損しており、胸部からつまみ上げられて作り出された腿部は残存する。脚の大部分は別の土塊から接合されたと見られるが、癒合が弱く右前脚を除いては焼成前もしくは焼成中に折損したのではないかと思われる。一方で焼成は良好である。

これらを総合すると細長い頭部と、上方に湾曲する背部、4つの脚、広がった尾を持つ。これらの特徴からウマなどの哺乳動物を思い浮かべるが、特異点としては首あたりに括がる襟状の突起である。この突起により判定に際しだけ大きな障害となり、結果的にこれが何を模したものかわからない。四つ足でなければ鳥のようにも見え、異形である。

(3) 袋状鉄斧形土製品【写真4】

1点出土している。4は、初め形状不明の土製品もしくは組み合わせ型のものであると思っていたが、下端部が生きており先端が尖るように作り出されていること、裏面の返り状作り出し部が袋部を模したものであることに気づき、袋状鉄斧形とした。

刃部は肩は無く裾広である。胸部からつまみ上げられて平坦・幅広に整形される。袋部は刃部同様胸部からつまみ上げて折りたたむことで袋



写真4-袋状鉄斧形土製品

部分を表現している。

(4) 鉢形土製品 [写真5]

2点出土している。は口縁が直立する鉢形で輪積み整形で口縁付近まで作り出し、その後口縁をつまみ上げて口唇部を細く仕上げている。内器面はナデて器面を整えている。外器面も同様にナデているが内側に比べて粗く、指頭圧痕が一定方向で回転されたように残っている。底部は工具で切り離された後その痕をナデ消している。

(5) 壊柱形土製品 [写真6]

一見すると何かの脚部と捉えられがちであるが、両端は生きており、平坦面を意図的に作り出していること、中央付近がくびれるように作られていること、両端は肥大するようになっている点から壊柱を想定したものであるとした。

(6) 鏡形土製品 [写真7]

壊棺覆土中からとあるが、壊棺中には多量の遺物が紛れ込んでおり、壊棺の副葬品というよりはこれら土製品が混入したものと考えられる。円盤状に仕上げた粘土板の中心部をつまみ上げて鉢を模した部分を作り出す。鏡面にあたる部分はやや肥厚して凸面状を呈するが意図的なものであるかは不明である。

(9) その他

特定の形状でないか破片類と考えられるもの

である。棒状のものが多く、何らかの足もしくは杵などが想定される。

第5節 小結

これらの出土した土製品群に目を奪われた。初めその存在が確認された時、人形と動物形のみであったため時期についてはよくわからない状態であったが、全容がわかつてくるにつれ当初想定した時代よりもかなり下ることがわかつた。

特に袋状鉄斧形が確認されたことでこの土製品が古墳時代に位置づけられた。また、壊棺内から出土している鏡形土製品についてもこの時期のものが混入したものではないかと推測する。詳細についてよく検討したところ、次に示すような傾向が見られる。

(1) 2種類の胎土

土製品の胎土や焼成後の色調によって大きく分けて2つあり、I群：褐色の土師器様を呈するもの、II群：灰～黒褐色を呈する一群である。

これらに何が含まれるかを例挙すると

I群：人形、鉢形、鉄斧形、壊柱形

II群：人形、動物形、鉢形、器台形、高壺形、

鏡形

となる。

II群の方が器種が豊富である。また、胎土中の混和材にII群には見られない褐色土粒がI群のものには含まれる。

器種という観点から見てみるとI群には斧や杵などの生活上必要な利器が、II群には鉢や器台などの供膳具、鏡と祭祀において使用される



5-鉢形土製品 1



写真 6- 積杵形土製品



写真 7- 鏡形土製品

さて、この時期矢形川の対岸にある北甘木台地と井寺丘陵には多くの古墳が造営される。その一方で下六嘉遺跡群のある下六嘉丘陵では墳丘を有する古墳は今のところ確認されていない。北甘木丘陵における古墳のように後世の耕作に伴う削平により墳丘を失っている可能性は考えられるが、墳丘を有する古墳自体が存在しない可能性もある。

一方で石棺は確認されているため、これらが古墳時代に属する可能性も十分に考えられる。今回、下六嘉遺跡群 1901 地点で古墳時代前期の遺物及び遺構が確認されたこと、9801 地点で祭祀遺物が確認されたことを考慮するとその可能性を裏付けるものと考える。

また、9801 地点の付近は現在でも水が湧く場所に面しているという性状を考えても、これら祭祀遺物は水に関連したものという思いを強くしたものである。

【参考文献】

玉名市教育委員会 2009 「両迫間日渡遺跡」玉名市文化財調査報告第 19 集

品目が目立つ。また、ともに人形を有する点も興味深い。技法的には大きな差が無く、同時期のものと推定されるが、それぞれ違う胎土を用いて器種を分けているとも考えられる。これが何を意味するかについては現時点では不明であるが、何らかの意図があってそれぞれ異なる胎土で作成されたものと考える。

(2) 類似例

9801 地点で見られるようなミニチュア土器が複数見られる例としては、玉名市両迫間日渡遺跡でミニチュア土器に伴って鏡形土製品及び玉類、須恵器壺蓋、剣形石製品、有孔円板などが出土し、(4 世紀末~5 世紀末、文献・1) や福岡県八女市の南中学校校庭遺跡(6 世紀)で似たような組成と器形のものが出土している。

(3) 嘉島町における古墳時代遺跡

総括

第1節 下六嘉遺跡群 1901 地点 での調査結果について

今回の調査では畑の一筆地内、さらには住宅建設の範囲内という限られた面積の中から膨大な遺物が遺構とともに出土した。これらの情報から様々なことを推察できる。下六嘉遺跡群の本格的な調査はこれが初めてであったが、その遺物量にただただ圧倒されるばかりである。

遺跡の時期は縄文時代後期～古墳時代前期にかけてであり、ピークは弥生時代中期及び古墳時代前期の二つにあると考える。

特に弥生時代中期の遺物が割合多く見える。加えて壺棺の存在を窺わせる破片の出土も見られたが、棺を納めるための土壙を確認できなかつた。

さらに古墳時代の住居に切られる形で円形周溝状遺構が確認された。当初は周溝墓の存在を疑ったが周溝で開われる内部区画に土壙ないしは石棺等の埋葬主体は認められなかつた。

古墳時代には住居及び土器溜まりが確認された。S10は土器の廃棄が行われた結果とみることができ、破損品が多数ではあったが中にはほぼ形を保つまま出土したものも見られた。

第2節 遺構・遺物について

1 円形周溝状遺構について

本遺跡から確認された円形周溝状遺構は、周溝墓や古墳と異なり埋葬主体を有しない点と陸橋が存在せざつながっていること、利用されていた時期の遺物をほとんど伴わないなどの特徴を指摘できる。

矢形川対岸の上官塚遺跡では多くの墳丘を失った古墳を土地区画整理事業に伴う調査により確認しているが、それはもれなく陸橋を有し土壙・石棺・石室など時期によって異なる点は

あれど埋葬主体が1つ以上存在するものであつた。

円形周溝状遺構は熊本県下でも同様の事例が認められ、前述したように共伴する遺物がほとんどないことから時期特定に決め手が無く、縄文時代や古墳時代、中世など様々な時期が推定されている。

実際、根拠となるものは遺構から出土した遺物に依拠するものであり、今回のように古墳時代の住居によって切られるなど明確な切り合い関係に無ければその時期を特定するのは難しいものであろう。近年この遺構の発見例が増加しつつあり、およそ弥生時代に属すると見てよさそうである。

2 土器溜まりについて

遺跡で確認された土器溜まりについて、S10に着目してみると、ほとんど古墳時代前期の遺物で占められている。弥生時代のものも一部含まれてはいるが、形成されたのは古墳時代前期と見ることが出来る。

時期をより特定していく上で有用なのが壺と高坏であり、この遺構からも出土している。

壺については弥生時代終末から引き継いでいる長胴壺は見られず、やや長胴の名残を持った球形丸底壺を中心としている。

高坏も坏部の下半が丸みを帯びる・角張つてはいるが外反する口縁との境界が明瞭なもの、S10を切り込む形で入るS20内に見られる坏部における上下の境を失い外反する口縁と一体化した高坏及び小形丸底壺とのセット関係にあることから、S10は古墳時代前期前葉～後葉にかけて、S20は同前期後葉にあたると考える。

3 砥石について

遺跡から多くの砥石が出土した。これら砥石

には大きさや形状からいくつかの傾向が見られる。惜しむらくは遺構に伴わないものが大半であり、時期については不明とせざるを得なかつた。

4 敲石について

本地点から多くの敲石が出土した。多くは円形・棒状のもので、先端・周縁部に敲打痕が認められるものであるが、一部には撥状に用いることによって生じる中間～先端にかけて偏在する敲打痕を持つものまであった。

具体的な用途については類推の域を出ないが、工具的な用い方をしているように思われる。

5 被熱したと見られる一連の遺物について

出土した遺物の中には火を受けたと思われる痕跡を有するものが見られ、またそれによって破碎している例もいくつか見られた。器種は敲石・磨石・砥石と規則性はあまりなく、偶然焼けた可能性も考えられる。

時期区分		地点			対応遺跡	備考
		下六嘉丘陵 中低地	北甘木丘陵 高地	井寺丘陵		
弥生時代	前期					
	中期	前葉	■	■		(下) 下六嘉遺跡群 (北) 上官塚遺跡 塔ノ木遺跡 (井) 井寺遺跡 井寺古墳
	中期	後葉				
	後期	前葉	■	■		(下) 下六嘉遺跡群 (北・低) 上官塚遺跡 塔ノ木遺跡 (北・高) 二子塚遺跡 塔平遺跡 (井) 井寺遺跡
	後期	後葉				
	前期	前葉	■			(下) 下六嘉遺跡群 (井) 井寺遺跡
	中期	前葉	■			(下) 宮ノ木石棺群? (北) 上官塚遺跡 塔ノ木遺跡 町頭遺跡 鶴原古墳群
	中期	後葉				
	後期	前葉	■			(井) 井寺古墳
	後期	後葉				

■ 明確に存在（多）
— 明確に存在（少）
- - - 存在の可能性（高）
- - - 存在の可能性（低）

第 93 図 弥生時代～古墳時代にかけての嘉島町に所在する各丘陵上における存続時期

第3節 下六嘉遺跡群について

1 下六嘉丘陵の評価について

これまで調査が実施されておらず詳細についてはよくわかっていない状態であったが今回の調査を通して下六嘉丘陵上にある遺跡の性質が見えてきた。

2 対岸の遺跡群との対比

本遺跡が存在する下六嘉丘陵、上官塚遺跡が存在する北甘木丘陵、井寺遺跡がある井寺丘陵それぞれに弥生時代中期の集落等が存在することが確認された。

また、二子塚遺跡を初めとした弥生時代後期中葉～古墳時代前期初頭にかけての集落が丘陵の頂部付近など比較的標高が高い部分に形成される傾向にあることは、当時の情勢を反映したものと考えられる。

一方、下六嘉遺跡群では弥生時代中期初頭～後期初頭あたりまで存続した後、古墳時代前期前葉に至るまで断絶が認められる点は非常に重要である。そして、その空隙を埋めるのが二子塚遺跡である。

対岸のやや標高が低い上官塚遺跡の調査を進めているうちに感じていた、上官塚では中期が優勢（後期はほぼ無い）なのに対して二子塚では後期が優勢（中期はあまりない）になることを間接的に立証できた。

これが何を意味しているかについては上官塚等、北甘木遺跡における整理作業の進展を待ってから考察していくこととしたい。

第4節 下六嘉遺跡群 1901 地点について

最後に、本地点が下六嘉遺跡群においてどのように位置づけられるのか考えてみたい。

狹小な調査区の中から夥しい土器片が出土したことは、当時の人の生活を反映しているものと見え、相当数の人口が存在していたと考えられる。他方、遺構密度としてはあまり高くなく、この限られた範囲で切り取ったのは集落の端部に当たるものと見ている。

集落の中心域として推定されるのは、丘陵の

最頂部である六嘉神社周辺ではないかと思われる。ただし、この付近は削平が進んでおりこれまでほとんどの地点において遺構を確認するには至っていない。また、附篇でも触れたように下六嘉丘陵の低地付近、現在でも湧水地点である場所においては、古墳時代に水に関わる祭祀が執り行われていたことを示している。

下六嘉丘陵における集落展開がどのようなものであったか、まだ情報が足らず明確な推論を持つに至っていないが、1901 地点が集落の縁辺に近いと推定するのであれば六嘉神社周辺がその中心と考えるのが自然であり、遺跡西側にある車川に面する崖面を利用した集落ではないかと推測する。また、下六嘉遺跡群とその北側にある西光寺遺跡との間に小さな谷状地形を有しており、これも天然の大溝として利用していた可能性は高い。

以上の関係にあって遺跡の南側と東側は緩斜面が続くものであるため、防御施設としての環濠が存在するというのであればこの2方に展開するものか。

いずれにせよこれ以上の考察は推論の域を出ないため、今後の調査事例の増加を待って再度考察を行っていく予定である。

【主要参考文献】

嘉島町教育委員会『井寺遺跡』嘉島町文化財調査報告第4集 2019

嘉島町教育委員会『町頭遺跡 3区』嘉島町文化財調査報告第6集

2020